内閣総理大臣賞

税金で持続可能な社会へ

札幌市立厚別南中学校２年　平井　菜花

「震災復興を風化させてはいけない。」

先日、歌手のさだまさしさんのコンサートへ出掛けたときに聞いたメッセージだ。さださんは更に「被災した方々のために自分が出来ることは、歌でみんなを元気づけること。」と言っていた。八月には東北でチャリティーコンサートを開く予定だという。

先ほどのさださんの言葉で、一つの問いが私の心の中に浮かんだ。それは、「震災が起きてから、自分は何か行動できただろうか」ということだ。振り返ると、震災が起きた年は募金活動に協力したが、その後は何もできていなかったのではないか。そんな自問自答から、「支え続ける」ことの難しさや大切さに改めて気がついたのだった。「ずっと続けられる復興支援って何だろう。」と母に尋ねたところ、「お給料の中から復興特別税を納めているよ。」と教えてくれた。「復興特別税」初めて耳にする税金の名前だった。

復興特別税とは、被災地の復興のために使うことを目的とした税金で、法人税、所得税、住民税の三種類がある。復興特別税は、仮設住宅の建設、がれきなどの処理や学校の復旧に使われるそうだ。中でも復興特別所得税は、平成二十五年から平成四十九年までの二十五年間に渡って納める税金である。

東日本大震災から四年が経過した。もうかなり復興が進んでいるはずだ。そう思って調べてみた。すると、道路や施設、交通などのハード面の復旧は九割以上進んだ一方で、仮設住宅で暮らす人は未だ十万人以上、復興住宅はわずか二％しか完成していないという現状に、目を疑った。震災から四年経ってなお、不安を抱えたまま暮らしている人々が大勢いるというのだ。にもかかわらず、震災復興についてメディアで取り上げられる機会もめっきり減り、私自身も忘れかけていたことに気付き、愕然とした。そして、復興特別税の二十五年間という徴収期間は、一度壊れた町全体が元の姿に戻るまで支え続けることの意味を教えてくれているような気がした。

「何かしたい。」と強く思っても、人の思いはときに薄れたり、遠ざかったりしてしまう。だからこそ、「税金」という支援が必要だと強く感じた。「税金」は持続性のある確かな財源であり、復興のための揺るぎのない土台になっているからである。

税金の使い道は幅広く、今までもこれからも社会の基盤を支えていくものだ。今回、私が「復興特別税」のことを知り、税金の意義を実感したように、私達若い世代は、税の使い道について正しい理解をもつことが必要不可欠だと思う。一人一人がしっかりと教育を受け、様々な経験を経て、主体的に行動できる人間に成長すれば、やがて大人になったときに、納税を通して互いに支え合うという循環が持続するのではないだろうか。そんな未来予想図を胸に、これからは東北の復興に関心を寄せながら生活していこうと思う。

総務大臣賞

日本で当たり前のことが

古河市立三和北中学校２年　内田　千裕

「日本は税金が高くて。」
と近所に住んでいるパキスタン人のアリさん。ある日、我が家の前を通りかかったアリさんが、車の掃除をしていた母と私に話しかけてきた。「こんにちは」のあいさつから、「いいお天気ですね」ご近所さんとのお決まりの会話から、車の話、そして自動車税の話になった。その時の一言である。しかし、アリさんの言葉や表情には、日本での生活に対する不平不満は感じられなかった。

数年前にアリさんは仕事で、腕に大けがを負った。手術をしても、治りが悪く、入退院を繰り返していた。その時も、思ったほど医療費がかからず、安心して治療に専念できたそうだ。アリさんの娘、ラニヤちゃんは、小学校三年生の時にお母さんと一緒にお父さんのもとに引っ越してきた。私とラーちゃんは同級生で、一緒に小学校に通っていた。転校してきた初日、何も持たずに席に座ったラーちゃんにも、すぐに教科書が配布された。「外国の人たちや子どもたちも、私たちと同じように治療が受けられたり、学校で勉強したりできるんだ。」と意識するきっかけとなった。

難しい勉強にも弱音をはかないラーちゃんから、日本での当たり前が、世界から見ると、とても恵まれていることも教えてもらった。彼女の出身国、パキスタンでは識字率が約六割、小学校の卒業まで在学する率が六割に満たないこと。さらに、女性の識字率も在学率も、男性に比べて一割以上低いこと。のちに、パキスタンで女性が教育を受ける権利を訴える運動を行ってきたマララ・ユスフザイさんが、史上最年少の十七歳でノーベル平和賞を受賞したニュースを聞いた。国連本部でのマララさんのスピーチとラーちゃんの言葉が重なって胸に響いた。日本では子どもが教育を受けることや女の子が教育を受けることが当たり前だが、世界ではその当たり前のために、命をかけている少女がいることに、衝撃を受けた。ラーちゃんは、恵まれた日本で一生懸命に勉強して、将来は教育に関する仕事に就きたいと言っていた。

医療の面でも教育の面でも、豊かで安心した生活が送れる日本の良さを、外国の友達に教えてもらった。そして、改めて税のありがたみを知ることができた。税は、私たちの健康や安全な生活を守るため、暮らしやすい環境を整えるためのものであり、私たちの日常生活の中で、欠かせないものである。それらが理解できれば、「税金が高くて。」という言葉の中に、不満は含まれていないことが分かる。「義務としての納税」という気持ちではなく、「恩恵を受けるための納税」と考えればよいのではないだろうか。さらに、高く感じられる税金も、私たちの当たり前の生活を維持するために「国や市町村に貯金している」と見なせば、税に対するイメージも変わってくると思う。

財務大臣賞

瞳の数だけ、輝く未来

熊谷市立富士見中学校３年　納見　真永

我が家の母子手帳は、金庫に納められている。それだけ、母にとっても私にとっても大切な宝物なのである。お腹の中で芽生えた新しい生命への最初のプレゼントは、母子手帳であった。やがて、ワクチンや健診を当たり前のように無料で受け、整備のされた安全な遊具で母の押すブランコに揺られ、真新しい教科書を涼やかな教室でめくり、医療費は、いつだって無料だった恵まれた学生生活。

三年間、税金の作文を真摯に書き続けてきた私も、この冬卒業となり、中学校生活最後の夏となった。だからこそ、これまでの十五年間の歩みを、ゆっくりじっくり考えてみた。

私は、幼稚園から今現在に至るまで、無欠席無早退を貫いている。休んだ事は、ない。その一つの理由として医療費が無料だった事があげられる。母は、中学課程まで無料のこの熊谷市の制度に深い感銘を受けている。急な頭痛や高熱、風邪で声も出なかった時、いつだって病院に無料でかかれ、その上適切な薬まで頂けるのだから。母の子供時代には家庭環境の為に、保険証すらなく、医療費が支払えず、学校を長期休暇する人は沢山いたのだと言う。まさに自力で治す野性の精神。

「何ていい時代なのかしらね。」病院での帰り道、母は決まってそう言う。この健康な体は税金での支えあってのものであり、私の何よりかえがたい誇りと勲章である。母子手帳には、そんな私の健康履歴書がギッチリとつまっている。

思えば人間は、この世に生を受けてから、その命の灯が消えるまで、税金によって支えられ、与えてもらって天寿を全うするのだと思う。どんな時にも、どんな生活環境の人にも平等に医療サービスが受けられるのは、当たり前のようで、なかなかできない事である。市で配布されるガン検診クーポンで命拾いをした私の知人のおばさんは、その天国と地獄での境目を目の当たりにして一病息災で、更に健康に気をつけるようになったのだと言う。おばさんが言うには、人は命拾いして初めて見えてくる物が沢山あるのだそうだ。ふと周りを見渡すと、幼い頃揺られたブランコは、新しく頑丈に。薄暗くて入るのも敬遠していたトイレは、子供にも入り易い水洗便座に。ひび割れていた道路は舗装され水平に。税金の恩恵は、当たり前として人々の生活にひかえめに埋もれているのだ。

将来子供を産み、私が母となる時代にも、こうやって子供とお年寄りに優しい日本であってほしい。その為には、深刻な少子化について日本人全員で今一度考え直さねばならない。人が人を産み、人が税金を納め、人が人を支え、人が日本を潤す。自国民を増やしていかねば、個々の負担は増大していく。母子手帳を手にした時の感動を、一人でも多くの女性に味わってもらいたい。熊谷を埼玉を、日本を支えていくこれからの未来は、私達の世代に託されている。改めて責任を痛感した。

文部科学大臣賞

税金と責任

大阪市立淀中学校３年　渡辺　真実

私は今回「税の作文」を書くにあたり、税のことをもっと詳しく知りたくて国税庁のホームページを訪問しました。すると、一番最初に飛び込んできたものは「国税電子申告・納税システム（e-Tax）という言葉でした。自宅からでもインターネット回線を通じて税金の申告や納付ができる仕組みであると知り、便利なものだと感じましたが、それ以上に気になったのは「Tax」という英単語でした。というのも、私はよく両親と商店街などに行くのですが、街を歩くと「TaxFree」「DutyFree」と書かれた看板や表示がたくさん目につきます。両親に聞くと、Tax も Duty も同じ税という意味で、TaxFree と書いてあるのは「免税店」で外国からの観光客がここで買い物をしても税金がかからないんだ、という風に教えてもらいました。その時はあまり深くその意味について考えませんでしたが、今回 e-Tax という言葉を知り、国税庁のホームページなどインターネットでより深く調べていくと、あることを知りました。それは、Duty と Tax は同じ「税」という言葉であっても、その意味は大きく異なるということです。

辞書やサイトなどで調べると、Tax はもちろん「税」という意味ですが、そのほかにも「負荷」「重荷」という意味があるようです。それに対して Duty には税のほかに「責任」「義務」という意味があります。負荷や重荷というと誰かに背負わされるものと強く感じますが、責任や義務は自分から背負い果たすものという感じで、それぞれの意味は大きく違うと思いました。また学校でも教わったのですが、大昔の租・庸・調や江戸の年貢、災害やお米の不作、過酷な労働、一揆など、昔の税は重く辛いものというイメージが強いので、昔の税や年貢は Tax の意味に近いと思いました。でも現在では税はお金に変わり、その基準も農産物など不安定なものから、土地や財産、収入などを基準にみんなが公平に税を負担する制度とすることで、税は重荷ではなく、みんなが公平に税金を納める義務と責任を負うものという意味で、現代の税はむしろ Duty の意味に近くなったのではないか、と考えました。

さらに調べると、Tax は食品や洗剤など消費されてなくなるものにかかる消費税、Duty は機械など消費されない輸出入品にかかる関税、という風に大きく分けることもできるとわかりました。そして、それ以上に税という言葉が日本でも海外でも重要な意味を持っていることや、税の歴史を感じることができたのはとても貴重な発見でした。

税は医療や福祉、行政など私たちの社会で広く公平に使われ、私たちはそのおかげで便利な生活を送ることができています。Duty が持つ意味の通り、税をきちんと納める責任と義務を果たす大人になっていきたいと思います。

僕にできること

北海道教育大学附属札幌中学校１年　　石金　伸英

僕が小学生の頃のことです。学校から帰る歩道には一メートル近く雪が積もり、車道よりずっと高くなっていました。みんなが歩く道の真ん中は踏み固められているのですが、端の方は柔らかくなっていて、友達が足を取られてズボッとはまってしまいました。深い雪に太ももまで埋まり、他の友達と三人がかりで引っ張り上げようとしても救出できませんでした。結局、交番へ助けを呼びに行き、おまわりさんにスコップで雪を割ってもらいやっと助け出すことができました。僕はその時「どうしてちゃんと除雪しておかないんだろう」と思いました。

今回、僕は税金について調べて除雪の費用も税金でまかなわれていることを知りました。税金は国民の生活や健康を守る会費のようなもので、集めたお金を道路の整備や公務員さんのお給料、災害の復興など、あらゆる場面で使っているということが分かりました。除雪の費用も限られた予算の中から出されているため、あの時の除雪も「できなかった」のだと思いました。

去年の四月から、僕にとって一番身近な消費税が八パーセントに上がりました。「物の値段が上がって嫌だな。税金なんてなくなればいいのに。」と思っていました。しかし、税金について知るうちに、もしなければ大変なことになると感じました。税金は日本の歳入の半分以上を占めてはいますが、それでも社会の整備には足りず、国債という形で国民からお金を借りているそうです。日本が世界一の借金大国だということを知り、ショックでした。税金がなくなったら歳入は国債だけになります。税金の役割はとても大事なんです。税金がないと、雪が積もって車が走れなくなり、交番もなくなり、公立学校すらなくなってしまいます。「税金なんてなくなった方がいい」と勘違いしてはいけないと思いました。

一方で、僕たちの生活、国の命を支えている大切な税金が、きちんとみんなのために使われていなかったらどうでしょうか。僕はとても悲しくなります。実際、国会中継でダラダラと審議が行われている場面を見たことがあります。日本中のいろいろな立場の人たちのことを全部考えて使い道を決めることはとても難しいことかもしれません。でも、自分の給料だと思えば、もっと何に使うべきか必死に考えるようになるのではないかと思います。

今の僕にできることは、せめて自分に使ってもらった税金を無駄にしないということです。学校で一生懸命勉強したり、健康な身体を維持したりして、立派な大人になることだと思います。納めた税金よりも使ってもらった税金の方が多いことを、これからも忘れないようにしたいと思います。

当たり前の生活を安心して

能代市立東雲中学校３年　　大髙　憧子

「来年からは、住民税も納めなきゃ。」

初めての給与明細書を手に、四月から社会人の仲間入りをした上の姉がつぶやいた。初給料だからもちろん笑顔なのだが、一つ一つの項目を確かめる目は真剣だった。両親に報告に来て、三人の明細を広げて比べていた。累進課税制なので、両親よりは少ない額だが、姉はちゃんと所得税を納めていた。久しぶりに自分の明細書にじっくり目を通したという母と対等に話す姉が、格好良く見えた。また下の姉は、今年二十歳で国民年金の被保険者になったが、大学生なので学生納付特例制度を受けて、申請書を提出したという。その上、年金を受け取っている祖母も、所得税を納めているということがわかり、時々消費税に関わる私も合わせて、税金をより身近に感じる姉の社会人生活スタートの年となった。

私が税金に関心をもったのは、小六の租税教室で、税金のない世界の大変さを知ったのがきっかけで、中一では、国の借金についての新聞記事をもとに、国の歳入の五割以上が税金だということを知ったり、八％に上がった消費税について調べたりした。また、福澤諭吉が『学問のすすめ』に、「税金とは、国民と国との約束」と記していたことは、さすが一万円札の肖像だと納得したり、税の国際比較で、日本は主要先進国よりも国民負担率が低い水準だということに驚いたりした。

中三になった今、一番の関心事はやはり、新国立競技場の巨額の建設費や維持費関連であり、大切な税金の多くが使われてしまうということについてだった。でも、このことを詳しく調べていくうちに、私にとってもっと心配なこと、考えていかなければならない話題が出てきた。それは、少子高齢化社会と税金との関わりである。年齢別人口の割合を見てみると、六十五歳以上の高齢者と二十歳から六十四歳までの働き手の割合は、約二対五であるが、私たちが社会のリーダーとなっていく二〇五〇年には、二対二．五となるのだ。言いかえれば、高齢者二人に対し働き手五人で支えている現状が、三十五年後には、その半分で支えなければならないことになる。つまり、社会保障関連費が増えていく中で、その費用を負担する担い手が減っていくというのである。末っ子で、家族に頼ってばかりいる私が、支えていけるのだろうか。私たち世代が、未来の社会の担い手になれるのだろうか。税金は、国民の義務として、法律や制度に沿って公平に確実に納めて行くべきであり、その貴重な使いみちは、国民の代表が経験と能力を駆使して計画し国民一人一人が効率よくむだなく活用するべきであると思った。

姉は夢を叶えて仕事に就き、所得を得て納税している。自分や家族のためはもちろん、一社会人として貢献できる日々を送れることに感謝していると話す。当たり前の生活を安心して過ごすために、公平な納税と給付について考えることができた、特別な夏であった。

税と教育

山形大学附属中学校３年　　小佐野　きらり

「世界がもし、百人の村だったら」という詩を知ってるだろうか。知っていたとしても知らなかったとしても、今すぐに読んでほしい。この詩は私たちが日常で忘れかけている事を教えてくれる。そしてこの詩の一節に、こんな言葉がある。「村人のうち、一人が大学の教育を受け、二人がコンピューターを持っています。けれど、十四人は文字が読めません。」

今、私はクーラーの効いた涼しい教室で、タブレット端末を使って授業を受けている。なんて恵まれているのだろう。こんな素晴らしい環境で勉強ができるのは、日本の大人達が国に税金を納め、そして国が学校に多くのお金を出しているからだ。どのくらいの税金に支えられて私は学校で勉強ができているのだろうか。公立学校の中学生一人当たり、年間教育負担額は約九十九万三千円。高校生になれば、約百万円。私一人では絶対に払えない金額だ。

私たちの教科書には、「この教科書は、これからの未来を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」という言葉が書かれている。確かにその通りだと思う。今の私にできることは、この税金を無駄にせず、一生懸命勉強することだ。学校の授業は、先生方の熱意がガツンとぶつかってきて、私はそれがとても嬉しい。このような熱血な先生方の元で、しっかりとした教育を受けられるのは、大人達が払っている税金のおかげなのだ。私は全国の大人達に、心からのありがとうを伝えたい。

この夏、私は東北大学医学部のオープンキャンパスに行ってきた。立ち並ぶスーパーコンピューターや広いキャンパスに圧倒され、ここで勉強したいと心から思った。さらに私は、東北大学に年間約四百二十億円もの運営交付金として税金が使われているということを知った。そんな莫大なお金が、医学生を医師へと育てる大学の教育や、世界を救う新薬を開発するための研究に使われているのだ。私が者を買うときに払った消費税も、親の仕事の収入から払っている所得税も、日本や世界のために使われている。改めてそれに気づき、とても衝撃的だった。

私の夢は医師となって、世界の人々のために役立つ研究や、難しい病気を持つ人の治療を行うことだ。それが実現するまでには数千万円のお金がかかる。それを支えてくれるのは、日本国民の税金なのだということを忘れないようにしたい。

そして大人になったら、今度は私が日本の子供達を支えることになる。良い教育を受けた子供達がより国や世界を発展させてくれることを願い、納税の義務をしっかりと果たしたい。

そう、日本の未来は、税金によって支えられている私たちに懸っている。その期待を裏切らないよう、一生懸命勉強に励みたい。

税金と人々のつながり

福島市立信夫中学校３年　　渡邊　萌菜

祖父母の家に行く度に、祖父から言われる言葉がある。

「日本は世界で一番の国なんだよ。」

私はいつも、この言葉に疑問を抱いていた。何を根拠に、何に関して日本が一番なのか。続けて祖父は、財布を落としてお金ごと財布が持ち主に返るのは、日本だけだと言った。

では、なぜ日本では落とした財布が持ち主のもとに返ってくるのか。私は、日本人の心と公共サービスの発達が、バランス良く融合しているからではないかと考えた。

落し物を警察に届け、警察が落とし主を探す。私たちにとって、当たり前のことのように思えるこの一連の流れは、決して「当たり前」などではない。人々の善意と警察の活動とが、結びついて成り立つものだ。この何気ない「当たり前」を支えているのが、税金である。

暮らしの安全を守る警察や消防などの活動や教育、福祉など様々な場面で税金が使われている。私にとって一番身近な税といえば、やはり消費税だ。しかし、私の周りの大人は口々に「増税反対」と言っている。確かに税が上がれば、以前よりも一度の買い物で出すお金が多くなるのは事実。でも私は、増税は自分たちにとって、マイナスな面ばかりではないと思う。

なぜなら、私たちが払った税金は、また自分に返ってくるからだ。整備が行届いた街や施設、公共サービスの充実は、税金なくしては成立しないものばかり。これらのおかげで、私たちは心豊かに、安心して幸せに暮らすことができる。そして、整った環境の中で育まれる美しい日本人の心が、世界に誇れる日本の「当たり前」を生み出すのだと思う。

また、昨年私は、福島市が主催するオーストラリアへの海外派遣事業に参加した。何事にも受け身だった私が、この事業を通して広く世界に視野を広げ、グローバルに活躍できる自分に変わりたいと思うきっかけとなった。

しかし、六月に参加した福島市国際交流協会の総会で、私は驚くべき事実を知った。それは、この海外派遣事業に一千四百万円以上のお金がかかっているということだ。参加者一人が負担したのは一万円だけであるから、多くのお金が税金によって賄われていることになる。つまり、私たち中学生の夢や希望が、たくさんの人々によって支えられていたということだ。私はこの事実に、深く感謝の心を抱くと同時に、日本の将来を担う私たちへ向けられたメッセージのようなものではないかと思った。

私はやっと、祖父の言っていた、日本が世界で一番である理由が理解できた。それは、整った環境の中で養われる日本人の心が、世界のお手本となれる素晴らしいものだからだ。私は、この機会に税を納める意義と日本の担う役割について改めて考えたい。税により創られる明日が、明るいものであるために。

姉の命をありがとう

下野市立南河内第二中学校１年　　星　愛優香

税金のしくみについて私は、家族で話し合うことがある。家族で食事をとるとき、私の母から時々「税金ってありがたいね、助かるね。」と聞くことがある。そんな時私は、どうしてかな、なぜ助かるのだろう、と疑問をもった。母から話を聞き納得した。

私の家族は五人家族だ。働き者の父、いつも笑顔の母、頑張り屋の姉、毎日笑顔の私、努力家の妹。平凡だけれど、他の家族とは違う大変な困難を抱えている。それは、私の姉が膠原病という難病にかかっているからだ。膠原病には莫大な治療費がかかり、サラリーマン家庭の収入だけではまかなうのは難しい。実際に保険診療三割でも、姉の治療に使う生物学製剤の代金は一本六万円で、内服薬も月に三万円かかる。診察費を加えると、月に十万円をこえてしまう。これが毎月、何年、何十年と続く。姉の命を支えるには、相当なお金がかかる。両親はこのお金をどうしているのだろう、と私は疑問に思った。

答えは一つだ。国民の皆さんに支えてもらっている。国民が働いたお金を税金として納めた後、それらのお金が難病患者の支援にあてられている。姉には小児慢性特定疾病医療受給者証というものが、栃木県から渡されている。この受給者証のおかげで、実際には姉の病院代は自己負担がゼロである。「なるほど。だから税金はありがたくて助かるのだ。」と私は思った。国民が一生懸命働いて納めた税金が、難病患者を救っている。私も大人になったら、しっかり税金を納めよう。私はこの話をもとに、姉の命は全ての人に支えられているのだと分かり、感謝の思いでいっぱいになった。そしてもう一つ、勉強になったことがある。

それは、姉の体の一部として使われている車椅子だ。これもまた、国民の税金に助けてもらっている。以前、車椅子の手続きの付添いで、市役所に行ったことがある。車椅子を姉の体に合わせて作ると、二十六万円かかり、驚くほど高額だ。しかし障害者の姉は、一割負担で車椅子ができる。九割は市役所が負担してくれる。さて、市役所のどこからお金はでるのだろう。

答えは一つだ。皆さんの税金からでてくる。市民の人が納めた税金が、姉のような障害者の役に立っている。私は母と共に市役所について行き、このようなしくみが分かった。

社会では、人と人とが助け合って暮らしている。一生懸命働いて納めた税金は、人々を助ける。税金で多くの建物や道路もできる。障害者や老人、子供の医療費も支えている。「税金と私達の暮らし」は非常に密着している。税のしくみについて考えた私は、社会人になったらしっかり税金を納めて人々の役に立とうと思った。

「姉の命をありがとう」

支えられたあたり前

太田市立城西中学校３年　　井上　遥加

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。」

私がこの文字に気がついたのは小学校三年のころだった。いや、それまでは単に意味がわからなかっただけかもしれない。そのときは教科書がタダで貰えていることに大変驚き、喜んだものだ。しかし今は「無償で」という文字より「税金によって」という文字の方が目に飛び込んでくる。

税金といっても、パッと思いつくものは消費税くらいしかない。それは消費税が私にとって一番身近な税であり、唯一課せられている税だからだと思う。しかし世の中には沢山の税があるのだということを私はつい最近知った。例えば、自動車を持っているだけでかかる自動車税や土地や建物を取得したときにかかる不動産取得税、収入から引かれる所得税などだ。他にも沢山の種類の税が存在し、お金が動けば何かしらの税が関与してくる。そして集められた税は私達の「当たり前」へと使われていく。授業を受け、お昼になったら給食を食べる。舗装された道路を走る。公園で遊ぶ。これらの私達の当たり前のこと全てに税が関わっている。私達の当たり前は、沢山の人に支えられて成り立っている幸せだったのだ。

最近、友達との会話などで税についての話題を多く耳にする。しかしその大半は税が多い、無駄遣いをしているなどといった否定的な意見である。だがそういった意見は税についてあまり知らない人から多く聞くようにも感じる。私も税について知るまでは他の人の考えに流され、文句ばかり言っていた。しかし学校や病院など､様々な場所で税に支えられているということを知ってから、明らかに税に対する見方が変わった。きっと批判する人もかつての私と同じように、税に対する理解が低いのだと思う。これからの日本の課題として「いかに国民の税への理解度を高めていくか」ということが挙げられる。税に対する考えが変われば、笑顔で税を支払うことの出来るような世の中も夢ではない。

私もあと何年かしたら納税者になる。ある人はこう言った。「大人になるということは、して貰う人から、してあげる人に変わることだ。」今はまだ働いてもいないし、たくさんの当たり前を与えてもらっている立場だ。だが大人になったら今度は自分が、沢山の人の幸せを支えられる立場になりたいと強く思う。だから私はこれからもこの当たり前に感謝をしながら、沢山の勉強をしていきたい。いつか誇りを持って税を納める、そんな未来を目指して。

障害のある方と税金

柏崎市立第三中学校３年　　土田　悠理

「税金」といわれて私がすぐ思いついたのは、「消費税」と「所得税」くらいでした。知っているといっても、昨年の四月から消費税が八パーセントに上がったことや、道路の整備、学校・医療関係等で使われている程度のことしか知りません。所得税についても、働いてもらう給料から、額に応じて税金が引かれるということ程度です。今まで、税金について調べてみようなど思ったこともありませんでしたが、これを機会に両親に聞いたり、自分でも調べたりしてみました。

私の二十歳になった兄には障害があります。障害をもっている人には税金が免除されることがあるそうです。どんなものが免除されるのか調べてみました。所得税、住民税、自動車税、自動車所得税などが控除されるそうです。控除とは『引く』という意味だと初めて知りました。

実際、父の車にかかる自動車税や、車を購入するときの税金が免除になるそうです。

また、高速道路を使用するときも割引されているそうで私は、「それって得しているということ？」と思わず聞いてしまいました。普通の人からみれば卑怯と思われないかと感じたからです。しかし、母と話したら違うことが分かりました。

障害のある兄は、一人では働くことができません。車の免許も取れないし、一人で公共交通機関を利用することもできません。両親が車で送迎するしかないこと、車が必需品になるからだそうです。また、兄が毎日利用している作業所も、兄が支払うのは食費など実費のみですが、お世話をしてくれている人の人件費や施設利用費は税金で賄われているそうです。

両親は、兄を今まで育ててきて、私や弟のような障害のない子を育てるよりもお金も労力も何倍もかかっているそうです。昔の日本では、障害者は長生きしにくかったそうです。

両親共働きで税金もたくさん取られるけれど、兄のような社会で弱い人達には、日本は優しい国であると思いました。

柏崎市では、中学まで医療費が一回五百三十円しかかかりません。これも、未来を担う子どもに対する税金の良い使い道だと思います。大人のように一回三千円とかかかるようでは、もしかしたらお金がないから病院に行けなくて命の危険になることもあるかもしれません。

今まで、「税金」というものを考えずに生活してきましたが、私たちが暮らしやすいように使われていることが分かりました。人が生きていくために必要な助け合いの仕組みになっています。

いずれは私も大人になり、税金を納めることになります。今日本の問題である「少子化」が続くと少ない人数で多くの人を支えなければなりません。私たちがよりよい仕組みを考えていくべきだと改めて分かりました。

震災が教えてくれたもの

白馬村立白馬中学校３年　　嶋田　悠二

昨年十一月二十二日。私にとってはスキーシーズンの始まる重要な時期。道具のメンテナンスなどを始めた頃だった。午後十時過ぎ、長野県神城断層地震が白馬村を襲った。私の住んでいた堀之内地区も多くの家屋が倒壊するなど、大きな被害に見舞われた。地区は壊滅状態で、多くの被災者が長く避難先での生活を強いられた。

私は避難先で不安になった。もう白馬は冬、雪が積もっていく。重要なスキーのレースまで時間がない。このまま避難先で年を越すことになるのではないだろうか、これから住む場所はどうなるのだろうか、と。不安は日々募っていった。

しかし、そんな心配は無用だった。復興作業は着々と進められていく。仮設住宅は地震後すぐに建設が始められた。ものすごい速さで作られていく仮設住宅。私の不安もどんどんと軽くなっていった。

仮設住宅は年内に完成し、入居できるようになった。そこは私たちにとって久々にリラックスすることのできる安らぎの空間。地震の時からずっと緊張したままだった気持ちが緩み、大きな不安からも解かれたような気がした。そのおかげもあり、スキーのレースではのびのびと滑ることができた。仮設住宅は被災した人々にとって、ただ住むための家となっただけでなく、心が落ち着き、安心して生活のできる場ともなった。

そのとき、疑問に思ったことがある。どうして私たちは今、こうして暖かく暮らすことができるのだろう。この仮設住宅はどこからのお金で建てられたのだろう。

そこにあったのは「税金」という答えだった。多くの県民・国民が納めた税金。それが災害救助のための基金や補助金となり、こうして被災者を助けてくれている。それを知ったとき、私は言葉ならない衝撃を受けた。私たちを助けてくれた税金のありがたみを感じて。

今までは堅苦しく、遠い存在にしか思えなかった税金。それを初めて身近に感じ、少しだけ頼もしく思えるようになった。

近い将来、私も様々な税金を納めることになる。税率に納得がいかなかったり、納税による負担を感じたりする人もいるようだが、何に使われているのか、どのように役立っているのかを知れば、単なる重荷ではないはずだ。税金に助けられた私、安心をもらった私。私は税金のすばらしさを知っている。

これから大人への道を歩んでいく。どんなときも、税金のありがたみ、税金への感謝を忘れずに生きていきたい。

税で支え合う

千葉市立千城台南中学校３年　　宇田川　雄生

僕は母子家庭で育ってきた。僕に物心つく前に父は他界してしまい、母は、僕と兄を余裕のない中、必死に育ててきてくれた。

僕ら兄弟の世話や家事については、仕事で忙しい母に代わり、祖母が手伝ってくれていたが、やはりお金の事についてはあまり余裕はなかった。それでも母は、自分のことよりも、兄弟を育てることを優先してきてくれたお陰で、今では無事に中学生の最高学年になり、毎日を楽しく過ごすことができている。

しかし、僕を「支えて」きてくれた母を、様々な面で「支えて」くれていた存在があった。それは「税」だ。もちろん、手伝うという形で「支えて」いたのは祖母であった。しかし、様々な面、様々な形で「支えて」くれたのは税の存在であったことは間違いない。今、僕はその事をとても実感している。

税は僕達に必要なほとんどの事の基盤となっている。例えば、病院にかかる際の医療費の他、安全を守る警察や消防の活動資金、道路の整備、学校の教育費など、自分達にとっては大切な事ばかりで、なくてはならないものだ。自分は幼い頃は病気がちで、よく病院にかかっていた。病気の種類にもよるが、母は時々「今日は無料で済んじゃったよ。」と言っていた。当時の自分はまだ幼く、なぜ無料で済んだのかなど、疑問に思うこともなかったが、今考えてみると、これも税のおかげだという事が分かる。他にも、たくさんの税の恩恵を受け、僕はここまで成長することができた。そして今、言える事がある。それは、税で「支えて」もらっているという事は、税を納めている誰かに「支えて」もらっているということだ。自分はまだ、税に「支えてもらっている」立場にいる。だが、高校や大学を経て、社会人になってからは、自分が税で「支えていく」立場になる。その時まで税を納めていた人達には恩返し、つまり社会保障という形で、これからの子供には、教育や安全のための投資という形で「支えて」いかなくてはならないのだ。

これが「税で支え合う」ということだと自分は思う。税で支えるという事はこれまでの人々に感謝の意を示すことであり、これからの未来をつなげていくという事でもあるのだ。これからの日本は、急速に「少子高齢化」が進み、ますます「支え合い」が大切になってくる。自分達若者が、直接サポートすることができなかったとしても、お年寄りが安心して生活できる社会を、税によって間接的につくっていく事は可能なはずだ。これからの未来、今では叶っていない「税金の完納」が実現し、その税が正しく使われ、人々が支え合う。そんな未来になればと僕は思うと同時に、支える社会人として自覚して生きていきたい。

税金に感謝

銚子市立第一中学校３年　　有馬　瑞希

この夏休み、教科書を見ていたら、大事な事に気がついた。教科書の裏表紙を見ると、「この教科書は、これからの日本を担うみなさんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と書いてあった。僕は、すぐにこの言葉の重みを感じた。なぜかと言うと、無償で支給されている教科書を使っている僕達は、その期待に応えられるよう努力しなければならないと思ったからだ。そして、これからの日本を担うのは、僕達なんだと責任を強く感じると共に、義務教育を受けているすべての小中学生に知らせていかなくてはいけない事だと思った。

僕は、小学校六年生の時、血液の難病にかかり、三百二日という入院生活を送った。僕は、子供ながらにも、

「医療費は、どのくらいかかるのだろうか。」

と疑問に思い、母に聞いた事がある。母は、こう答えてくれた。病院から、医療意見書を書いて頂き、必要な書類を揃え、管轄である海匝保健所に申請した。僕の病気が十万人に一人という難病だった為、「千葉県小児慢性特定疾病」に認定され、すべての医療費を税金でまかなってくれたそうだ。そのおかげで、僕は、安心して治療を受けることができた。僕だけでなく、両親もこの公費負担制度にとても感謝している。今も定期的に病院に通院しているが、その治療費もこの制度によって公費でまかなわれている。僕が、こうして今まで当たり前のようにしてきた普通の生活ができるのは、税金のおかげである。そして、税金が僕達の健康を支えてくれていると思うと、嬉しさがとても込み上げてきた。

千葉県小児慢性特定疾病等の公費負担制度や僕達が使っている教科書は、税金でまかなわれている。僕達は、知らないところで税金に支えられ、税金が僕達を幸せにしてくれているのだ。僕は、税金のありがたみを改めて感じることができた。

税金は、僕達国民がいろいろな形で納め、あらゆるところで国民の幸せのために使われているが、どこでどのように使われているのかを知ることも、税金を納める国民には、大切なことであり、責任である。

「税金」それは、日本国民が一生懸命働き納めたものなのだ。今の日本そして、これからの日本にとって納税は、なくてはならないしくみであり、その義務を果たすことは、日本国民としての重大な役割である。僕が払った税金が誰かのために、誰かの払った税金が僕のために、僕達国民は、いつもどこかで助け合っていることを忘れてはならない。僕は、まだ中学三年生だが、将来、勤労と納税の義務を果たし、次世代を支えてあげられるような立派な大人になりたいと思う。そのために今の僕にできることは、税金への感謝の気持ちを忘れず、今を頑張り、努力することだと考えている。

戦争と税金

新宿区立牛込第二中学校３年　　山本　美侑

今年は戦後七十年と言う節目の年なので、連日新聞やテレビで戦争に関する事が報道されています。ある日何気なく見ていたテレビで、戦争にはたくさんの税金が使われていた事を知りました。私は今まで戦争をするのにどうやって資金を調達していたのか考えたこともなかったので、国民の税金が使われていた事を知り本当に驚きました。それをきっかけに戦争と税金について調べてみました。

一八九四年の日清戦争に始まり一九四五年の終戦まで約五十年間、日本は戦争を繰り返してきました。戦争をするにはとにかくたくさんの人や兵器が必要となります。そしてそれらを調達するには、たくさんのお金が必要となります。そのお金こそが税金と国の借金によってまかなわれていたのです。

戦争に関するお金とは、陸海軍経費、徴兵費、臨時事件費、特別会計臨時軍事費のことで軍事費と呼ばれていました。太平洋戦争の後半一九四四年には国の財政の八十％超も軍事費が占めていて、その金額はおよそ七三五億円だったそうです。軍事費を得る為に会社や個人には様々な形で税金がかけられていたようですが、成人男性が皆戦地に行っている中で、税金を取り立てる人も取り立てられる人達も本当に苦難の毎日だったと思います。

そんな中、戦費を確実に確保する為、源泉徴収制度が一九四〇年に始まりました。お給料の中から、事前に計算された一定額が毎月税金として徴収されるようになったのですが当時だけではなく、戦争をしていない現在にも続いている制度だと言う事は、とても合理的で画期的なシステムが開発されたのだと思います。今では、勤め人にとっては当たり前の制度として認知されている源泉徴収制度。使い勝手が良く、便利な制度は戦争をしていようがしていなかろうが続くのだなと思いました。

二〇一五年現在の我が国は、もちろん戦争はしていません。しかし、平成二七年度の当初予算では、国の防衛のために防衛関係費として歳出総額のうち五.二％に相当する約四兆九千八百億円が計上されています。割合としては低い気がしますが、とてつもなく莫大な金額です。

昔とは違い全てが戦争の為と言う訳ではないのでしょうが、世界中から戦争がなくなり平和な世の中が続けば、防衛関係費を少しでも減らすことができるのではないかと思います。そしてその分を社会保障関係費や教育、災害用の経費に回せるのではないかと感じました。地球上で、戦争のない平和な世の中を築くことができれば、税金の使い道も変わって、皆今よりずっと幸福になれるのではないかと思います。平和と税金、一見何のつながりもないこの二つの言葉ですが、世界中で考えていけばきっと救われる人はいるに違いないと思いました。

税から得たこと

府中市立府中第八中学校３年　　田中　さくら

「この教科書はこれからの日本を担う皆さんへの期待を込め、国民の税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」これは、教科書の裏表紙に印刷された一文である。当たり前のように使っている教科書に書かれた当たり前のような文章。これが当たり前ではないと気づいたのは、小学校六年生のときだった。

私は勉強が好きではなかった。退屈な授業中は、教科書に落書きをして友達と見せ合っていた。当然テストの結果も悪く、勉強は嫌いになる一方であった。そんなある日、教科書の落書きが先生に見つかった。先生は私の教科書に消しゴムをかけながらこう言った。

「教科書の裏にも書いてあるように、あなたの両親だけではなく日本中の人があなたたちが勉強できるように税金を払っているのよ。」

その夜、私は考えていた。皆が私たちの為に払っているという税金についてだ。私が毎がいつも落書きをしていた教科書は、税金の中から支払われている。机やいすも、税金だ。黒板も、実験器具も、げた箱も、税金が支払われていないものを探す方が難しいくらいに学校の中は税金でできていた。そう考えた時私の頭の中は、今までの授業態度に対する後悔と申し訳なさ、そして税金への感謝の気持ちでいっぱいだった。

次の日から、きちんと授業をきくようになった。そしてテストでは百点をとれるようになった。私は勉強が好きになり、将来の目標も少しずつだが、見えはじめている。こんな変わることができたのは税金と、税金について考えるきっかけをくれた先生のおかげだと思う。

しかし、反対に税に対して良く思っていな人もいる。多くは増税に反対する納税者たちだろう。去年の四月一日、消費税が八パーセントに増税した。そして二〇一七年には十パーセントに上がるそうだ。これについて文句を言う人も多い。だが私は賛成だ。なぜなら、その税があるから私たちは医療費を全て自己負担で払うことはないし、困った時にはすぐに救急車を呼んだり交番に行くことができる。私たちが安心して毎日を過ごせるのは税金があるからだともいえる。そして何より、私は教育という面で税金に助けられている。こうして多くの国民を支える税金はやっぱり必要だと思う。全ての国民を支えるための増税なら、私は賛成だ。

私の将来の目標は、教師になることだ。あの日、私に税の大切さと、勉強を好きになるきっかけをくれた先生のようになりたい。そのために今、一生懸命勉強をしている。落書きをしていた教科書も、今では受験という壁をのりこえるための大切な道具である。学校という恵まれた環境、そこにある机、いす、黒板、そして教科書。税金で支払われた全てのものと納税者に感謝して使っていきたい。

「税と生きる」

川崎市立東高津中学校３年　　小松　未来乃

朝起きて、夜眠る。そしてまた朝が来る。こんな日常に皆さんは幸せを感じた事はあるだろうか。

私が生まれた時、全身には発疹があった。そして生まれつきアレルギー体質で、卵や牛乳、大豆などの多くの食べ物を食べる事ができなかった。今思えば、当時私は何を食べていたのだろうと疑問に思う程だ。

そして成長して二歳になった時、またも暗雲が立ち込める。「川崎病。」私は、体温計が壊れる程の高熱に襲われた。食事も全く摂れない日々。母は、死ぬかもしれない。仮に助かったとしても、障害が残るかもしれない、と覚悟したそうだ。私は入院した。そして治療を受け、無事退院する事ができた。

そんな私の幼少期。私はこの話を聞き、私の病気に向き合い、闘病生活を支えて下さった方々の存在を知った。彼らがいなければ、今の私はなかったのだ。

当時の私を支えてくれたのは病院の方々だが、その基盤となっていたのは、大人が納めている税金だ。税金のお陰で、私は今生きている。税金という形で、私は様々な人に支えられ、生かされたのだ。

私が体験した事は、特殊なケースかもしれない。しかし今考えると、私達の日常は、税金でできていると言っても過言ではないようにも思える。学校、病院、図書館…。税金は様々な物に姿を変え、私達を支えているのだ。

ところが近年、一部の無責任な人達が税金を未納・滞納しているというニュースをよく耳にする。しかも富裕層が、だ。生活に余裕のある人が、国民の義務である納税を怠っているのだ。自分が成長できたのは、税金のお陰だという事を、全くもって理解していないのだ。例えば教育。もし今までの教育費を全て払えと言われたら、あなたは払えるだろうか。そう考えると、自分の生活がいかに税金に支えられているのか、身に染みて分かると思う。そうして受けた数々の恩恵を仇で返す様な真似がどうしてできるのか。私には疑問だ。少なくとも私は、果たすべき義務をしっかり果たす事のできる大人になりたいと思う。

今、税金は八％だ。増税当初は私も「買いたい物が買えなくなる」と不満だった。でも今は違う。なぜなら「誰かのために役立っている」と思えるからだ。この税金で、私のように苦しむ人が助かる。そう考えると、何だか自分がとても誇らしく思えるのだ。

私は今、病気の影響で数年に一度、心臓病検診を受けている。しかし、これを不幸だと思ったことは一度もない。なぜなら税金のお陰で沢山の恩恵を受け、様々な立場の方から支えて頂いたからこそ、今生きている。そう心から思えるからだ。しかし、私だっていつまでも助けられている訳じゃない。いつかは自立するのだ。その時、感謝の気持ちを持ち、来たるべき少子高齢化社会を支えられる様、税金を納める。それが私の社会への恩返しだ。

税は何に使われているのか

甲府市立南西中学校３年　　小林　新

　パチッ。母が階段の灯りを消した。
「勝手に消していいの。」
懇談の日の午後二時頃、学校内でのことだ。僕は勝手に消していいのかなぁとびっくりした。
「晴れてて明るいのにもったいないじゃん。家のだったら消してるよね。学校のだって同じだよ。」
確かに家のだったら僕だって消す。でも学校のは、消さないなぁと思った。
「家で電気がもったいないって言うとき、電気代がもったいないからだよね。学校の電気代は、直接払わないからピンとこないよね。でも税金で支払っているんだから、省エネもあるけどお金ももったいないんだよ。」
「そうかあ。税金。」
「税金は無駄な使い方をしないようにみんなで見守らないといけないし、簡単に節約できるものは、今みたいに節約することが大切だよ。まあ、勝手に止めちゃいけないものもあるけど、これはいいよね。」
確かにそうだな、と思った。
　僕達の身の回りには、たくさんの税金が使われている。道路、信号、学校、公園など。それとそこに使われる水道、電気、ガスなど。もちろん教師や消防士、警察官、国会などの議員や県庁、市の職員のお給料もだ。そして国や県、市などの事業にも使われる。
　今年僕は県主催の少年海洋道中に参加した。五十人の中学生が八丈島の自然の中で様々な活動をし、島の人とも交流を深めるというものだ。参加費もちゃんと払うけれど、九日間もの体験や食事、往復の交通費、付き添いの先生や県の職員がいることを考えると税金も使われているはずだ。
　八丈島では、スキューバで海の中を見たり、二日間かけて徒歩で島一周したり、特産物の見学や島の小・中学生との交流もした。この体験に税金が使われている理由はなんだろう。税金はみんなの為になることに使う。僕達が体験したことがみんなの為になるって、どういうことなんだろう。例えば、仲間と助け合ったり励まし合ったりする。水や物の大切さを知り、節約をする。ゴミを少なく、自然を守ることを心がける。いろいろいな人に対して感謝の気持ちを持つ。そういう人になることがみんなの為になるのではないか。ただきれいだったとか楽しかっただけではなく、八丈島での体験が意味のあるものになるように考え、行動していく、そういうことでこういった素晴らしい事業が継続していけるのだ。
　僕も将来は納税者になる。もちろん目を光らせて無駄な使い方には反対する。節約できるものは節約してもらいたい。そして、いい使い道には大賛成。僕達が、喜んで税金を納められるような税金の使い方をしてほしい。

税と私たちの健康との関わり

魚津市立東部中学校３年　　関口　日向子

「ピンクの紙、忘れずに持っていってね。」
普段なにげなく聞いていたこの言葉が、ある時ふと不思議に感じました。

私はよく体調を崩したり怪我をしたりするので、病院に行く機会が多いです。その病院に初めて行くとき、また月の始めには、母は必ず
「ピンクの紙を持っていって。」
と私にことづけるのです。

聞いたところによると、なんでもそのピンクの紙は「こども医療助成制度」という制度の一環だそうです。この紙を使うと、医療費の七割が私たち国民が払う税によって、残り三割が市によって賄われます。だから私たちは実質無料で診察を受けたり、薬をもらったりすることができることを知りました。

この話を聞いて、私は自分が恵まれている環境にいることが分かり、これなら安心して診察を受けることが出来る、とほっとしました。しかし私の気持ちとは裏腹に、制度の説明をする母は、少し困ったような顔をしていたのです。

聞くよりも早く、母がそのわけを説明してくれました。今の時代、保険が適用するのは生まれてから中学三年生までです。しかし、私の兄が幼かった頃は、なんと生まれてから一歳までの間しか、医療費を全額負担してもらえなかったそうです。

制度が改められるまで、ずっと自身でお金を負担してきた母は、それまでの長い道のりを知っていると同時に、税が費用を負担していることのありがたみも知っています。だからこそ、適切な場面で制度を利用することを心がけているそうです。

しかし、その過程を知らない、若いお母さん達はどうでしょうか。全員がそうとは言いきれませんが、医療費がタダなのはあたりまえだという意識が、芽ばえてしまっている人もいると思います。

母は、そんな考えを持った人達が、時間が経てば治るような、大したことのない怪我などですぐに病院に行き、薬をもらおうとしていることが心配なのだと言います。実際にそういう人が増えてしまうと、お金がかかって市の負担が大きくなるという、悪循環に陥ってしまうそうです。

このことを聞いたとき、私は少し恥ずかしい気持ちになりました。なぜなら制度の説明を聞いていたとき、私も同じようなことを考えていたからです。

皆が適切に税を使っていくためには、まず制度の仕組みや税のありがたみを良く知るべきです。また、そのためには、私たちのような若い世代が正しい情報を広く伝え、私たち自身も適切に税と関わり合って暮らすことが重要だと感じました。

平和の礎に

石川県金沢市立緑中学校３年　　北山　智沙子

戦後七十年。その言葉を聞く度に、私の心は悲しみに沈む。今の日本が平和であるという事の裏側に、日本が戦争をしていたという過去があるからだ。

私はこの夏、一枚の写真と出会った。唇をきつく噛み締め、裸足でじっと立っている少年。その背中におぶわれ、首をのけ反らせているのは弟だ。原子爆弾で死んでしまった弟は、これから焼き場で燃やされる。涙さえ流すことなく、どこかを食い入るように見つめる少年の瞳には、一かけらの光もなかった。

戦争中、少年は、どのような暮らしをしていたのだろう。そう思って調べているうちに、目に留まったのは、「税金は戦費に」という言葉だった。これによって、国民はさらに苦しい生活を強いられることになったという。

第二次世界大戦が終わって七十年後の今、税金を納める、という点では七十年前と変わっていない。一方で、大きく異なる点もある。それは、税金が姿を変え、私たちのもとに返ってきているということだ。きれいな水を使えて、舗装された道路を歩くことができる。校舎も、机も、椅子もあって、教育を受けられる。あまりにも身近にあることばかりで、今までは、それが当たり前のことのように感じていた。しかし、その当たり前が税金によって成り立っていることを知って、私は感謝の気持ちで一杯になった。

また、二年後には消費税率が十パーセントになる。増えた収入は、すべて社会保障に充てられるそうだ。それによって、子育ての支援、医療や介護がより充実したものになると考えられている。少子高齢化が進む中で、私たちが大人になった時、お年寄りを支えていくという負担は、とても大きいと思う。そんな未来が、増税によって支えられるということに、私は安心感を覚えた。

当たり前を生み出してくれる、未来に安心をもたらしてくれる税があるからこそ、私たちにはできることがある。その一つは、夢を抱くこと。私の将来の夢は領事になることだ。海外にいる日本人が、安全に、安心して毎日を送れるようにしたい。日本の素晴らしい文化を海外にも伝えていきたい。私がそう思えるのも、生活の土台を作ってくれている税のおかげなのだと思う。

私はもう一度、あの写真を見ながら、平和とは何かを考えてみた。戦争をしていないことだけではないはずだ。七十年前、少年にはできなかった、「希望を持つこと」が今の私たちにはできる。私は、これこそもう一つの平和の姿なのだと思う。そして、そんな生活の土台をつくっているのが税金だ。平和の礎に「税」があること。そのことをいつまでも心に留めて生きていきたい。

今私は、税に感謝することしかできない。でも、将来、平和への恩返しとして税を納めようと思う。戦後百年、もっともっと先の未来の空が、今日と同じ青空であるために。

真のおもてなしの国を目指して

浜松市立入野中学校１年　　野口　茜

「おもてなし満点の国、日本。」
これは、私が昨年度取り組んだユニバーサルデザインに関する調べ学習の結論だ。

二〇二〇年、東京オリンピックが決定した昨年、私は「おもてなし」つまり、ユニバーサルデザインについて調べるため日本全国を家族と共に旅をした。日本全国、どの地域でも世界中の人々を優しい心でお迎えできる設備が整っていると実感した。

ユニバーサルデザイン最先端の茨城県つくば市。行政組織の一体化のため新しく建てられた市役所は、万人に優しい設備が完璧なまでに備わっていた。日本一外国人観光客が多い京都府。観光地には音声案内や八ヶ国語の表記等、細かな配慮のある設備が整っていた。離島の日間賀島にさえも、スロープがあり、道の整備も完璧だった。そして、私の住んでいる町、大平台にも乳幼児からお年寄りまで万人に優しい設備をたくさん見つけることができた。

この調べ学習の研究をしている間は、税金とのつながりを一切考えることをしないで研究を進めていた。しかし、中学生になり、国民の三大義務の一つである納税の義務について知った。初めて私は、優れた「おもてなし」の設備が税金に支えられたものだと分かった。

今まで私は税金とは無縁だと思っていた。昨年四月から消費税が八％に上がり国民は大変だなと他人事のような認識でしかなかった。

しかし、実は私たち国民は、この世に生まれた瞬間から税金と密接に関わっていると知った。私たちの生活全てが税金に支えられて成り立っているということだ。

私が住んでいる町、大平台。美しい街並みだ。子どもたちが安全に登下校できる広い歩道。浜松一広い廊下のある小学校。春には美しい花を咲かせる街路樹。四つの整備された公園。この公園には、子供たちの笑い声が絶えない。私が十二年間生きてきた町は、まさに私の自慢だ。そして、この美しい町を支えているのもやはり税金なのだ。私たちの生活と税金には深いつながりがあるのだ。

六年生だった昨年、社会科の授業で「租税教室」があった。「もし、町から税金が無くなったら。」の興味深い話を聞いた。公園も道路も整備されず、信号機さえもない。交通事故が多発し、救急車も来ない。まさに、地獄のような暗い町。私は、改めて税金の大切さを痛感した。

私の愛する郷土、大平台を美しい町であり続けるためには、市民一人一人が納税の義務をしっかり果たそうという意識を持たなければいけない。もちろん、二十一世紀の日本を担っていく私たち若者も納税の意義をしっかり理解し、この美しい町を守っていく使命があると思う。そんな国民が今後さらに増えていくことで浜松、いや日本全体が真の意味での「おもてなし満点の国」になると考える。

地域の一員

小山町立小山中学校３年　　中田　杏音

以前、自分たちの地域をより住みやすくするため、「リーダー研修会」という活動を行った。この活動は、普段登下校時に利用する通学路を「危険性」の視点で見直し、危険と考えられる所を、区長さんに提案し、改善していただくことを目的としたものである。この活動により、私が初めて税というものについて考えるきっかけとなった。

私の地域のグループでは、話し合いによって提案するか所を三か所に絞り、区長さんに発表することになった。

発表では、そのか所の危険性を十分に理解していただくために、実際に撮影した写真も使って説明し、一生懸命に訴えた。この私たちの思いを受けて、区長さんも真剣に話を聞いてくださった。

発表が終わって後日、区長さんから連絡が入った。内容は、特に気になった二か所を役場に提案してくださるというものであった。そして、この危険か所を直すためには税金が使われるということを初めて知った。

役場の審査を受け、改修決定となった。工事が始まると、毎日その様子を見ながら登下校するようになった。私たちの提案によってこの工事が行なわれていると思うと、ドキドキする気持ちになった。また、それ以上に、この工事にいくらかはわからないけど、決して安くない税金が使われていると考えると身が引き締まる思いになった。

今まで税について深く考えたことも気にしたこともなかったけど、実際に真近で使われている様子を見て、

（こんな風に税金は使われているんだ。）

と改めて知り、何より、自分たちの意見からそのお金が使われているのだから、税に対する関心が一層高まった。

その後、私たちが提案した危険か所には、カーブミラーやガードレールが設置された。ピカピカのオレンジや白色が目に飛び込んでくる。これができてからは、より安全に登下校できるようになったことはもちろん、自分たちが地域のために貢献でき、地域の一員であることを改めて感じることができた。

現在も、カーブミラーやガードレールは安全のために使われ、私たちの登下校を見守ってくれている。何気なく納めている税金も、私たちが安心して豊かに暮らしていくためにこのように使われていると思うと、私は税の大切さを強く感じる。

税は、社会をつくり、安全を保障してくれている。この社会のために私たちができることはどんなことだろう。例えば、一人一人がきちんと税を納めることなのかしれない。同時に、税についてみんなで考えることが、今一番大事なのではないだろうか。

納めた税は、いつか必ず私たちのために形を変えて返ってくる、そう思って生活していきたい。

暑さではなくぬくもりを

津島市立神守中学校３年　　横江　友衣

「エアコンがあったらなあ。」
もう何度も耳にした言葉。私の学校の夏はとにかく暑い。二年前、各教室に扇風機が設置されたが、席によって風が当たらなかったり、生ぬるい風がくるだけだったりと、生徒たちの不満は多かった。吹奏楽部に所属している私は、熱気がこもったような風通りの悪い三階の音楽室ではさすがに耐えられず、なかなか集中力のもたない日々が続いた。市の境目のむこうにある学校は、エアコンが装備されており、「夏が寒い」と言うほどだというのに。

どうしてだろうか。消費税、県民税、自動車税…同じように払っているはず。なぜこんなに差があるのだろうか。その上、お金が豊富な市の学校は楽器の状態も良く、コンクールで県大会へと進んでいくのだった。よく耳にするあの言葉は、地区大会止まりの私たちの、他校へのうらやましい気持ちと自分の地域への不満を表しているのかもしれない。

そんなとき、部活では木管楽器のリード負担が問題となった。それは、木管の楽器を吹くのに必要なリードというものを毎回買い換えるのにお金がかかり家庭が厳しいという保護者の意見からの話だった。みんなからお金を平等集めてはどうだろうかという意見に対して、打楽器パートの私は、正直、自分の使わない楽器のためにお金を払うなんていい気がしなかったし、他に反対する意見も多かった。そして結局、一部を部費で払うことになった。負担は減ったようで、「助かるよ」と笑顔を向けてくれた子がいた。そのとき、私の考えはまちがっていたのだと気づいた。みんなでお金を集めたとしても、それは他人のためだけに使われるのではなかったのだ。新しいリードでいい音で吹くことができれば、合奏だって楽しくなるし、音楽室にはそんな気持ちのこもった音が響きわたる。それを聞いた自分だって、うれしくならずにはいられないはずだ。

これは、税金という制度に似ていると思った。そして自分の考えの恥を知った。ここにつけられた扇風機だって、私たちが少しでも快適に生活できるようにと協力して集められた税の思いやりの塊だったのだ。一台の扇風機がなんだか大きく見えた。不満を抱く前に、まず感謝するべきだ。

私は税金のことを大きく勘違いしていたようだ。先日、私と同じ市の学校の吹奏楽部が県大会への切符を手に入れた。私たちと同じ環境で、どれほどの努力をしたのだろうか。私はまちがっていた。日々の生活に不満を持たせていたのは税金ではなく自分の考え方だった。税金はたくさん可能性を与えてくれていたのだ。

これからは、夏の暑さへの不満ではなく、少しだとしても税のぬくもりからの風を感じていこうと決めた。

父の仕事

大津市立瀬田中学校３年　　河村　まひろ

金曜日の夕方、家に電話がかかってきた。私が電話に出ると、父が一言つぶやいた。

「今日は家に帰れない。」

その日は父の誕生日であり、家族みんなで祝おうと思っていた。ケーキを買って待っていたので、兄弟たちも残念そうな顔をしていた。父が家に帰れないことは一度や二度ではない。夏や秋の台風シーズンは特に多くなる。

私の父は市役所で働く地方公務員だ。下水道の管理をしているという。この時期、台風や大雨による被害が増える。そこで、市役所にたくさんの電話がかかるのだ。大雨でマンホールから水が溢れている、トイレが流れないなどの内容だ。それらの対応をしているらしい。電話がかかればヘルメットを着用し、カッパを着て災害現場へ急ぐ。たとえ、大雨、台風、夜中であっても関係ないのである。もちろん、父だけでなく、市役所では数百人もの人々が緊急出動している。ある人は、道路に倒れた木を撤去し、陥没した道路があれば、緊急修繕工事の手配をする。ある人は、川から溢れた水が民家に入らないよう土のうを川の土手に並べる。避難指示が出されている地域の人のために避難所を開設し、避難してきた人々のために毛布や非常食のアルファ米を配ったりする人もいる。これは父の仕事について、以前に聞いた話だ。公務員の仕事は、私の想像以上に大変で驚いた。

しかし、世の中には公務員のことを悪く言う人がいる。中には、「税金泥棒」と言う人もいる。だが、本当にそうだろうか。例えば会社員は、会社のために働きその分だけ、給料をもらっている。公務員も国民や市民のために働きその分だけ、給料をもらっている。どちらも何かのために一生懸命仕事をし、給料をもらっている。私には同じように思える。

私は父の仕事に誇りを持っている。父は日々市民のために働いている。決して「税金泥棒」なんかではない。

税金は、道路や公園を作ったり、下水道を整備したり、ゴミの処分費や年金などにも使われている。私たちはあらゆる面で税金に助けられている。もし、ゴミが回収されなければ人は不愉快になるだろう。そう、税金は国民を幸せにするのである。

私は今、働いておらず、収入もない。家ももちろん持っていない。私が払っている税金は、消費税くらいではないだろうか。けれどもこれから先、大人になれば、いろいろな税を納めることになるだろう。そのとき私は、誇りを持って納税したいと思う。そして、私の納めた税金が誰かの役に立っていれば、誰かを幸せにしていれば、これほど嬉しいことはない。

「税金で見る未来」

宇治田原町立維孝館中学校３年　　田中　理子

「国民は、法律の定めるところにより、納税の義務を負ふ。」これは日本国憲法第三十条であり、納税することが国民の義務であることを表しています。しかしこの憲法にはただ単に税金を納めるという意味だけを持っているのではないと私は思います。税金を納めることで税を知る、どこに何のために使われているのかを知る。これこそがこの憲法のもう一つの意味であり、国民である私達の権利だと思います。私自身も税金がどこで私達の生活を支えているのか、よく知りませんでした。百円のものを買って、なぜ八円多く払うのか。少し損している気分になっていたほどでした。しかし調べてみると身近でもたくさん税金が使われていることが分かりました。例えば学校生活。授業で使う教科書の裏には、「この教科書は税金によって無償で支給されています。」と書かれています。理科の授業で使う実験器具や体育の授業で使う跳び箱などもそうです。これから社会にでる私達に、「たくさん勉強して学んでほしい」という国民みんなからのメッセージのように感じます。それを背負い、恵まれた環境で勉強しているのです。また税金は日本に必要なものを作るためにも使われています。今、話題にもなっているのは、新国立競技場についてです。実は私は解体工事が始まる前の国立競技場を訪れたことがあります。そこで聖火台に火が灯されているところも見ました。その時に感じたのは、この場所は長い月日の中でどんな景色を見てきたのだろうかということでした。初めて日本で開催されたオリンピックで興奮し熱狂するスタンド。様々なスポーツの大会に使用され感動や涙を生み出してきたグラウンド。そこに刻まれた歴史に、言い表せないほどの偉大なものを感じました。そして国立競技場は生まれ変わります。その建設費には私達の税金も使われます。それは国民みんなで新たな国立競技場を作り上げていくという意味にもなるのではないでしょうか。税金でこれからの日本の未来への架け橋をも作ることができる。それは日本国民として誇れることです。それをしっかりと理解し、胸を張れるような人間になりたいと思います。私は税金について学習して、税金は私達の生活に必要不可欠なものだと知りました。私はまだ中学生なので消費税を納めるということしかできていません。ですが、これから社会に出て納める税金の種類が増えた時、日本の未来に貢献する大切なことだということを忘れないようにしたいと思います。そして将来自分の子供に税金について聞かれた時には、その必要性・使い道などをきちんと説明できるようになりたいです。それが私達の義務であり、次の世代に繋がるバトンになると信じています。

見上げれば

高槻市立第二中学校３年　　髙山　葵

灰色の重たい雲からぽつぽつと雨粒が落ちる。しだいに雨は強くなり、やがて豪雨となる。突然すぎる母の死は夏の終わりの夕立のようだった。

母は二年前、大腸がんを発症した。

「ママ、大腸がんやねん。」

そう話す母からは、病気のことなど感じとれなかった。しかし、母の体に住みついた悪性腫瘍はどんどん大きくなり、色々なところへ転移し、私達の想像以上に手強くなっていった。見舞いに行くたびに、痩せ細っていく母の顔や腕が病気の辛さを物語っていて、私はなんだか母に会いに行くのが苦しかった。

入院先の大阪医科大学病院での辛い食事制限や抗がん剤治療に耐えた母だったが、とうとう先生に

「もうこれ以上の治療はできない」

と言われてしまい、在宅看護をすることとなった。

今振り返ってみると、私は随分平気だった。母が入院するときも、手術のときも、在宅看護が始まったときも。それはきっと、私の心の中に『きっと大丈夫』という言葉があったからだ。それを私に届けてくれていたのは、病院の先生やヘルパーさんだが、その基盤となっていたのは税金だということを私は後で知った。税といわれても八パーセントの税しか思い出せない私だったが、その日から私の税に対するイメージが変わった。

私は税は傘だと思う。急に降ってきた雨から自分を守ってくれる傘と、急な病や事故にあったとき自分や家族を制度で助けてくれる税はなんだか似ていると感じたからだ。母の死という豪雨の予兆に気づかず、きっと大丈夫、と平気で過ごせたのは、私の上に傘があったからだ。でも、もし日本に税金がなかったら私はどうなっていただろうか。心配や不安の雨を浴び、母と向きあうことが怖くてできなかったかもしれない。

母の在宅看護は三ヶ月という短い期間で終わってしまったが、私はその中で多くのものを見つけることができた。一人の命はたくさんの人によって支えられていること。母親の偉大さ、大切さ。税の存在。自分の中でちっぽけだったものがこの三ヶ月で大きなものとなった。

私の体験は特殊なケースだったが、普段の生活の中でも税は、私達を守り、助けてくれている。だから、ふとしたとき顔を上げて、空を見上げてほしい。そこには税という名の傘があるはずだから。

私が背負っているもの

神戸市立玉津中学校３年　　村田　きらら

私の通学鞄は重くてはち切れそうだ。しかも家から学校まで遠い。友達に毎日のようにからかわれるので、「この鞄の中は夢と希望でいっぱいなんよ。」とふざけるのが恒例となっている。

歴史の勉強と切っても切れない関係をもつ、「税金」。歴史の教科書で「年貢」と表されるそれは、いつも民にとって悪者だった。力の強い者が弱い者を支配し、無理矢理働かせた挙句、ようやくできた米も年貢として絞り取る。そして強い者は奪った米で贅沢で優雅な生活を送る一方、弱い者はいつまでも貧しい。そんなイメージから、私は税に対してあまり良い印象をもたなかった。それに、なんとなく遠い存在だった。

もうすぐ公民の授業が始まる。本やインターネットを使って税を調べてみた。税には数えきれないほどの種類と目的があった。病院や消防署などの運営、公園や道路などの整備、年金制度や復興支援など。国民が払う税金は、国民のために使われていると分かった。また外国の税にも興味が湧いたので、さらに調べた。税金が高い国もあれば低い国もあると知った。そもそも税の制度がない国もあるらしい。色々な考え方があって、どれが正しいかなんて言えないのだ。難しいけれど、調べることが楽しく、知ることが面白くて嬉しかった。

税は私のすぐ傍にあった。教科書を閉じたとき、裏表紙の片隅にそれは見つかったのだ。

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

中学生は一日のほとんどを学校で過ごす。正直、「面倒くさいなぁ。」と、ときどき行きたくなくなることもある。けれど、学校に行って勉強ができるのは、大人たちが税金を払ってくれるからだ。今まで義務教育に守られてきたからだ。教科書も同じである。皆平等に国から学習のチャンスをいただいているのだ。

税によって社会の支え合いは成り立つ。私はまだ中学生で、助けられている立場だが、大人になればこの恩を返せるし、次の世代へも送れる。自分の小さな力が、社会のサイクルを作るのに貢献できるのは誇らしいことだ。

これまでの通学路は、ただ重い荷物を背負って歩く辛いものだった。しかし税への見方を変えると、見慣れた景色の中にも発見があった。少し焦る赤信号も、階段で息が上がる歩道橋も、工事中の道路にも、税が関わっている。冗談ではなく、私の通学鞄には教科書という姿で、社会からの期待と、夢と希望を与えてくれる大人たちの愛情が詰まっている。そう思うと、背中の重みも温かかった。私たち中学生が今できるのは、その重みに感謝しつつ、一生懸命勉学に励み、立派な大人になるために努力することだと思う。

心の豊かさを望んで

御所市立葛上中学校３年　　米田　裕亮

物が溢れる豊かな現代。私たちの暮らしはあまりにも恵まれています。貧困地に比べてとても良い暮らしだと思います。核家族化が進み、生活も合理的で便利になった今、祖父母から聞く昔話―畑や家の手伝いなど、子供からお年寄りの大家族全員が助け合っていた暮らしは、何かほのぼのと暖かく感じられます。そんな祖母の口癖、

「お年寄りは大事にするんやで。」

母も小さい頃からずっと聞かされてきたと言います。日本は少子高齢化が進み、今は四人で一人のお年寄りを支えていますが、二〇二〇年、私が、二十歳になる頃には、二人で一人のお年寄りを支えなければならない日が必ずしも来るのです。消費税が導入されたのは、この問題の対策の一つと考えられるのだと聞きます。人生の大先輩として敬い大切にすることは、人間として当たり前だということ、そして安心できる老後の暮らしを保障するための年金や老人医療などのための税金を納めることは、お年寄りに対する感謝やお礼の気持ちを表す一つの方法で、不可欠だということを改めて考えさせられます。

私が小学校の時、「うらしま太郎体験」に参加する機会がありました。耳栓や特殊ゴーグル、手袋、おもりなどを装着し、高齢者になった時の身体的低下や心理変化を疑似的に体験して高齢者を理解しようという学習でした。階段の昇り降り、電話、新聞を読む、落とした物を拾う・・・。何をするにも想像以上の大変さにとてもショックを受けました。そして、祖母は長い間民生委員を務め、一人暮らしのお年寄りのお弁当やデイサービスなど、通院や身の回りのお世話をしながら、

「いつかは自分も人様の助けを必要とせんなん時が来る。だから、自分が動ける事が幸せやと思わんな。」

と言っています。その祖母はもう六十七歳。高齢者が高齢者をみる時代だと聞いたことはありますが、人事ではなく身近に感じ、税の大切さを痛感します。

また、最近特に環境問題にも深刻さも増してきていると思います。毎月の生活の中、豊かさのデメリットなのか、ゴミの多さには驚きます。限りある資源を大切にしようとスーパーには牛乳パックやトレーの回収箱が設置され、リサイクル運動が進められています。ゴミの処理のために年間一兆八千億円、国民一人あたり二万円近く費用にも税金がいかされていることを知り、家電製品に課せられているリサイクル料にも納得です。その他にも、私達が使う教科書や学校の設備など、税金は私達の生活や安全のためのお守りのようなもとだと思えます。

これからの私達は、次世代までずっと安心して暮らせる社会の実現のため、「物」の豊かさだけでなく、「心」の豊かさを目指し、真剣に「税」について考えていくことの必要性を強く感じました。

「税と支え合い」

和歌山県立向陽中学校３年　　髙橋　悠泉

「パリの空港から一人の乗客が飛び立つたびに、三人の子供をマラリアから守ることができる。」

私は税についてのことをあまり知らなかったため、税について色々なことを調べ始めた。すると、この言葉が出てきたのだ。この言葉は私に大きな衝撃を与えた。「どうしてそのようなことができるのだろうか」「空港とマラリアにかかってしまった子供とは何も接点がないのではないだろうか」そのような疑問が私の頭の中を駆け巡った。

不思議に思いながらも、その記事を読み進めていると、マラリアの子供を救える理由は一ユーロの航空券税にあることがわかってきた。一ユーロを航空券に加えるという取組は、ユニットエイドという機関によって行われている。この一ユーロの航空券税によって、ユニットエイドはわずか八年間に二十五億ドルを超える資金を集めたそうだ。集められた多額の資金はマラリアやエイズ、結核の治療や診断に役立てている。具体的に治療されている人は、エイズに感染している子供たちで十人中八人。さらに、三億五一〇〇万のマラリア治療が確保されている。

このように画期的な取組みが行われていることを私は知らなかった。たった一ユーロの税金がどれだけたくさんの命を救ったのか計り知れない。税の力の大きさを改めて知った。少しのお金をこつこつと集め、病気の人たちを救うという仕組みは募金活動に似ていると感じた。こう考えると一ユーロ航空券税は人と人とがお互い支え合うための大切な募金であると解釈できる。

私たち中学生でも身近に感じることができる税として消費税がある。その消費税が近年八パーセントに引き上げられ、さらに一〇パーセントに引き上げられるかもしれないという話を耳にした。何か物を買うにしても必ず消費税は付いてくる。ものを買うときにしばしば税の大きさを思い知る。他にも、仕事の給料から引かれる所得税、家や土地にかかる固定資産税など様々な税があることを母に聞いて知った。

引かれていく税は決して少ないものではない。だから、無駄なく有意義に使って欲しい。一ユーロ航空券税のような本当に役に立ったと思える使い方をして欲しい。日本でも福島の仮設住宅で不便な生活をしている人達がいる。また、障害のある方たちのための設備はまだまだ足りない部分がたくさんあるだろう。そういうところに税が役立てられれば良いと思う。きちんとした税の使い方をすれば、納める時も、みんなが支え合える明るい社会への募金だと思い、快く納税できる。だから、私はみんなが支え合える社会になることを願って税を納めます。

税金の大切さ

岡山市立芳田中学校３年　　笠　富花

今まで、私は税金など必要ないと思っていました。なぜなら、おこづかいの金額はあがらないのに、消費税があがったため出費が多くなりやりくりするのが大変になったからです。

しかし、税理士さんが行ってくれた税金についての授業を受け、税金について興味をもち家に帰って母に身近な税金についての話をしてもらいました。

すると、今までの税金に対する考え方が大きく変わりました。

一つは、医療についてです。今までは、病気になったりケガをしてかかる治療費を出してくれているのは親だと思っていました。ところが、親は治療費全体の三割しか出さなくてよく、残りの七割は税金によって支払われているということを知りました。

二つ目は、私達がお世話になっている義務教育に必要な先生の給料や教科書代、設備の整った教育環境なども税金から支払われていると知りました。

そして、一番心を動かされたのが社会福祉です。私には、重度な障がいをもった弟がいます。弟は自分で排泄分の処理をすることも歩くこともできません。そのため、毎日使う大量のおむつや移動時に使う特殊なバギーが必要です。また、てんかんの発作もあり入院をしたり薬も毎日必要で救急車にもお世話になります。それから放課後児童ディの利用もしています。これら、全ての料金は税金のおかげで一割の負担で済んだり無料になります。

もし、税金がなければ病気になったりケガをしても病院に行けなくなります。教育だって受けられなくなり生きていくための知恵を知ることができません。さらに、弟の生活に必要な物を買うことも施設の利用も難かしくなり、弟も苦しい思いをしないといけないし、父や母、兄姉達も重い負担がかかります。

こうして、身近な税金を考えてみると生きていくために本当に必要で大切なことだと分かりました。税金についての授業は、税金について考えるよいきっかけとなりました。

私が、大人になっても税金の必要性や大切さを忘れず、働いてたくさん給料をもらいたくさん税金を納めたいと思います。

そのためには、今、税金によって生かされているということに感謝し、たくさん勉強して精一杯働けるようにつとめたいです。そして、次の世代に税金の大切さを伝えたいです。

祖母を守ってくれた税

広島市立高取北中学校２年　　栗栖　もも花

私は「税」と聞くと、「消費税」が思い浮かびます。商品を買うときに、その八パーセントのお金が上乗せされるので、私も周りの大人も、税金の制度を嘆いています。税金に対して負担のイメージしかなかったので、税について調べてみました。

私たちの身の周りには、税金によってつくられたものが数多くあります。道路、市役所、図書館、公園、警察、消防署などです。これらは、公共施設、公共サービスと呼ばれています。もし、税金がなくなって、公共サービスが受けられなくなったらどうなるでしょう。水道は整備されていないし、ゴミの収集がなくなり、町中にゴミがあふれ、伝染病が流行します。犯罪に巻き込まれても、警察に助けを求めることができません。さらに、信号機がなくなったら、たった一日で事故が多発し、負傷者、死者がたくさん出ると予想できます。そして、私たちが毎日通っている学校にも行けなくなってしまうのです。税金は、暮らしにかかせないものだと痛感しました。他にも、科学技術の発展や海外の援助などにも役立っています。記憶に新しいのは、去年の広島市安佐南区の土砂災害です。流れ落ちる土砂の中、多くの自衛隊が救助活動をおこなってくれました。税金の使い道の幅の広さに驚きました。

そして、私はある出来事を思い出しました。「大変な病気にかかって辛いけれど、医療費が全部無料になるから、本当に助かる。」
これは、母と祖父が、リウマチと間質性肺炎という病気を患っていた祖母のことを話していた言葉です。私は、なぜ、祖母の医療費が無料になったのか気になったので、母に詳しく話を聞いてみました。すると、祖母は、こうげん病という特定疾患だったので、治療費、検査費、入院費がかからなかったそうです。医療費の心配をせず、病気の治療に専念することができました。そして、母は、「おばあちゃんは、もし医療費が全額負担だったら、毎月数十万円もの医療費を何年も払わないといけないことになっていたんだよ。そうなると、おばあちゃんの性格だったら、家族に迷惑をかけるまいと、治療を断固拒否していたかもしれないね。」
と、言っていました。私たち家族は、税金によって救われたのです。私の大好きな祖母を守ってくれた税金は、国民が一生懸命働いて得た大切なお金を出し合い、成り立っています。税金は、日本人の支え合いの心を表していると感じました。

このように、私は税について「知る」ことで、税に対する考え方が今までと百八十度変わりました。税は、私たちにとって悪いものではなく、生活に、安心、安全、豊かな暮らしをもたらすものでした。弱い立場の人を守ってくれる大切な制度なのです。この学びをこれからも忘れずに、将来、胸を張って納税のできる大人になりたいです。

限りある税金を考える

学校法人広島城北学園広島城北中学校３年　　花田　隆二

僕には、八十五歳になる祖母がいます。持病があり、月に一度は病院に通っています。その病院であるお年寄りの会話を耳にしました。その内容は、

「消費税は上がるばかりで年金は減り、医療費の負担額は上がり、２カ月 10 万ばかりの年金で病院代、おむつ代、生活費をきりつめながらやっていくのは楽ではない。年をとればつまずいたり、こけただけでも簡単に骨が折れ、かかりたくなくても病院の世話になってしまう…。私らみたいな年寄りは、長生きしてはいけない時代が来たんじゃねぇ。」

「ほんまそうじゃねぇ。でも、私らはちゃんと自分たちの年金で払うものを払って生活しとるけど、私らよりもずいぶん若い人でも生活保護もらって生活してる人いるじゃない？立派な息子や娘がいるのに生活保護受けるために息子が定職につかず、アルバイトの仕事しかせずに、親は親で生活保護もらえるようになったら、医療費がかからないのを良いことに、悪くもないのに病院にかかっては不正に薬をもらって自分の息子や娘にやる人だっておるらしいから、常識のない人が増えて困ったものよねぇ。」

と、いうものでした。その何気ないお年寄りの会話を聞いて僕は、小六だった頃に聞いた朝の悲しいニュースを思い出しました。年老いた母と知的障害を持った娘が、餓死して一カ月以上経って発見され、発見された時には水道・電気・ガスといったライフライン全てがずいぶん前に停止されていたという事件です。本来ならば国から保護されて当然であるはずの餓死した親子は生活保護も受けていなかった事と、お年寄りの会話に出て来た、本来なら生活保護を受けるべきでない人が平然と当たり前のように保護されている矛盾に、何とも言えない位腹が立ちました。

税金にも限りがあります。保護を申請する人だけが保護されるのもおかしな話ですが、国の税金に保護されている自覚が無い人達が増加している中、全てを国の税金で保護し過ぎて、制限が無いから余計な薬をもらうのでは？生活保護の方にも上限を決めて、上限以上にかかる医療費は、保護手当てから支払うようにすれば？と思います。

少子高齢化だからこそ、税金には限りがあるという現実を形にするべきではないでしょうか？無制限に保護すればするだけ、国の税金に、おんぶにだっこ状態になる人間の心の弱さを理解することも必要だと思います。働けないのと、働かないのは全く別、全てを国の税金で保護していくのは無理です。足りなければ税金上げればいいじゃないか？取れるところから取ればいいじゃないか？と考えがちですが、今ある制度を無制限から上限に変える事で削減できる税金の使い道があるように思います。大切な税金の使われ方、改善が必要な点を見直すことで、皆の税金に対する理解を得られるようにと思います。

税金から考えたこと

鳴門市大麻中学校３年　　小川　真歩

私の祖父母は団地に住んでいる。この団地の住民はほとんどが高齢者である。私が小さかった頃に団地に行くと何人ものおじいちゃんやおばあちゃんが声をかけてくれてうれしかったのを覚えている。小学生になって、祖母とこんな話をしたことがある。この団地には昔はたくさんの子どもがいたけれど、その大半が大人になって団地の外や県外に働きに出てしまったと。そして今は子どもや若い人が少なくなってしまったらしい。

これはこの団地だけの状況ではない。日本は今、世界で一番の長寿国となったが、生まれてくる子どもの数が減っているので少子高齢化社会になっている。これからも子どもの数は増えるとは考えにくいので、かなり深刻な問題となってきている。私はこのことの一番の問題点は、高齢者を支える働き手が少なくなってしまうということだと思う。これから私達はその働き手になり、日本の高齢者を支えていかなければならないのだ。働き手と高齢者の比率は、一九九〇年は働き手五人で一人の高齢者を支えていたのだが、二〇五〇年には働き手一、二人が一人の高齢者を支えると予想されている。

高齢者を支えていくためには、生活費や、医療費や、たくさんのお金が必要だ。だから、消費税が五％、八％、そしていずれは一〇％と上がっていくのだろう。百円の物を買うだけでも、八円の消費税を払わなければならない。私もお小遣いをためて二万円の音楽プレイヤーを買ったとき、なんと消費税を千六百円も払ったのだ。その時はすごく嫌な気持ちがした。千六百円もあれば、本が二冊以上買える。なぜそんなに税金を払わなければならないのだろう、と腹が立った。私のように不満を持つ人は大勢いるだろう。

だが、よく考えてみると、そうやって、少しずつ、みんなからお金を集めているのが税金なのではないだろうか。十分な税金がなければ、高齢者が医療費や年金がもらえない。若い人が少なくなってきているから、一人当たりの負担が増えるのは仕方のないことだと思う。税金は立場の弱い人のために使われることが多い。だから、若くて元気な人はきちんと働いて、働いたお金の中から少しずつ出し合っていけばいいと思う。

私は、強い人も弱い人も、お金持ちも貧しい人も、病気の人も元気な人も、子どももお年寄りも、みんなが支え合っていく社会に住みたいと思う。困っている人がいたら気持ちよく手を差し伸べて助けてあげられる人になりたいと思う。税金もそんな助け合いの一つの形だと思う。お金を余分に払うことは好きではないが、そのお金が弱い立場の人の所にうまく届いて、その人たちに幸せが届けられたら納得できる。私もいつかは高齢者になり、支えてもらう立場になる。そうなるまでは私が働き手になったらきちんと税金を納めていきたい。

税金があることに感謝する

愛南町立御荘中学校３年　　谷口　結梨花

私には、二歳離れた弟がいます。でも、弟は、「脳性まひ」と診断されています。だから、自分で歩いたり、指先を器用に動かしたりすることが難しく、話す言葉も単語でしかしゃべることができません。弟は、「特別児童扶養手当」という月に五万円が支払われる手当をもらっています。

弟は、歩く練習をするときに「装具」という体を支える動きをするシューズのようなものをはいています。車椅子や外用のバギーというベビーカーのようなもの、食事をするときに台が取り付けられる椅子など様々なものを生活の中で使用しています。これらを購入するときには値段の一割を自己負担しています。また、値段によって上限三万七千円ほどの金額を自分達で支払い残りの金額を手当てで負担をしてもらっています。

母から、「この手当は税金で支払われよる。」と聞いたときは、感謝する気持ちがわいてきました。なぜなら、私の家は、姉二人が県外の大学と専門学校に通っていて、お金のかかる環境の中にあるからです。その中で、少しでも生活の負担を減らしてくれることはありがたいからです。様々な方法で税金を納められているおかげで、このような生活状態にある人を手助けしてもらっているということを心にとどめ、私自身、弟の世話をして車椅子を押すときなど、大切に扱おうと思います。

弟だけでなく、私たちのような中学生でも手当のようなものを受けることが愛南町にはあります。それは、「子ども医療費助成制度」というものです。これは、入院医療費の負担・通院無料化を実施したものです。

私は、この制度に関しても、感謝の気持ちでいっぱいです。その理由は、自分たちの保護者などが働いてくれ、町に税金を納めてくれているおかげで、このような充実した治療などを受けられるのだと思ったからです。

他の市町でも同じような制度をとっているところがあります。この中の一つに埼玉県の松伏町の町役場のホームページにこのような言葉が書かれていました。それは、「……は、皆様からの貴重な税金を財源としています。」というものです。私は、これを見て、税金が財源とされているということに様々な思いが浮かびました。この言葉を心にとどめて生活をしていきたいと思いました。

公民で勉強したときに、将来約二人で高齢者一人を支えるようになるので、たくさんの税金が必要になると知りました。私も将来働くようになったら、しっかり払うべき税金を払って、様々なところで自分の納めた税金が役に立てばいいなと思います。また、自分が子どものときに受けている補償を、次の世代の人たちにも安心して引き継ぐことができるようになればいいなと思います。

祖父の命をつなぐ税

飯塚市立飯塚第一中学校３年　　佐伯　澪奈

私の祖父の手足は、日を重ねるごとに痛みが増し段々動かなくなっていきました。あまりの痛さに一晩中眠れない日もあったそうです。数え切れない程の病院を回りましたが、病名は分かりませんでした。希望の光が見えたのはそんな時でした。山口県に神経系に詳しい先生がいらっしゃるという事が分かったのです。そして精密検査を行った結果、難病指定の病気だと言う事が分かりました。祖父が痛みを訴え出して、実に七年という年月が経っていました。病名が分かりほっとしたのもつかの間、そこには辛い現実が待っていました。通常、その病気を発症して何も治療をしなかった場合、約十年で亡くなってしまうそうです。祖父が病気を発症したのは七年前なので、もう少し遅ければ手遅れだったかもしれません。治療する為には、一錠数万円もする薬を毎日呑み続けなければなりません。年間二千万円以上もの薬代を家庭から払い続ける事はとても困難です。祖父の病気は難病指定の病気なので、治療費は全て国が負担してくれています。すなわち税金です。更に手足が不自由なため、介護が必要で車椅子等も欠かせません。それらも全て税金によってまかなわれています。父からその話を聞いた時、感動すると共に、税金に対して心から感謝しました。

その後祖父はというと、発症してから十年経った今も治療のおかげで、前向きにリハビリに励んでいます。

これは私が祖父の入院している病院へお見舞いに行った時の事です。その日はちょうど、退院後のリハビリの方向性を決めるための話し合いが行われていました。せっかくなので、私もその話し合いに同席させてもらうことにしました。そこで驚いたのは、リハビリに携わっているスタッフ約十名、主治医の先生をはじめとするドクター数名、元々お世話になっていたケアマネージャー、福祉用具貸与の業者の方、総勢約二十名もの方々がたった一人の祖父のために真剣に考えてくれていた事です。その時「ああ、祖父はこれ程の人達に支えられて今ここにいるんだな」と思いました。と同時に、これ程の手厚い保証を受けるには多額の費用がかかるのではないかと、心配になりました。後日父にその事を訪ねると、保険等でまかなえるのでお金は一切かからないとの事でした。病院関係者の方々だけでなく、税金という形で国にも支えられているのだとつくづく感じました。

今は実感が湧かないかもしれませんが、将来私達や私達の大切な人が病気になったり年をとった時、介護が必要になる時が来るかもしれません。しかし、税金を誤魔化したり、払うのが嫌だと思っている人がいるのも現状です。今そのお金で命を救われている人がいる事、いずれ私達がそうなるかもしれないという事を、決して忘れないで欲しい。それが私の願いです。

明るい未来のために

遠賀町立遠賀中学校３年　　黒木　愛加

今から６年前の冬、私の祖父は仕事から帰宅途中、脳出血で倒れた。当時、私はまだ小学生で、小さな頃から色々な所に連れて行ってくれ、可愛がってくれた祖父の突然の出来事に、驚きと悲しみ、そしてやるせない気持ちで一杯だった。幸いにも祖父は一命をとりとめたが、一生、病院のベッドでの入院生活を宣告された。

悲しみに明け暮れる日々が続いたが、祖母は気丈にも入院費用を稼ぐ為、必死に仕事をしていた。これは、私が後に祖母から聞いた話だが、

「あの時は、おじいちゃんが急に倒れてしまったでしょ。借金もあったし、目の前が真っ暗になったんよ。でもね、おじいちゃん、障害認定を受けられるようになったし、病院代もほとんどが戻ってきたんよ。車椅子やベッドも国からの援助で助けてもらっとるんよ。みんな、日本の税金のおかげなんよ。」

と話していた。その時の私は、税の事は消費税くらいしか思いうかばないほど何の感心もなかった。祖母の話を聞いて、以前、

「消費税８％とか最悪。」

などと言っていた自分が恥ずかしくなった。もしも、この時祖母が国からの援助を受ける事なく、全てを負担していたら、祖母自身もこんなに前向きにはなれなかっただろう。医療費や介護費を支える税金の力、社会の人達の協力があったからこそ乗り越えることが出来たのだと思う。

今、祖父は車椅子を自分で動かせるようになった。会話をすることは出来ないが、私が学校で楽しかった事や、文化祭、体育祭のこと、テストの結果など、たわいもない話をすると、うれしそうに笑って、うなずいてくれる。ジェスチャーで私に質問をしてくれるようにもなった。

ここまで祖父が回復できたのも、国民の健康や生活を守るために、税金が使われているからだ。そのことが身近に感じられ、とても有難く思った。

日本では現在、少子高齢化が急速に進行している。医療、介護などの社会福祉に使う予算は増えるばかりだ。しかし私は、これらの予算は、必要としている人に適切に使われるのであれば、なくてはならないものだと思う。しかし、次世代の私達に大きな負担がかかるのも事実である。

これから私達が出来ることは、税についての知識を持ち、正しく理解することだと思う。消費税が８％に上がり、さらに、もうすぐ 10%に上がるだろう。しかしこれは、私達の大切な人が安全で豊かな生活を送るために必要なことだし、何より私達自身も教育費、医療費など国からの税金の負担によって生活を支えられている。だから、将来私が仕事をし、税金を納める立場になったときは、私達の生活と明るい未来のために、しっかりと税を納めていきたいと思う。

教科書の重み

小城市立小城中学校３年　　田中　結

「今日も、ずっしり重いねぇ。」
登校する私の通学かばんを持ち上げる母のいつもの言葉だ。特に、五教科全ての授業を受ける日は、教科書やノートが二十冊程になり、かばんがパンパンになってしまう。その重みがずっしりと肩にのしかかってくる。

新年度の始業日、真新しい教科書や副読本などが皆に一斉に配布される。（一年間よろしくね。）配られた教科書にひと声かけて、ゆっくりページをめくる。（今年はこんな事を勉強するのか……。楽しみだなぁ。）毎年、この瞬間に心が引き締まり、背筋がピンと伸びるのを感じる。

小学一年生の入学式当日、初めて教科書を手にした時の感動を今でもよく覚えている。カラフルでワクワクするような美しい教科書達は大切な宝物だった。何度もランドセルから出し入れしては、両親や妹へ得意気に見せびらかしたものだ。

あれから九年間、毎年欠かさず新しい教科書をいただいた。私は九年分の教科書全てを今でも大切に保管している。時々過去の教科書を開くと、赤ペンで引かれた線、先生からもらった花丸等、私の学んだ歴史がしっかり残っている。

この沢山の教科書は、全て尊い税金でまかなわれている。一体、私達の教科書や資料集のためにどれくらいの税金が使われているのだろうか。調べてみて驚いた。なんと中学三年生一人が使う一年間の教科書代だけで、一万五千円もかかっていたのだ。全国全ての中学生は等しくこの恩恵にあずかっていることになる。そして教科書だけでなく、学校で使う全てが税金でまかなわれている。だからこそ、自宅で節約に努めるように、学校でも節約を意識しなければならない。つけっぱなしの電気、流しっぱなしの水は無いだろうか。備品は大切に使っているだろうか。今一度、見直すべきである。

日本の財政は決して余裕があるわけではない。むしろ、千五十兆円という莫大な借金を抱えているという試算もある。また、社会保障や公共事業、来たるべき東京オリンピック等、投資すべき先は数多くあるにも関わらず、私達のために膨大な予算を組み、優先的に税金を使って下さっている。その事に感謝し、またこれからの国の財政についてもしっかり関心を持ち続けていきたい。

教科書の裏表紙には小さな文字でこう書かれている。
「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

通学かばんの重みは納税者の方々の私達への期待と励ましの重みだ。この重みと感謝の気持ちを忘れず、今日もしっかり学んでいきたい。

私と税金

長崎県立諫早高等学校附属中学校３年　　西川　櫻

私が税金に興味を持ち始めたのは、小学校低学年の時です。何気なくパソコンを開いたら、財務省のホームページで『ファイナンスらんど』というものを見つけました。私は、そのサイトに書いてあった内容に驚いたことを覚えています。

「なんてたくさんの種類の税金があるんだろう。」

私はその時消費税の存在しか知らず、建物や車、さらにはお酒やたばこにまで税金がかかっていることを初めて知りました。

このサイトで税金について興味を持った私は、いつしか職業体験をしてみたいと思うようになりました。実際に働いて、お給料をもらって、税金をきちんと支払って、残ったお金でお買い物を楽しむ。社会の模擬体験をして、税金のことをもっと知りたいと思いました。

そう思っていたある日、学校であるパンフレットが配られました。それは社会の模擬体験ができる『こどものくに』が長崎で開催されるので、ボランティアを募集します。というものでした。こどもだけでお金を作ったり、市長を選んだり、お店を開き物を売る。私がしたいこととピッタリでした。私はもちろん参加しました。

その『こどものくに』で私が感じたことを二つ挙げたいと思います。

一つ目は「働くのって大変だけど楽しい！」ということです。普段から当たり前のように親が稼いできたお金で、ご飯を食べたり学校に行ったりしている私たちですが、それができているありがたみや、自分で稼いだお金で買い物できる喜びを感じました。

二つ目は「税金は必要不可欠だ」ということです。カフェや本屋、スーパーマーケットなどは売り上げからお給料を払えばいいですが、警察や市役所のお給料や公共サービスは市民の税金から払われているので、それが無くては仕事が成り立ちません。『こどものくに』を通して、改めて税金の大切さを感じました。

しかし、税金が必要だと分かっていながら、世の中には税金を払わない人が少なからずいるという事実を知りました。その時、私は社会の先生が授業中に言っていたことを思いだしました。

「義務を果たさない人に、権利はない。」

国民の三大義務の一つである納税を守っていないのに、権利を当たり前のように受けようと考える人にこの言葉を聞かせて、そういうことを考える人がいなくなってほしいと思います。

税金を払えば、それ相応のことが自分に返ってきます。だから私は先ほど言ったような大人にはなりたくないなと思います。

きちんと三つの義務「教育を受けさせること」「きちんと働くこと」そして「税を納めること」を守っていきたいと思います。

責任をになえる“幸せ”

玉名市立天水中学校２年　　上村　紗生

私の祖父は、建設業や農業を一生懸命に頑張ってきた人です。祖父の父は祖父が三才の時に亡くなり、親からの財産どころか身内の借金を払う生活で、ずっと貧しかったそうです。やっと人並みに暮らせるようになってからも、貧しかった時と同じように働いて、周りの人が

「幸太郎さんはくつばはいたまま飯ば食わす。」

と言われていたそうです。

私がまだ小さかった頃は、苺の仕事を頑張りながら、祖母と二人で所得税の青色申告をしていました。申告をする時期と仕事の忙しい時期が重なるので、とても大変そうでした。夜遅くまでパックづめをして出荷を終わらせた後に、さらに申告の書類を書くために計算したり、何枚もあるレシートを見直ししたりしていました。他の家族ではできない事だったので本当に大変だっただろうと思います。そうして完成した申告書を提出しに行く時、祖父も祖母もいつもとは違うきちんとした服で出かけて行きました。二人とも緊張していたと思います。帰ってきた時は笑顔で、

「おかげさまで無事終わったよ。」

と言っていました。大変な思いをして申告をして、うれしそうに帰ってくる。不思議な気もしていましたが、今になってみると二人にとっては一年間自分達が頑張った記録のようなものであり、税を納める、という事の中に、貧しかった頃を思い出して、安心感を持っていたのではないかと思います。祖父が、

「所得税を納むるていうこつは、世の中に貢献でくっていうこつだけん。」

と言っていたからです。

そんな祖父が肺を悪くして仕事を止めなければならなくなった時、家族皆がとてもさびしく、何よりも祖父の心を心配しました。仕事が生きがいだった祖父が、これから先、何を励みにして生きていけるだろうかと。

祖父が仕事を止めて六年が過ぎました。現在祖父は、市から貸して頂いている歩行器を使って父と母と祖母が働く畑の周りをリハビリを兼ねて毎日歩き、見周りします。昨年の暮れに知り合いの方が家に来られて、祖父にどんな年だったかと聞かれました。祖父はうれしそうに大きな声で

「幸せな年じゃったあ。」

と言ったそうで、それを聞いて私達家族はうれしくて泣きました。

一生懸命に働き、税を納めるという責任を果たしてきた祖父は今、福祉を受けて幸せに生活しています。頑張りが報われる社会が続くように、私も仕事をして、税を納めて、私達皆が生きるこの社会を支えられる人間になりたいと思っています。

身近な税

大分市立南大分中学校３年　　森　天音

毎日、何気なく通り学校までの道。その中で、私にとって思い出深い場所があります。

今から六年前、小学三年生の時のことです。社会科で自分たちの町をよく知るため、校区探検を行いました。気付いたことを挙げていくと、危険箇所や不便な所が見つかりました。そこで、どうすれば改善されるのか、私たちに何が出来るのか話し合いました。その中で、大分市長さんに私たちの話を聞いて頂いてはどうか、という案が出ました。今だったら、始めから無理だろうと思ってしまうような話です。ですが当時の私たちは、必ず実現するはずだという、根拠の無い自信がありました。そして、市役所の方や先生方のご尽力で小学校に市長さんがお越しくださいました。私たちの要望を伝えた後、握手をした市長さんの手が大きく、温かかったことを今でも覚えています。その後、要望が改善されました。例えば、木で隠れ、信号機が見えづらかった交差点では、木が切られ、交通量が多く危険だった箇所には、ガードレールが設置されました。

当時は、自分たちの思いが形になったことへの嬉しさと誇らしさを感じるだけでした。ですがある時、ふと気付きました。木を切るのも、ガードレールの設置も全て税金によってまかなわれていたのです。

今、私の妹はあの時の私と同じ小学三年生です。先日、妹と税金について話しました。彼女が知っている税金は消費税だけでした。そして彼女は、自分の生活が税金によって支えられていることをきちんと理解していないようでした。そこで私は妹に、私の小学三年生の思い出と共に、わかりやすく税金の仕組みについて説明をしました。また、教科書も税金により無償だと教えました。教科書だけではありません。机や椅子、図書館の本なども税金によるものです。妹と話している内に今の学校生活がどれだけ恵まれたものであるかを私自身も改めて実感しました。勉強をするのは、私たちの権利です。そして、その権利をも税金は支えてくれているのです。妹も税金を身近に感じてくれたようでした。税金に支えられている生活へのありがたみを少しでもわかってくれたかと思うと嬉しくなります。

私も将来、税金を納めるようになります。もしかすると、納税を負担に思う人もいるかもしれません。ですが、自分の納めた税金が住みよい社会をつくるための資金となり、今を支え、未来を創っていくと考えてみてはどうでしょうか。そう考えると、きちんと税金を納めることの大切さがよくわかり、社会の一員としての自覚が生まれます。また、納税は恩返しでもあります。これまで支えてもらった分、今度は私が支える側になるのです。だから私は、きちんと税金を納めるという、大切な義務の一つであり責任を果たす大人になりたいと思っています。

「僕達の暮らしと税金」

沖縄市立宮里中学校３年　　内村　仁

眠い目をこすりながら洗面台へ行き、顔を洗い歯を磨く。ようやく目が覚めた。洋服に手を通しながら窓からぼんやり見る景色。いつもと変わらない朝の町並み。そこへ「ゴミ出してきてー。」と母親から声がかかる。「エ～」と言ったものの抵抗できる訳もなく、無言でゴミを手に取りバタンとドアを閉めた。ごく普通の朝の光景だ。こんな在り来りの一日の始まりを、ごく当り前だと思っていた。

夏休みに入り、社会の宿題で税金の作文を書くことになった。「税金…」と言われてもピンとこない。国民の三大義務の一つである事は知っているが、深く考えた事は無かった。確か消費税は５％から８％に上がったばかりで、中学生の僕でも多少の貢献ができる税金だ。それ以外は大人になってからの遠い話のように思えた。まずは、税金の事を知らなければ作文など書けるばずもなく、取りあえず調べる事から始まった。調べていくうちに、僕の世の中に対する無関心さに気付かされた。平凡でごく当り前だと思っていた生活は殆どと言っていいぐらい税金で支えられているのだ。頭の中で「税金がもし無かったら」と想像してみた。朝起きて洗面所へ行くと、いつも回っている洗濯機が動いていない。洗濯物の山だ。顔を洗おうと蛇口を回す。こんな水では到底口もゆすげない。顔を洗う事を諦めた。洋服に手を通しながら窓からふと町並みを見た。町中がゴミだらけ…収集車が来ないのだ。急病で苦しむ人がいても救急車は来てくれない。犯罪が起きても、火事になっても警察や消防車も来ないのだ。学校はどうだろう。やはり教科書もなく、机や椅子、黒板さえもなくなる。体育用具や実験器具、パソコンだってそうだろう。自分の回りを見まわしただけでも一変してしまうのだ。こうして無関心だった僕が、改めて回りを見わたした。

舗装された道路に、手入れされた街路樹。朝八時少し前に聞こえてくるゴミ収集車からの音色。台所では母が食器を洗っている。蛇口から出る水の音さえ有難く思えた。

僕の意識の中では、税金は支払うもの、取られるものと、何となく負のイメージがあった。そうではないのだ。お互いが支え合い、協力し合って安心して暮す事が出来る社会をつくり、維持し運営していくという大きな役割がある。僕がどこでも安心して歩く事が出来るのも、部屋の窓から眺めるきれいな町並みも当り前ではないのだ。身近な事だけでもこうして多くの恩恵を受けている。僕が働き盛りになる頃、さらに深刻化すると言われている少子高齢化。その時に、より一層の支え合いと協力が必要となるのだろう。この安心で安全な豊かな暮らしを守っていなければならない僕たちの責任は重大だ。しかし、僕はこの町、この国が好きだ。

いつものように、洋服に手を通しながら窓の外を眺めていると「ゴミお願いねー」と母の声。何故か素直になれた。

祖母の笑顔と納税

那覇市立那覇中学校３年　　喜納　彩

「明日はスイミングの日だから準備しなくちゃ。」
私の祖母は歩行器を使いながら楽しそうに準備をしている。

二十六年前、私の祖母は脳梗塞で倒れ、一命をとりとめたものの今でも足に麻痺が残り、歩行器や杖がないと歩くことができない。

脳梗塞という病気は、手術後のリハビリによって回復するかしないかが決まるそうだ。そして、リハビリによって取り戻す事の出来た機能は、一生涯リハビリを続ける事で維持される。

祖母は手術後、言葉も上手く話せず、体も動かせなかったが、懸命なリハビリのお陰で言語は回復し、足の一部に麻痺は残ったが、それ以外の体の機能は回復する事が出来た。リハビリは二十六年前から現在まで続いている。明日はそのリハビリの日でスイミング教室なのだ。他にも祖母は手先のリハビリで紙粘土教室等にも行っている。祖母は楽しそうだ。そして祖母は私によくこんな事を話してくれる。
「社会福祉という制度は本当に有り難い。」
祖母は二十六年間もリハビリのサービスを受けている事にとても感謝している。そして祖母だけでなく、家族にとっても社会福祉に助けられ感謝している。社会福祉の基盤は税金である。税金のお陰で祖母は助かり、リハビリを続け現在も元気に暮らしている。税金が私の祖母を助けてくれたのだ。

税の仕組みについて調べてみると、社会福祉だけでなく、自分自身が受けている恩恵も沢山あって驚いた。当たり前に使っている水や道路、小さい頃によく遊んだ公園や図書館もそうだ。生まれる前、母のお腹の中にいる時から診察を受け、生まれた後は検診や予防接種を受け、その後も度々病院のお世話になりながら元気な私が今ここにいる。

日常生活や身の回りにある当たり前にあるもの、それは当たり前ではなく税金によって成り立っているものが多く、私達の暮らしを豊かにしてくれる。暮らしが豊かになれば、笑顔になる人が増える。税を納めるという事は、人の笑顔を作るという事に繋がるのではないだろうか。

今日も祖母は笑顔でリハビリに行く。祖母の笑顔を作ってくれている税金に感謝し、私も一人でも多くの笑顔を作れる納税者になりたい。

明るい「未来」のために

札幌市立もみじ台南中学校３年　　鈴木　靖乃

消費税が増税することに対して、様々な意見がある。ニュースなど見ていても、増税のメリットとデメリットが紹介されていたにもかかわらず、街の人の多くは反対をしているようだった。母に聞くと、生活用品なども課税されるので、家計にも影響があるとのことだった。では、私の家のような庶民の家庭にも負担を強いる消費税を上げなければならないのか。

消費税の増税分は、社会保障費に充てられるという。少子高齢化が進み、十五年後には、現役世代一・六人で一人の高齢者を支えなければならない時代が来る。これは今まで以上に若者の負担が増えるということである。そのような状況においても充実した社会保障制度を維持するための財源が消費税なのである。増税は、次世代に借金を残さないようにするためにも、必要なことなのであると、私は考える。

それにもかかわらず、反対意見が出るのは景気を悪くして国民の生活を苦しめるだけと、考えている人が多いからなのではないかと思う。実際、消費税増税は所得税などの減税とセットで行われているにもかかわらず、景気がよくなっているという実感は、なかなかもてないのが現実のようだ。

また、増税によって増えた収入を、しっかりと目的に合った使い方をしているかどうかが分かりにくいことも理由の一つであると考える。父に尋ねると、そもそも、私たち国民の多くは、国家予算を見ても、それぞれの予算でどのようなことができるのか、何をどの程度倹約できるのかは、よく分からないのが正直なところであるという。その話を聞いた時に、東日本大震災後の復興支援費の一部が当初の目的どおりには使われなかったことについて新聞で読んだことを思い出した。

これらのことから、私は、消費税の増税を「社会保障のために」と一言で片付けるのではなく、今後の動きも含め、もっと分かりやすく説明する責任があると考える。目的に合った使い方をすることが大切であり、増税を決めた国会や政治家、予算を立案した財務省、実際にお金を使って仕事をした人たちが、国民一人一人が納得できるような説明をしていくことが求められていると考えるのだ。

日本は、古来「思いやり」を大切にする国である。「今」を生きていくうえで多少の苦しさはあっても「未来」のために、助けが必要な人のために、「今」やらなくてはいけないことを考えていく「思いやり」は、日本人だれもが持っていると考える。明るい「未来」が聞け、国民一人一人が過ごしやすく、だれもが平等な世の中になるのが理想である。増税が国民みんなでそんな世の中について考えるきっかけになるという実感を持って、前向きに生活していきたいものである。

支え合いの輪

野田村立野田中学校３年　　小野　紗恵花

私達の身のまわりの物には税金が課せられている。身近なものでは消費税があるが、他にも酒税やタバコ税、所得税に住民税、県民税、固定資産税、相続税等、様々な税が存在するのだ。しかし、私に最初から税に関する知識があった訳ではない。私の知識のほとんどは、租税教室での学習から得たものである。その授業を受けて、特に印象に残った税があった。それは、「復興特別所得税」というものだ。

私は小学四年生の終わりに、あの東日本大震災を体験した。地震が発生した時、私は所属する合奏団（吹奏楽クラブ）で、六年生を送る会をしていた。突然襲ってきた激しい揺れに、それまでの楽しい雰囲気は一変した。そして、それまで経験したことのない恐怖と、これから起こることへの大きな不安に震えていた。その後起こったことは、多くの人が知る通りである。大津波は、沢山の家が並ぶ住宅地や憩いの場であった公園をめちゃくちゃに破壊し、何もかも奪い去っていったのだ。その被害を目の当たりにした時、これほど大きな被害では、復旧・復興にはとても長い時間がかかり、村民の心の傷が治るのも遅くなると思った。

あの日から四年あまりの歳月が流れた。今、野田村の復興も進んでいるように見える。そんな村の様子を見て、私は、村の人達が頑張ったからだとか、ボランティアの人達の支えがあったからだと思っていた。でも、それだけではなかったのだ。復旧と復興は村民の努力と多くの人の支えがあったことはもちろんだが、税金のおかげでもあったことを私は知った。

「復興特別所得税」は、東日本大震災からの復興に必要な財源を確保するために設けられたという。平成二十五年から四十九年までの各年に所得税を納める人は、この税も併せて納めるそうである。私は、復興には納税という形で、多くの人が関わっていることを知った。同時に被災地に生きる中学生の私も、多くの人達に支えられているということに気づいた。毎日の学校生活も、部活動で使用する村の体育館も、怪我や病気の時にお世話になる病院も、みんな税によって成り立っているのだ。

国民が様々な形で納めた税金。この税が、様々な形で国民を支えているのだ。人と人とが手を取り合い、支え合って生きていくように、私達も税もその支え合いの輪の中にある。今回の租税教室を通して私は、納税することの意味や大切さを理解できるようになった。私の愛するふるさと野田村も岩手県も、税によって支えられながら復興へ向けて歩んでいる。野田村をはじめ被災地の復興は、私達の切実な願いだ。だからこそ、将来納税の義務をしっかり果たせる大人になりたい。そして、支え合いの輪の中の一員に、私もなりたい。

「納税は人の為ならず」

秋田大学教育文化学部附属中学校３年　　小川　敢多

最近、税に関する話題に関心を持つようになってきた。昨年、消費税率が八パーセントになり、さらに再来年の四月には十パーセントになろうとしているからだ。中学生である私には大人たちに比べれば、大きな影響はないように思われるかもしれない。だが、限られたお小遣いで好きな本やお菓子を買おうとした時、じわりと実感することが多い。

なぜ、消費税は増税されたのだろうか。新聞やテレビでは、増えていく社会保障費の財源の確保や国の膨大な借金を返済し、財政を再建するためなどと伝えている。だからといって、増税を歓迎する人は少ないだろう。

お盆に父方の親戚の家に行った。大正時代から続く酒屋で、他の酒屋が廃業していくなか、いまだに続いている。部屋の中にはご先祖様の写真とともにたくさんの賞状が飾られていた。その中に

「あなたはよく納税の重要性を認識され、十九年間にわたり常に率先して国税の適正な申告と完納を続けられました。これはまことに他の模範とするところであります。よってここに表彰します。」

と書かれた私の曽祖父や大叔父に対する仙台国税長からの表彰状が目に留まった。

父や祖母に聞いたところ、曽祖父や大叔父が真面目に税金を納めていたのは曽祖父の母親の影響が大きかったのだという。曽祖父の母親は「常に徳を積む」という気持ちを大切にしていた。税金を納めることも徳を積むことと同様に考え、日頃から、商売だけでなく税金に関する勉強も怠らなかったそうだ。そうした姿勢が先祖代々受け継がれ、これらの表彰につながったのだという。

最初は税金を納めることと徳を積むことが私の中ではなかなかつながらなかった。

そんな時、「情けは人の為ならず」ということわざを思い出した。「善い行いは巡り巡って、自分のもとに返ってくる。」という意味である。「徳を積む」ということをこのことわざで考えてみるといいと思う。もしかしたら曽祖父の母親は「自分が税金を正しく納めることはお客さんや町の人々の役に立って、巡り巡って自分のところに返ってくる。」と考え、それが曽祖父や大叔父の表彰につながったのかもしれない。

仮に税金を私たちが納めなくなったらどうなるだろうか。道路はガタガタになり、町にはごみがあふれかえり、警察や消防も十分に機能しなくなり、治安も悪化するだろう。また、高齢者や貧困層への支援もなくなる。そうなれば外を出歩く人や物を買う人も激減する。結局、お店も商売をできなくなり、私たちの生活にもはね返ってくる。

目先のことだけ考えれば税金は無い方が良いと考える人もいるだろう。しかし、長い目で見れば納税はいつかよりよい形で自分のもとに返ってくる。

一枚の表彰状がそれを私に教えてくれた。

税で支えられるまちづくり

桜川市立桃山中学校３年　　田中　亜実

私の住む桜川市真壁町には、江戸時代から明治時代に建造された建物や道路が数多く残っています。特に五町内と呼ばれる真壁地区は、百四棟の登録文化財を中心に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されており、歴史と伝統のある街並みが広がっています。

みんなの協力で美しく保存されてきた町が四年前に大きく壊れてしまいました。東日本大震災です。近所の商店は瓦が落ちたり、壁が崩れて、見るも無惨な姿になりました。また、造り酒屋さんでは、百メートルもある長い塀の屋根がすべて落ちてしまいました。そして、明治中期に建てられた旅館である私の家も、客間の壁が崩れるなど大きな被害を受け、その時の光景は今でも私の心に深く残っています。

私は、真壁町の街並みはもう二度と元に戻らないと思っていました。なぜなら、昔の建造物を修理するには、多くの人手と多額の費用がかかることを父から聞いていたからです。しかし、真壁の街並みは、現在少しずつ元の姿を取り戻そうとしています。傷んだ建物を建て替えるのではなく、ていねいに修理しているため、時間はかかっていますが、昔と同じ場所に同じ建物が建っています。私の家も元通りに修理されました。このことを祖父や父に聞いてみると、街並みを守るために国から補助金が出たこと、そして、そのお金は税金によって支えられていることを知りました。

これまで私は、公共の建物や道路を作ったり、義務教育を行ったりするために税金が使われていることを知っていました。そして、税金の無駄遣いとか、消費税増税などの話を聞くたびに、税金に対してあまりよい印象を持っていませんでした。しかし、今回のことを通して、困っている人を助けたり、大切な物を保存したりするためにも税金が使われていることを知り、税金の大切さを改めて感じるとともに、もう少し詳しく知りたいと思うようになりました。

国や県、市のホームページを見てみると、本当にたくさんのことに税金が使われていることがわかりました。誰もが必要とする公共のサービスは、ほとんどが税金によって行われていました。私にとって最も身近な消費税については、三パーセントから始まって現在八パーセントになり、将来十パーセントになる可能性があることもわかりました。なぜこのように消費税を上げる必要があるのかを、税金に詳しい親戚のおじさんに聞いてみました。すると、現在の公共のサービスを維持、向上させるためには、国の収入を増やす必要があり、そのための一つの方策であることを教えてもらいました。おじさんの説明を聞いて、私は納得することができました。

税金によって元の姿を取り戻した真壁の街並み。大人になったら、私も税金をきちんと納め、いつまでも守っていきたいと思います。

「ふるさと納税」の意味

足利市立協和中学校３年　　高橋　実沙

「ふるさと納税」という言葉を聞くと、必ず「何がもらえるの？」という言葉がその後に続きます。テレビでもネットでも、もらえるもののお得感が満載です。「ふるさと納税」というのは、自治体に寄附をすると、その自治体の特産品がもらえる、懸賞のようなものだと私も思っていました。

ある時、ニュースで見聞きしたときをきっかけに、軽い気持ちで「自分の住む足利は、何をくれるのだろう。」と周りの大人に尋ねてみました。すると、「分からない」「古印最中とかココワインとかじゃないの」という答えが返ってきました。大人もよく知らないのだと思ったのと同時に、別に知らなくてもいいという程度のものなのだと思ったら、がっかりしてしまいました。大人がつくるものは子供にはよく理解できないものが多い、ふるさと納税も所詮その類だと思いました。でも、自分でもう少しネットを使って調べてみようと思いました。

足利市のふるさと納税のことを紹介したページがありました。そして、驚いたことに「お礼の特産品なし」とありました。「なんだ、足利市って何もお礼の特産品がないんだ」とまたがっかりしました。でも、そのとき、「こんなにニュースになっているのに、なぜないんだろう」と不思議に思いました。そもそも、ふるさと納税とは何のためにあるのだろうとさらに調べてみました。

平成十九年に出された報告書の中に、「ふるさと納税の意義」について書かれた部分があり、その中の一つに「ふるさとの恩に感謝する本来の人間性への回帰への貴重な契機となる」とありました。もし、本当にこのことを目指すなら、懸賞のような要素が強くなってしまうのはよくないことなのではないかと思いました。

さらに、足利市長の言葉も私の思いを確かなものにしました。「自分たちのまちを自分たちの力でよくしたい」「損得を超えた寄附者の方々の気持ちを大切に」「品物で寄附者を募るのではない」という言葉に、私はとても希望を持つことができました。

「私たちの暮らしと税金」というチラシには、税金がとても大切なものであることが書いてありました。でも、今、私は親の保護のもとにあるので、税金というものにあまり実感がわきません。しかし、「ふるさと納税」のように、中学生の私でも納得できる理由があれば、きっと迷うことなく税金を納められると思いました。

税金を納めるために必要なことは、必要性を説くだけではだめだと思います。納めることで何がどうなるのか、その結果がその人の目に見えることが大切だと思います。同時に、私のような中学生にも分かるように、納税の必要性を身近な大人が自らの言動で示してくれることを心から希望します。納税を誇りに思える大人になりたいです。

税を納めるということ

桐生市立新里中学校２年　　山口　愛梨

私は税について考えたことも、学校で詳しく教わったこともない。でも、今回の作文を機に調べてみることにした。

まず、一番に驚いたことは税の種類の多さだ。私が知っているものはほんの数個で、知らないものばかりだった。

地方税というものに注目してみた。地方税とは法人事業税、固定資産税、国民健康保険税、市県民税といった税金があり、その金額は前の年にどれくらい所得があったか、どれくらいの価値の不動産を所有しているかなどによって決まる。その中の固定資産税には、それぞれに納期という納税を納めなくてはいけない期限がある。そこで、その期限までに税金を払わなかったらどうなるのか調べてみた。催告書という手紙を送って納付を促し、最終的には財産の差し押さえをしなければならないそうだ。でも、そうすることで税金をきちんと払っている人と払っていない人が平等になることができ、社会が成り立てているのかなと思った。

税金を払うというのは大変だと思う。だけど、国民一人一人が税金を払うという義務に意識を向けることを私たちは身につけていく必要があると思った。

小学校三年生のときの道徳の授業のことをふと思い出した。アフリカのゼネガルの少年についての授業だった。写真の中で、ゴミの中から鉄くずを探しているやせ細った少年が目に入った。たくさんのお金と変えられる訳でもないのに、毎日毎日ゴミの中から鉄くずを探しているという。

家の手伝い、弟妹の面倒、学校に行けない子供たちが世界にはたくさんいる。病院や薬、きれいな水もない。学校に行けることは幸運なことだと思った。私の普段の生活が、国が変わると全く違ってくる。日本は恵まれた環境だと思った。学校は国が教科書や学費を免除してくれるし、水道からは飲み水が出る。薬や病院もある。きれいで安心して暮らせる町がある。夢が持てる環境がある。とても幸せだと思った。

鉄くずを探し回っている少年の写真が頭をよぎった。彼の夢は何だろうか。学校に通えていたらもっと夢は大きかったのではないか。日本を税金をしっかり払う人が増えたら、私たちの生活は変わる。学校に行き、夢を叶えるために努力できるのも両親や納税者のおかげだとわかった。心から感謝したい。

私の夢は医者になること。将来は、学校にも行けず、病気で苦しんでいる人にも夢を持ってもらえるように手助けしたい。

生まれた場所がたまたまゼネガルだった彼。そして、それが日本だった私。私も彼もこの地球上で生かされている命。同じ人間だ。

私が大人になっても、住みやすい日本であるためにしっかり納税していきたい。日本で生きていることに感謝し、その喜びをかみしめながら生活していきたい。

「税金、本当にありがとう」

ふじみ野市立葦原中学校１年　　三木　萌依乃

「んー、分からない。」
私はエアコンのきいた部屋で宿題に取りかかっていた。最近習った数学の文章問題がどうしても解けない。朝水道で入れた水を飲んでみる。とても美味しい。その時、家の前の道路にマイクで何か言いながら車がやってきた。古物回収の車かと思って気にもとめなかった。するとお母さんがベランダに出て
「えー、ここ断水だったんだ」
と言った。
「良かったね。今、トイレに行ったら水も流れないところだったよ。」
「そうだったんだ。」
そして市役所の人たちはあっという間に直して「工事は終了しました。」と帰っていった。
「あっ」
私は思わず声を出してしまった。さっき家の前にいた車は市役所の人たちの車だったということに気づいたからだ。エアコンをずっとつけていないと倒れてしまいそうなこの暑さの中、市役所の人たちは工事をしに駆けつけてくれたのである。
　私はこの時、税金の大切さを知った。
トイレの水が流れる、道路が整備されているので学校に行ける、学校で勉強する教科書も税金でまかなわれている。家に帰る道に電灯がついているのも税金のおかげである。
　葦原中では夏休み中、学校の校舎の修繕が行われ、私たちは以前より快適に学校生活が送れるようになる。学校で何か不都合が起これば、そこを直してもらえて当然のような気がしていたが、それは税金があるから可能なことで、もし税金というものが存在しなければ、とても不自由な学校生活を送らなければならないのかも知れない。
　税金は大人の世界のこと、私たち中学生にあまり関係のないものだと思っていたが、深く関わっていたのだと感じた。
　税金を直接納めることのできない私たち中学生は、たくさん学び、学力をつけていくことで納税してくれる人へ感謝を伝えられる。そして将来、今度は私たちが働いて次の世代の為に税金を払う。その時は税金を納める一人の大人として胸を張っていられるよう、きちんと納税していきたいと思う。
　「あっ、分かったぞ」
悩んでいた数学の文章問題ももうすぐ正解に辿り着きそうだ。水道水を飲んでみる。税金のありがたさをしみじみと感じる味である。この問題を解くことが、税金に感謝の気持ちを伝える第一歩かも知れない。
　私は税金を生かす為にも、今、自分ができることを精一杯やると共に、税金に支えられていることを忘れないようにしようと強く心に刻んだ。

よりよい暮らしのために

新潟県立津南中等教育学校３年　　仲澤　玲

私たち学生にとって税金はあまり馴染みがなく、税金を払うということを実際に行っているのは商品を買う時の消費税くらいです。去年、消費税が五パーセントから八パーセントになり、以前にも増して税を納めていると実感するようになった人も多いと思います。百円ショップなどでも 105 円で買えていたものが 108 円払わなければいけなくなったということは大変大きな変化です。税金に関心がなく、知識もあまりなかった私にとって増税が何のために必要なのかわかりませんでした。しかし、少し税金というものを調べてみると様々なことを知ることができました。

以前、私があるテレビ番組を見ていたら、様々な国での子育て支援についての紹介がありました。スウェーデンでは出産費用がかからず、二十歳まで医療費無料、小学校から大学まで授業無料など他にも様々な支援制度が税金で賄われていると知りました。たくさんの充実した支援制度がある換わりにスウェーデンは他の国と比べ国民がたくさんの負担をしています。そして日本もいろいろな支援制度などのために税金が使われていると知りました。何のために払っていたのかよくわからなかった私にとって、税金がこんなにも身近なところで使われていたなんてとてもおどろきました。教科書は税金によって支給され私たちに授業を行ってくださる先生たちのお給料も税金で支払われます。もしも税金がなくなってしまったら授業料が高くなってしまい学校に行けない子供がたくさん出てきてしまうかもしれません。そう考えると税金がどれだけ大切なのかわかりました。また、税金は、教育の中だけでなく、他にも様々なところで使われています。

近年、自然災害が多発しています。台風や豪雨、地震などいつ、どこで、なにがあるのかわかりません。そして、そのようなときに助けてくれる自衛隊の活動も税金があるから成り立っています。

税金は、私たちの生活をよりよくするために使われるということを知り、それと同時にみんなから平等に集めるために様々な納税のやり方が行われていると知りました。

今回、税について学習して私は税金の大切さを知ることができました。税金は、私たちが安全で文化的に暮らしていくためにはとても重要です。日本には納税の義務があります。その義務を果たすことで今の私たちの生活は成り立っています。命はお金では買うことができません。しかし、私たちは税を納めることで､安全に暮らすことができます｡商品を買うのに払うお金が増えるのは、私たちにとってあまりいいこととはいえません。しかし、それによって私たちの生活がよりよいものになるなら、それもまたいいのではないかと思います。

幸せのきっかけ

茅野市立長峰中学校３年　　有村　澄音

消しゴムのかすは学校の床へ、手洗の後の水は学校の鏡へ、何気なく傷付けていたいすの傷、この学校にはどれほどの汚れと傷があるのだろう。

この学校は、近年新築されたばかりでとてもきれいな学校だ。しかし、私たちは日常茶飯事学校を汚し、傷付けている。

突然友達が言った。

「この学校ってね、私たちのお母さんお父さんが働いたお金で作られているんだって。」

何気なく友達が呟いた一言、それは私にとって衝撃だった。

お母さんお父さんが働いて稼いだお金は私たち家族のものになり、そのお金で物を買い、物と引換えに払ったお金はその店の方のお給料になると思っていた。

しかし、じゃあどうして学校に両親のお金が使われているのか、とても疑問に思った。

ある日、ふと“税金”という言葉がでてきた。昔から聞き慣れた言葉、ただ、実質的な意味を知らなかった私はこのお金はきっとお偉いさん達のお給料なんだと憶測ながら思っていた。

そんな時にあのニュースがやってきた。

「消費税が５％から８％へ引きあげられます。」その時の両親の表情は苦い表情だった。そこで私は、税金についてひたすら調べあげた。ある資料にはこう書いてあった。

「私たちが使う施設やサービスには多くの費用が必要。それをみなさんから“税金”という形で負担してもらう。」

それを見て、私は税の意味がやっと分かった。私たちは税の元で生きていて税がなければこの世界はあり得ないということに気付いた。つまり、私たちが物を買ったりする時に払う「＋ＴＡＸ」というお金を支払うことで、そのお金がサービスや、施設、などで返ってくるということだ。だから、この学校は、両親が働いて稼いだお金の一部が使われるということになる。それはこの学校に限られたことではなく、全てのサービスに共通しているのだ。

税金がなければ、全ての世界の“物”がなくなる。それはやがて世界を消滅させるであろう。そう思うと、物と一緒に何気なく支払っている「＋ＴＡＸ」イコール税がどれほど生きていく中で、世界にとって大切かが身に染みて分かってくる。

またその税を払うために両親たちは何時間も働き、苦労している。私たちはその税によるサービスを無駄にして良いのだろうか。

やがて私たちも大人になり、もっと本格的に税を払うときがやってくる。その時、きっと税のありがたみを感じるだろう。そして自分もまた、その税で自分自身を、後世を幸せにしていくのだ。

税でつくる私たちの安全

船橋市立船橋中学校３年　　櫻井　美乃

遠くで鳴り響く工事の音を耳にしながら、私は走っていた。部活が終わり塾の時間が迫っていたので焦っていたのだ。すると、なにやら嫌な予感がした。もしかしたら工事中で道が塞がっているかもしれない。そう思った。少し進むと、やはり工事をしていた。アスファルト補装をしているようだったが、当然通行止めになっており、私は回り道をするように言われた。「ああ、もう！どうしてこんな時に。」そう思ったが、仕方なく他の道を通ることにした。

夜、塾から帰った私はテレビをつけて一休みをしていた。すると、世界の危険な通学路に関する番組が始まった。その内容は、毎日命をかけて危険な場所通り、長い時間をかけ、学校に行く小学生に密着取材をしたというものだった。私は目が釘付けになった。あまりにも過酷な通学に驚いたのだ。

コロンビアの熱帯雨林に住む子どもたちは、谷の向こう側にある学校に通うために、長いゴンドラを使用している。足の下を見るとそこには川があり、ゴンドラのコントロールは全て子どもたちの手に委ねられている。驚いたことに、ゴンドラは時速八十キロメートルも出るそうだ。近くに学校がないため、その学校に通うしかないのだ。

そこで、私は思った。コロンビアの子どもたちは毎日命をかけて学校に行く。私はどうだろう。家の周辺には学校や駅、公園が多くあり、公共道路はきれいに整備されている。もちろん、川の上には橋がある。命をかけることなど決してないだろう。それら全て、税金によるものである。私が安全に学校へ行き、何事もなく家に帰ることができる。そんな税金を、私は今まで悪者扱いしていた。どんな商品も、定価より多くお金を払って買うことになるからだ。しかし、今回番組を見て、税金は私たちを守ってくれていると感じた。

世界中には、まだ多くの危険な場所があり、整備されていない所がたくさんある。私たち中学生に今できることは、もっと税金について深く考え、使い道を知ることだと思う。そうすることで、道路や信号、学校の机や椅子、教科書など身近なものが全て税金によって作られていることに気付くことができる。知識不足のため、税金を悪者扱いしたまま社会生活を送ることをしてはいけないと思う。

私があの日見た工事は、みんなが安全に通行するためのものだったのだと気付いた。工事をするためにも税金が必要となる。私たちが払う消費税は、自分たちの安全のために払っているということだ。

私は、今後も日本の税金という制度を持続させ、人々の幸せを維持していってほしいと願う。そして、私も税金も納める消費者の一員であることに誇りを持ちたいと思う。

税金は未来への資金

松戸市立第一中学校３年　　大塚　夕維

「この教科書は、これから未来を担うみなさんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。」

これは私の教科書の裏表紙に書かれている文です。小学校から今までの九年間、私がもらった全ての教科書に書かれています。毎年新しいものに名前を書くたびにちらっと見る程度でそこまで気にしていませんでした。

ですが、最近、私の学校で税金についての講演会が行われ、そこで私は税金が私たちの意外と身近に使われていることを知り、教科書にかかれているこの文を思い出したのです。考えてみると、机や黒板、学校の建設費まで税金が使われています。

税金のおかげで私たちは勉強ができ、学校で楽しく過ごせているのだと改めて強く実感しました。

他にもこんなことがありました。

東日本大震災が起こってから数ヵ月たった頃のことです。私の住んでいる所はホットスポットと呼ばれていました。そのせいで母は家の庭で好きだった家庭菜園をやらなくなりました。そんな時、市役所の広報誌に除染作業のことが掲載され、私の家の庭も作業してもらえることになりました。今では母は嬉しそうな顔をしてたくさんの野菜を作っています。

こうした市の活動の費用も税金でまかなわれていることを知りました。税金のおかげで私たちは豊かで、安心した暮らしを手に入れることができているのだと実感しました。

私はこの二つの体験から、税金は毎日の暮らしを豊かにするものであり、またかげながら日本の人々を支えているのと思いました。言い換えれば、税金は未来を明るく、豊かに創っていくための大切な資金のようなものではないかと私は考えます。税金が無ければ、現在のように誰もが小学校に通学し、無償で教科書が与えられるという制度は存在しなくなるかもしれません。ゴミ収集がなくなって町中にごみがあふれたり、浄水場がなくなって川に下水が流されたりしてしまうようなことが起こってしまうかもしれないのです。だからこそ税金は大切だと思います。税金があるからこその今の日本があるといっても過言ではないと思います。

税金について調べたことで、日本の財政の現状と課題を知ることもできました。税金だけでは国がすべき活動が出来ないため、国債を発行して、集めた公債金（借金）でまかなっていることも分かりました。このままでは将来に大きな負担と不安があります。こうした日本の財政を改善することが課題です。

私たちの健康で豊かな生活を未来へつないでいくために、こうした現状を多くの人が理解することが大切だと思います。そして、税金は社会共通の会費のようなものであるという認識をもち、きちんと納税していくことが一番大切なことだと感じました。

「想い」が届くふるさと納税

狛江市立狛江第二中学校３年　　御代田　英規

学校での地理の授業。その日は、国内の過疎地域についての内容でした。過疎化が進む地域では、観光資源を訴えたり、イベントを行ったりし、地域の活性化を目指しているということを学びました。授業の終盤、黒板に「ふるさと納税」という白い文字が並びました。同時に、僕の頭の中に？が浮かびました。先生はこう教えて下さいました。「ふるさと納税とは、離れたところから市町村に税を納めることができる制度のことです。」

僕は、狛江市で医療や教育をはじめ沢山の住民サービスを受けながら、毎日充実した生活を送っています。しかし、将来、就職などを機に生活の場を移すときが来るかもしれません。そうなった時に、ふるさと納税制度を利用すると、自分を育くんでくれた狛江市へ感謝の気持ちを納税というかたちで表すことができるのです。

総務省のホームページに、ふるさと納税の三つの大きな意義が掲載されていました。第一に、納税者が寄付先を選択する制度であり、選択するからこそ、その使われ方を考えるきっかけとなる制度であること。第二に、生まれ故郷はもちろん、お世話になった地域に、これから応援したい地域へも力になれる制度であること。第三に、自治体が国民に取り組みをアピールすることでふるさと納税を呼びかけ、自治体間の競争が進むこと。三つの大きな意義から、ふるさと納税は、自治体が納税者に応えていく姿勢を見せなければならないので、納税者と自治体、両者でつくっていくものだと感じました。そして、このように地域に活力が生まれることが、安倍政権の目指している「地方創生」に大きくつながると思いました。また、平成二十七年度の税制改正において、地方創生を推進するため、ふるさと納税制度の拡充が行われました。

ふるさと納税について調べていると、ふと地理の先生のあの時の言葉を思い出しました。「見返り品目当てで利用することに対する反対意見もあるんだよ。」ふるさと納税を利用すると、寄付をした自治体から特産物などの見返り品が貰える場合が多々あります。見返り品ではなく、自治体がなぜ寄付金を必要としているかをきちんと判断したうえで、ふるさと納税を利用すべきだと思います。

父の故郷、福島県郡山市のホームページにふるさと納税の使われ方の例として、「震災や原子力災害からの復興のために」と記されていました。四年前、大震災が東北を襲いました。被害に遭ってしまった地域を応援しようと多くの人がふるさと納税を利用し、寄付をしました。その結果、東日本大震災発生二ヶ月の時点で、岩手・宮城・福島だけで前年の全国寄付総額の六倍以上の寄付がなされたそうです。想いが納税というかたちで反映されるふるさと納税で、沢山の地域が活性化し、日本がもっと元気になってほしいです。

「税（ちから）」を「力（ちから）」に

立川市立立川第三中学校３年　　加藤　美柚

一〇〇円（税抜）のパンを買おうとして、レジで一〇八円支払った。当たり前のように支払ったその八円分が消費税だということは知っている。しかし、その八円を何のために支払ったのか、そのお金が何に使われているのか深く考えたことは、これまでなかった。

では、なぜ関心がなかったのか？それは、親から貰ったお金で買い物をして、私自身が税金を直接支払っているという感覚がなかったからだと思う。そして親たち大人が支払った税金は、国を運営していくために使われているのかなと漠然と考えるだけで、私自身に深く関わっていないと思っていたのである。

今回この作文を書くにあたり、調べてみると、私の身近な生活の中にも税金によって支えられている物事が数多くあり、決して私に関係のないことではなかったことがわかった。

健康や生活を守るための医療や福祉など社会保障に充てられていること。生きていくうえで欠かすことのできない飲み水や生活用水を整備するために充てられていること。信号機や横断歩道、道路整備など安全で住みやすい街をつくるために充てられていること。犯罪や災害から私たちの暮らしを守る警察や消防に充てられていること。そして、何より私が今通っている学校の先生のお給料や教科書、備品などにも充てられていることを知った。

個人で何かをすることには必ず限界というものがある。１人では道路を作れない。１人では街を造れない。１人では安全を維持できない。１人では誰かを支えるのに限界がある。１人で出来ないことをお互いが助け合って行えるようにすることを、これが税金の本質だということが分かった。

さらに、こうした税金の種類や負担額、使い方などの仕組みは、選挙で選ばれた国会議員が決めることを知った。つまりこれらは、議員を選んだ国民が決めているということでもある。一人一人が税に対して、社会に対して責任と自覚を持たなければならないということである。

来年からは、十八歳で選挙権が与えられるようになる。税金をどのように使い、社会にどう生かしていくのか、自分自身でよく考え、声にし、形になったものの中から選んで決めていくことが必要となるのである。

そしてあと数年後、早ければ来年にも私たちの世代は、社会へ出ていくことになり、自分で働いたお金で税金を支払うようになる。これは、社会の責任を負うとともに将来への責任を負うことでもあると思う。親たち大人が私たちにしてくれたことを今度は、私たちが担っていかなければならないのである。

税という字は、「ちから」と読むことも出来る。私たちひとりひとりの個の「税（ちから）」を私たちの生きている社会と持続可能な将来への大きな「力（ちから）」に変えていくことがこれからの私たちに求められることだと思う。

科学技術の発展を支える私達の税金

学校法人東洋英和女学院中学部３年　　二宮　萌

私はこの夏休みに日本学術振興会（ＪＳＰＳ）が主催している「ひらめき☆ときめきサイエンス」というプログラムに参加し、岐阜県の神岡にある東京大学宇宙線研究所神岡宇宙素粒子研究施設のスーパーカミオカンデの見学会に参加し、研究者の先生方から世界最先端の研究について話を伺う機会に恵まれました。

そこに参加し「科研費」という言葉を初めて知りました。「科研費」とは正式名称は「科学研究費助成事業」といいます。大学などにいる研究者の自由な発想で取り組まれている研究を、研究費の面からサポートする制度です。毎年約十万件もの応募の中から、実際に研究を行っている研究者が審査し三万件ほどの研究が選ばれます。平成二十七年度の科研費の予算は二千二百七十三億円になり、文学や歴史から自然科学まで全ての分野で研究活動を支えています。

このプログラムの初めに、施設長の中畑雅行先生が

「皆さんの保護者の方々が納めている税金によって科研費は支えられているのです。私達の研究もその科研費のおかげで、スーパーカミオカンデ等の装置で研究や実験を行うことができています。今日は、科研費がどのような研究に使われているのか、また研究者がどのような研究をしているのか、是非たくさん話を聞いて下さい。」

と説明して下さいました。

小柴昌俊先生が一九八七年カミオカンデで史上初めて自然に発生したニュートリノの観測に成功し、二〇〇二年にノーベル物理学賞を受賞しました。今は装置も更に進化し世界最大級のニュートリノ検出器スーパーカミオカンデになりました。同じく神岡の施設ではＸＭＡＳＳ実験も行っており、世界最大の検出器でダークマターの直接検出にも挑んでいます。子供や保護者の方に研究内容を解説して下さいました。

税金と聞くと、道路、上下水道、ダム等の公共事業や公務員給与などをまず思いつきます。しかしその一部は税金をもとにした「科研費」を通じ、研究を支える費用としても使われているのです。研究者の先生が、

「現在ニュートリノの研究では、日本のこの施設が世界最先端の研究をしています。世界中の研究者が神岡にやってきます。」

と話されました。

私の両親が払った税金が、世界最先端の研究を支えているなんて、とても素敵で夢のある話だなと思います。将来この研究施設がまだ解明されていないニュートリノやダークマターの研究を進めて成果を上げ、ノーベル賞を受賞し、その研究の成果が未来の私達の生活を支える科学技術となるかもしれません。税金が未来の科学技術の発展のためにとても役立っていることを知り、私にとってとても良い学びの機会となりました。

納税は「社会を助け合う心」

横浜市立金沢中学校３年　　石川　優花

今年の初め、私の弟は所属しているサッカークラブを通し租税教室に参加することになりました。その日はサッカーの練習が中止となり、租税教室に行くことになったため、弟は重たい表情で出かけて行きました。私も練習を中止してまで税金について学ぶ必要があるのかと疑問を感じていました。午後になり、弟は租税教室から帰宅した。当然、「話が難しく、つまらなかった。」という言葉を期待していた私に、「税金は信号機を設置することにも使われているんだよ。」その第一声に私は驚いた。弟は得意気に話し続けた。「税金で病院を建てたり、治療費も少し負担してくれている。それに、学校で使っている教科書にも税金が使われているんだよ。」税金が自分の身の周りでどのようなことに使われ、役立っているのかを学んできた弟が、この時ばかりは少し大きく見えた。反対に、租税教室に行くことへ疑問を感じた自分が恥ずかしく思え私も税金について調べてみようという思いがわいてきました。

今年も日本各地で地震や大雨による災害が起こり、土砂崩れや家の倒壊など大きな被害がもたらされた。テレビで、その悲惨な映像を見ながら、現地で人命救助や復興活動を続ける自衛隊員などの姿に胸が熱くなりました。反対に、何もできない自分に無力を感じていましたが、税金について調べていくにつれ、私は決して無力ではないと思えるようになったのです。私が納めている消費税や国民が納めている税金が災害の復興事業にも使われ、間接的ではあるが協力できていたのです。どんな形であれ、社会の一員として自分が協力できていることがわかり嬉しく思いました。

国の財政歳出のうち、約六パーセントの六兆円が公共事業関係費にあてられ、道路や下水道、河川の堤防、ダムなど国民の生活の基盤になる環境や施設の整備に使われている。また、災害時じん速な対応ができる救助体制づくりにも使われているのです。税金は、私達の日常生活だけでなく、災害時にも大きく役立っていることがわかりました。

税金を納めることに抵抗を感じる人はいると思う。税金を納めることは「国民の義務」であるが、「義務」という言葉を重く感じる人もいるかもしれない。しかし、税金について学ぶことで、私達は日々、税金により恩恵を受け、これからも恩恵を受けながら生活をしていくことがわかる。納税を義務ととらえるのではなく、「社会を助け合う心」として認識してはどうか。

私は、今回租税教室に参加した弟の言葉をきっかけに、税金に対し興味を持ち、学ぶことができた。どんな事がきっかけでも、税金について学び、考える機会がもてたことは、今後社会人となり、責任を持ち生活を送る中で必要不可欠なことであったと思う。今後、超高齢化社会を支えていく私達だからこそ税金について学び明るい未来を考えていきたい。

「税金」って何色？

向上学園自修館中等教育学校３年　　礒部　ひかり

ガレキもキレイに片付けられた茶色のさら地。夏休みに入りすぐに学校で行った東北ボランティアに初参加した風景は茶色だった。去年も参加している先生が、去年はまたガレキが残っていたと話しをしていたので、少しずつでも復興しているのだと感じられた。復興財源にも「税金」が使われていると思うと「税金」と耳にした時に「税金」は大切で生活していくうえでかかせない事だとわかってはいてもそう深く考えられずにいた今までとは違う思いが少しずつ起きてきた。

そんな夏休みの中盤、終戦記念日の翌日の新聞に、国際宇宙ステーション（ＩＳＳ）に滞在中の油井宇宙飛行士のツイートされた記事が目にとまった。青い地球をみながら宇宙から「平和貢献を続ける」「宇宙開発の分野で色々な国の方々と仕事をして相互理解を深めるという形で貢献したい」とつづられていた。その日の記事には、日本が国際宇宙開発の中で有人ロケットを飛ばせなくても、新型補給船「こうのとり」国産ロケットをＮＡＳＡ側の要求千件以上の安全基準をクリアして今では「不可欠なパートナー」とまで成長したという。その宇宙航空研究開発機構（ＪＡＸＡ）にも税金が関係しているのだと知った。

戦後ゼロからの復興と宇宙から平和を願う油井さんの撮影した地球の美しい青い色をみて私は、東北の茶色のイメージが、戦後の色とも重なり、そして宇宙からのメッセージを受けて美しい青い色へと変わって行く事が出来る様になれるところに「税金」が役立っているという事をうれしく思えた。「税金」について学ぶ私は、宇宙へとつながり宇宙規模で、ＩＳＳ内でお互いの国々で支え協力しあうという関係を知り、この日本では、「税金」という仕組みの一部が東北の復興への支えとなり協力しあう社会であり続けていく事が大切なのだと思う。消費税の値上がりだとか、身近な問題では困る、苦しいなどと報道されるとマイナスなイメージになりがちな「税金」だが、私のように大きな宇宙との関わりを知り、空を見上げて＜ＩＳＳ＞を探しながら、大きな大きな夢の「税金」に想いをはせるのもおもしろいのではないか。

この夏、私にとっての「税金」の色は、はるかかなた宇宙へつながった「夜空の星の色」。ＪＡＸＡが千件以上の安全基準をクリアしたように複雑な仕組みの「税金」も少しずつ理解して、納税する人達が決してマイナスな色ばかりにならないように願う。

「税を納める」ということ

南アルプス市立若草中学校３年　　深沢　有佳

「グローバルファンド。」和文正式名称「世界エイズ・結核・マラリア対策基金。」先日、学校で「自分を大切にすること」という内容でエイズについての講演会が行われた。「エイズという病気」、「感染経路と予防」、「自分を大切にすること＝相手を大切にすること」などの話を聞き、これまでエイズについて何も知らなかった私は、さらに深く知りたいと感じた。そして、調べていく中でまず目についたのがこの「グローバルファンド」という言葉であった。

「グローバルファンド」とは、世界各国の政府や企業などが資金提供をし、エイズや結核、マラリアなどの病気の予防や治療を行う、保険医療に携わる人材育成をする、若者向けにエイズ教育を行う、などの活動をしている資金である。日本もこの組織の活動に賛同し、年間、百億から三百億円投資しているという。これらのお金は、主に発展途上国に送られ、特に「エイズ」が死因第一位のケニアでは、病院での治療代として使われているそうだ。私は日本人として、弱者の立場に立ち、「自分たちにできることを」、と資金援助を行う日本政府を誇りに思った。それと同時に、この多額な資金は、実は私たちが納めている税金から使われているということも知った。「税金が高くて…。」という話を父や母から聞くことがある。しかし私は、この事実を知ってから納めた税金で誰かの命が救えるのなら、それも仕方がないことだと思えるようになった。

これをきっかけに、私たちが納めている税金がどのように使われているのか、興味を持つようになった。身近なところでは、学校で使っている小中学校の教科書の無料配布。今春高校生になった兄は、入学が決まると同時に、書店に出向き、教科書を「買って」きた。教科書を「買う」という感覚がなかった私は、今、無償で教科書を使うことができるありがたみを感じている。また、最近、計画の白紙撤回で話題となった「新国立競技場」の建設費用。当初千三百億円で計画していたが、その後の見直しで二千五百二十億円にまで跳れ上がり、その高額な費用は税金からも支払わなければならないのでは、という話もあがったそうだ。

自分のお金は無駄にしたくない。誰もが思っていることだろう。しかし、自分が納めた税金で、誰かの命を助けることができたり、この社会が人に優しく、より住みやすいものになったりするのであれば、それは決して無駄にはなっていない。「税の中心には、いつも人がいる」ということ。「税を納める」ということは、「人を大切に思う」ということ。そんな思いを強く持ち、これからも私たちが納めた税金が、適切に使用されることを願っている。

支え合いのおかげで

滑川市立早月中学校２年　　矢田部　萌果

税金といってもあまり私にとってなじみ深い物ではない。せいぜいで商品を購入する時に支払う消費税ぐらいだ。ましてやこの消費税も年々高くなり、購入しようと思った物が消費税分足りなくて歯がゆく思うこともある。私にとって税金はあまり良いイメージがなかったのだ。

そんな中、母に私が生まれた時の話を聞き税金に対する考えがガラリと変わった。

私は双子で生まれた。母のお腹の中で私の心音があまり聞こえなくなり、緊急の手術が必要になった。しかし、当初入院していた病院では一五〇〇グラムにも満たない赤ちゃんを産むことができず、母は救急車で別の病院に運ばれ、私は一一一六グラムという超未熟児で誕生した。まだ呼吸も自力でしっかりできない状態で生まれた私は、「ＮＩＣＵ」新生児集中管理治療室という所の保育器の中で、二四時間体制で治療を受けることになった。

保育器の中で口には呼吸器を、大人の指ほどしかない手足にたくさんの管をつけた私を見て、父と母は何度も涙し祈ったそうだ。

私は保育器の中でたくさんの医師や看護師の方達に見守れ、生まれてから三ヵ月後にやっと退院することができた。

私が入っていた保育器はとても高度な医療器具な為、一ヶ月入っているだけでも多額の医療費がかかるそうです。その他にも人工呼吸器やさまざまな投薬。その治療費は、一ヵ月で何百万にもなるそうです。もしこの時にその治療費を全額負担しなければならなかったとしたら、父と母の負担はとても大変なことになっていました。

しかし税という制度のおかげで、私に掛かった治療費は一部の負担で済んだのです。もしこの税という制度がなかったら、私は満足な治療を受けることができず、今こうして家族や友達と過ごすことができていなかったかもしれません。私の命をみんなで支え合うという税の仕組みにより、繋いでいてくれていたのです。

これまで税金は徴収される面でしかみていませんでした。しかしその税金は私とも深く結び付きがあったのです。

他にも税金は私たちが通っている学校で使う教科書や用具、普段通学している道路の整備、私たちの出すゴミの処理、私と母を運んでくれた救急車にも税金が使われているのです。

税金は国民のみんなが一生懸命働き、その中からお金を出し合い、みんなで支え合いながら生きていく為のとても大切な国の宝です。私はまだ納税の義務がありませんが、将来税を納める立場になった時に、その税金が誰かの為に、もしかしたら私のように命を繋ぐ為に使われているのだという誇りを持って納めたいと思います。

税が命を救う

一宮市立尾西第二中学校３年　　森　光紀

あなたは病院を利用したことがあるだろうか。いや、誰もが利用したことがあるだろう。僕たちは、お母さんのお腹の中にいるときから病院にお世話になっている。風邪をひけば病院で診察をしてもらい薬を処方してもらう。けがをすれば病院で処置をしてもらう。僕たちは当たり前のように病院を利用するが、医療費について考えたことがあるだろうか。

僕は中学一年の秋に、潰瘍性大腸炎を患った、内視鏡検査で撮った大腸の写真は、腸壁一面が赤く荒れていた。診察室で医師に入院が必要だと言われた。小さいころからお腹が弱かったが、まさかこんな病気だとは思いもしなかった。今でもあの時と父と母の青ざめた顔はよく覚えている。僕はそんな父と母の顔を見て、これから自分はどうなるのか、また何の不自由なく生活できるのか、と不安になった。その後、薬での治療を続けたが一向に症状がよくならず、中学二年の春に手術が必要だと言われ、夏に三度の手術をした。手術後、順調に症状がよくなり、無事退院をすることになった僕は、あることが心配になった。そう、医療費のことだ。約一年間の入院に三度の手術、さらにこれからも定期的な診察が続いていく。家族はお金のことは僕には言わなかったが、どうしても気になって母に医療費について質問してみた。すると母は「医療費は国から補助が出るから大丈夫。」と言った。それを聞き、僕はとても安心した。それと同時に、「補助金」についてとても興味を持った。

それから僕は、「補助」について考えてみた。すると、「国からの補助は税金だ」ということに気付いた。それまで僕は税について、消費税をとられるというマイナスなイメージしかなかったが、全国の人々が納める税金によって、僕達は高度な治療を受けることができていると知り、税への感謝の気持ちがこみ上げてきた。

しかし、日本中を探すとまだ大勢の人々がお金がなくて治療が受けられなかったり、不治の病で苦しんでいる。だから、医療が発展して、その人々が楽になってほしいと思う。もちろん医療の発展にも、「税」は欠かせないものである。そう考えると急に、自分と税の距離が縮まったような気がした。

近年、消費税増税について国会や日本中で話題となっている。僕が挙げたのはほんの一例だが、日本中で「税」によって救われている人がたくさんいる。そんな人々のために、増税をするならば、僕は増税に賛成である。しかし、お金は使い方によっては、無駄遣いになってしまう。だから政府には、責任をもって使ってほしいと思う。

税とは人を幸せにするものである。あなたがもし、僕のように突然病気や怪我になっても、税金があなたを支えてくれる。僕たちが払う税金は、いつも誰かを幸せにしている。

「税金のありがたさ」

犬山市立東部中学校１年　　小川　理暉

私は、今まで税というものにあまり関心が無く、消費税という言葉くらいしか聞いたことがありませんでした。父に、税金とは、そんなに大事なものなのか？と聞いたところ、学校も税で成り立っているということを知りました。

毎年、年度始めに新しい教科書が配付されます。教科書の裏には「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されます。大切に使いましょう。」と書かれていました。その他にも、教室の机やいす、給食、校舎など、学校生活に必要な物が税金によって補われていることが分かりました。税金によって、毎日の学校生活が楽しく送られているので、私達は、税金を納めている方達に感謝をしなければなりません。

私は、昨年ユネスコのＥＳＤあいち・なごや子供会議に参加しました。その中で、開発途上国の暮らしについて勉強しました。学校に通えない子供が約五千八百万人、読み書きのできない大人が約七億八千百万人もいます。貧困によって、教育が受けられないのです。貧困について学んだとき、ウガンダの給食を食べました。給食のメニューは、白インゲン豆のトマト煮とポショでした。私達が、いつも食べている給食は、栄養士の先生がバランスの良い献立を考えてくれていますが、ウガンダでは、給食が食べられることが幸せです。私達の中では、好き嫌いがあり給食を残す人もいます。ウガンダの人から見れば、贅沢なことであり、大切な税金を使っている以上、食べ残しは許されないことです。毎日学校に行き、教育を受けられることが世界の子供達にとって、当たり前のことになってほしいです。

税金とは、人々が生活するうえで役立つ活動や安全・安心な暮らしを支えるためのものです。最近よく耳にする言葉が少子・高齢化です。高齢者が増えると、税金が使われている医療や年金、介護などに必要なお金が増えていきます。社会保障を充実させ、高齢者が安心して暮らせる社会を作っていかなければいけないと思います。

今まで税金には無関心でしたが、税金によって私達の生活が成り立っていることを自覚し、税金の無駄使いをしないように私はできる事からはじめてみようと思います。教科書の裏にかかれている言葉の意味を、特に私達中学生は理解し、行動にうつしていけたらいいと思います。

「助け合う社会」

東海市立平洲中学校３年　　安藤　貴紀

僕はこの夏、市のボランティア活動に参加して、岩手県釜石市へ行きました。

そこでは、仮設住宅の清掃活動などに参加しました。まだまだ東日本大震災で困っている人が多くいることを知り、ボランティア活動を通じて「助け合う社会」の必要性を感じました。今回のボランティア活動は市が主催したものです。親からは「税金で行くのだから、しっかり活動してきなさい。」とうるさく言われました。「税金だから、しっかり。」と言われたけど税金って何だろうと疑問を持ちました。

「税金は社会を支える会費」という人もいます。また、ある人は「税金は取られるもの」という人もいます。

ボランティア活動に参加して、震災直後に多くの人が義援金を出してくれて、東北の人々を支援したことを知り、助け合いには、多くの「資金」が必要なんだと感じました。

ここでまた、疑問が生じました。

税金も社会のために使われているのに嫌だなぁと感じてしまう。それなのに、義援金だとみんなが自主的にお金を出しています。

この違いが税金を理解する上で重要な点ではないかと思いました。義援金は個人の意志で資金を出すのに対して、税金は法律で決められ、規則に従って資金を出さなければならないものです。僕は物事を決める時、自分の意志で決めた時は気分が良くなり、逆に、親や他人から強制されると嫌な気持ちになります。もしかしたら、税金も法律として強制されているから「嫌だなぁ」と感じるものではないかと思います。

ボランティア活動に参加して「社会に貢献したぞ」と思っていましたが、その活動を支えていたのは、実は、税金なんだと気付いた時、僕は税金の必要性を強く感じました。

税金とは、法律的に決められているから、「嫌だなぁ」と感じるものだけど、社会を支えるための資金として必要不可欠なものなんだと理解しました。

日本は災害の多い国です。いつの日か、またどこかの場所で大きな災害に見舞われる可能性が高いです。この夏、ボランティア活動を通じて感じた「助け合う社会」には、税金が必要不可欠です。

そのためには、みんなが平等に資金を出し合う社会のルールが必要です。法律で決めた税金、みんなが嫌だなぁと思っている税金を平等に出し合う仕組みが、これからの日本の社会に必要と考えます。

僕の生きるこの日本は、みんなが笑顔で、助け合う社会にしていきたいです。

町の税で体験させていただいた事

多賀町立多賀中学校２年　　龍見　幸祐

この夏、多賀町から中学生海外派遣研修でニュージーランドに十日間行き、色々な体験をさせていただいた。初めての海外で、税を体感する事が多々あった。空港には免税店があり、空港税、出入国税、また税関という場所を通り、目に見えないところで色々な税が動いている事に驚いた。

なかでも、ニュージーランドでお土産を買った時、消費税を支払った事と、それが十五パーセントと日本の八パーセントの約二倍と高い事にびっくりした。しかし、便利なことに内税となっており消費税を計算する事なく安心して買い物が出来たので、日本も内税で統一すればまぎらわしい計算をしなくてもいいのにと思った。

スクールバディーのジョンが普段買い物に行くショッピングモールに一緒に行った時、日用品や食糧品は、消費税がかからないと聞いて驚いた。帰ってきてからインターネットでニュージーランドの税はどうなっているのかと調べてみた。すると一般消費税として十五パーセントの「ＧＳＴ（Goods and services Tax)」が商品の代金に含まれていると分かった。食糧品は日本の物価と比較すると二分の一から三分の一程なので、消費税が含まれていても、あまり高く感じることは無いそうだ。ホストファミリーが食糧品にはＧＴＳがかからないと言っていたのと少し違ったが、日本でもそうしてくれたら、お小遣いで買う文房具が少しでも安くなり、僕のお財布にもやさしいのにと、うらやましく思った。

今回ニュージーランド研修に行った費用の約三分の二は、多賀町に出していただき、それは税金から支出されていると知った。それが、どこから来ているか多賀町のホームページで調べてみた。平成二十六年の予算額を見ると、歳出が四十一億円。そのうち「子どもや若い世代が希望を持てる町をめざす」ために使うお金として十六パーセントが教育費に充てられていた。その内〇．〇〇五パーセントの費用でこの研修費がまかなわれていることが分かった。今年でこの事業は二十一回目になるそうで、未来の多賀町を生きる僕たちが、中学生のうちから世界を見せてもらい、将来に希望を持てる取り組みに税金を使わさせてもらえ、とても嬉しいと思う。

学校の授業とは全く違う英語だけの世界に飛び込み、発音が早すぎてびっくりし、最初は全然聞きとれず、さらに、誰も頼る人がいなくて、心細く何とかしなければと必死でコミュニケーションをした経験。そのうちに分からない言葉は簡単な英語にしてジョンから教えてもらえて、通じるようになり、自信がついて帰ってこられた事。こんな、世界を体感できる活動を、町の税金でさせていただけた事に感謝し、また、町にこの経験を生かして次の世代に恩返しが出来たらいいなと感じた海外研修だった。

未来をつくる税金

京都市立加茂川中学校３年　　田中　涼加

八月の初め、今年も海へと出発した。行き先は天の橋立方面だ。我が家では毎年恒例となっている。ところが、今年は海へと向かう道路に変化があった。七月十八日、京都縦貫自動車道、丹波～わち間が開通したのだ。今までなかった高速道路が完成し、海までがぐっと近くなった。正直、海へ行くのは楽しいが、長時間の車での往復は苦痛に感じていたから、みんな大喜びだ。父が、

「この道路は税金で造られてるんやで。それから、これによって大阪からの流通もよくなるだろうな。」

と言った。流通が良くなるという事は、人や物の流れが多くなり、宮津方面の中心産業である漁業の流通もよくなる。また企業が進出しやすくなり、地元の雇用が生まれる。そして仕事も増え、そこからまた納税され…お金がまわり、税金でつくられた道路によってますます発展し、暮らしが豊かになるのだ。その日、海に向かった自動車にも、そして燃料にも税金はかかっている。そういった一つ一つの税金を国民一人一人が納めることにより、国は成り立っている。

「増税反対」とよく耳にするが、税金は本当に悪いものなのだろうか？消費税の増税は確かに家計にとって大打撃になる。一方で、今年の九月からは子供医療費支給制度が中学三年生までが対象となるなど、私たちにもさらに税金をあててもらえる。他にも私たちの当たり前の日常で、税金のお世話になっていることはとても多いだろう。

また、減税もたくさんある。一つにはエコカー減税だ。最近の環境対策の車両には適用される。しかし、対策されていない古い車は反対に税金が高くなる。環境対策に多くの税金が使われているのに環境を悪化させる可能性のある車に対しての増税は理解できる。環境対策されている車（エコカー）に乗り換えることにより、個人は減税され、自動車会社の収入は増え、納税される。

皆の力で国をつくること、守ること…その為に必要なものが税金であり、私達個人の生活を守ってくれているのも税金だ。納税者に支えられて生きていることに感謝すると共に納められた大切な税金は、有意義に使ってほしいと願う。

私たちは将来、就職し社会に出るだろう。そして納税者となり、人々の暮らしを支える一つの力にならなければならない。豊かで安心して暮せる未来の為、改めて税金の重要性を感じた。

世界一幸せな笑顔になる為に

和泉市立光明台中学校３年　　望月　裕貴

「どうして、税金を納めなければならないのでしょう。」

私たちの国では、医療・福祉・公共・災害対策など、私たちが生きていく上でとても重要な役割を税金で担っている。

忘れもしない二〇十一年三月十一日、東日本を襲ったマグニチュード九.〇の大地震は、地震大国日本に住む私たちにとって、防ぐ事の出来ない災害だった。当時、ぼくは四年生だったが、一瞬にして大切な家族や友達・住む家を奪われた東北・東日本の人たちの事を思い、胸を痛めた事を今も強く覚えている。そして震災翌日、少しでも被災者の役に立ちたいと思い、青少年センターで募金をした。

それから五年生になったぼくは、国語の授業で「百年後のふるさとを守る」という伝記に出会った。まさに、三月十一日に起こった震災と重なる内容の、安政元年和歌山県広川町で起きた地震・津波に衝撃を受け、夏休み現地の津波防災センターを訪れた。浜口儀兵衛（のちの梧陵）の功績を知り、現在の日本に「自分の財産や人生を費やし、復興に力を注ぐ人がいるだろうか。」と考えさせられた。

今、地震、そして地球温暖化による大雨の影響で土砂崩れなどの災害に遭った人たちは、自衛隊・消防・医療などに助けられ、税金を財源として復興に向かっている。この税金がなければ、私たちの安全は守る事が出来ない。

そこで、昨年四月国民の反対が多い中、消費税が５％から８％に引き上げられた。ぼくは、東日本大震災・緑や赤い羽根募金の経験から、募金を集める大変さを知っている。だから、消費税を困っている人たちの為に使う事に賛成だ。増税に反対するのではなく、快く税金を納める日本であって欲しい。その為には、国民が信頼して納税出来る様、国は税金を正しく使い、国民に全て公表するべきだ。本当に困っている人の為に役立ち、日本の未来が開けるのなら、国民も納得するだろう。

少子高齢化の今、ぼくが一番税金を投入して欲しいのは児童相談所だ。なぜなら、ぼくが生まれた二〇〇〇年に働く世代 3.6 人で 65 歳以上の高齢者１人を支えていたのに対し、二〇二五年には働く世代 1.2 人で高齢者１人を支えなければならない。なのに、親からの虐待で毎年幼い命が絶たれている。児童相談所の職員を増員し、職員の負担を軽減する事で、要観察家庭への訪問を増やし、大切な幼い命を守って欲しいと考えるからである。

将来、ぼくは小学校の教師になる夢をもっている。公務員になると、大切な税金で給料を貰う。その自覚を持ち、日本の将来を担う大切な子どもたちを育てる手助けがしたい。そして、命の大切さを子どもたちに教え、共感し合える教師になりたい。

次世代の子どもたちが、世界一幸せな笑顔になる為に、私たち国民が心を一つにして税金を納め、大切な税金を明るい日本の未来の為に正しく使える社会にして欲しい。

税のバトン

四條畷市立四條畷中学校３年　　山本　清理那

私は中学三年生です。先日、来年受験する高校を決めるために、ある公立高校の学校説明会に行きました。

説明会では、校舎の紹介や部活動、校風などについて多くの説明がありましたが、その中でも最も印象に強く残っているのはその高校が行っている、グローバルな人材を育てるためのプログラムの紹介です。

その高校は平成二十六年にスーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）に指定されました。ＳＧＨでは、英語のコミュニケーション能力を養成したり、海外に渡って世界と日本の関係を学ぶフィールドワークを行ったりネイティブの講師による大学レベルの講座に参加したりでき、またその他にも、プレゼンテーション技術を身につけたり、国際社会に関する研究をしたりするなど、国際的に活躍する人材となるための本格的な学習環境が整えられていることを知りました。以前から、将来は世界に密接に関わる仕事に就きたいと思っていた私は、夢に大きく近づけるプログラムの数々に目を輝かせていました。

このようなプログラムは私立高校でも行っているところは少なく、ＳＧＨに指定されているからこそ、経験できることなのだそうです。つまり、このプログラムは「税」によって支えられているということです。

税金には、たくさんの使い道があります。その中で約五兆円もの税金が、教育のために使われます。小・中学校の義務教育の教科書も、机も椅子も、部活の練習道具も。当たり前のように、学校で使っている設備のほとんどが税金によって賄われているのです。もちろん、ＳＧＨのプログラムも税金なしでは成り立ちません。税金は将来の日本を背負う私達のためのものでもあるのです。

そう考えると、私は今まで「税」について無関心だったことがとても恥ずかしいことのような気がしました。確かに、私達中学生には、消費税以外に納める税はないのでなじみは少ないだろうと思います。しかし、私達は多くの日本の人々が納める税金の恩恵をこれほど多く受けているのです。税金を、よく分からない八％、大人が払うよく分からないお金を片づけていいはずがありません。義務教育の九年間、義務教育が終わった後も、もしあの高校に入れたら、ＳＧＨという形で支えてもらい、そうでなくても、きっと様々な形で私達の学びを支えてもらうでしょう。

私達が学べるのは「税」のおかげなのです。ですから、私達はそのことを知り、「税」にそしてそれを納める全ての人に感謝をしながら積極的に学んでいかなくてはいけないのだと思います。大人になった時、日本を背負って立ち、税に、納めて下さっていた多くの人に恩返しをするために。次の世代の子供たちの学びを支えていくために。

「税金への恩返し」

尼崎市立小田南中学校３年　　秋吉　香奈

98 万５千円。私はこの金額の大きさに驚きました。これは、税金からの、公立中学校、生徒一人当たりの年間教育負担額です。

私は、中学校の授業料や、新学年毎に配られる新品の教科書代の財源がどこからきているかを今まで考えてみたことがありませんでした。

それが、私一人にこんなにたくさんの税金が使われていることを知り、自分の知識のなさに、はずかしくそして、こんなに多額のお金が税金によって負担されていると考えると申し訳ない気持ちになりました。

もし誰かに、「あなたの考える正しい税金の使い道は何だと思いますか。」と質問されたら私は、「障害を持つ人のために使うべきだと思います。」と、即答するでしょう。

その理由は、私が通っていた小学校のすぐ前に障害者福祉施設があり、登下校時に、突然、頭をたたいてくる人や、急に大声を出す人、車イスで通われている人をよく見かけたことにあります。そして自分よりも背が高くなった我が子の手をひき、小学生だった私に「頭をたたいてごめんなさいね。急に大声を出してびっくりさせてごめんなさいね。」と周囲に気をつかう家族の姿も見てきました。障害を持って生まれてきても、そうでなくても、手厚い支援を受けることで、全ての人が幸せな暮らしができると思うので、障害を持つ人の生活介助をする人、その家族の方の精神面を支えてあげる人の人材育成と人材確保そして障害を持つ人の社会保障におしみなく税金を使うべきだと思うのです。

ですが実際には、平成 27 年度兵庫県の一般会計当初歳出予算をみると、私の思いとは違い教育費の方が、お年寄りや体の不自由な人のために使う民生費よりはるかに多いのです。このことを知った今、私にできることは何かを考えてみると、多額の税金を教育費として使わせてもらっているので、学校の授業を大切にして、しっかりと勉強すること、そして私の将来の夢である小学校の教師になることだと思います。教師になれたら私は子供達に、勉強以外にも、障害を持つ人などのように困っている人にそっと手を差しのべることのできるようなやさしい気持ちも教えたいと思っています。そうすれば、その子供達が大人になった時、自然とみんながお互いに助け合い、支え合うことのできる社会になると思うからです。そのためには、まず、やさしい心を持ち、人のために動ける人に、自分自身がならなくてはいけないのだと思いました。

全ての人が幸せな日々を送れる未来にするために、

「今、自分にできることを精いっぱいにする」

それが税金への恩返しだと、確信しています。

私を支えてくれている税

多可町立八千代中学校３年　　藤井　陽菜子

私の住んでいる所は人口が少ない小さな町です。そこは道が狭く、特に小学生のときは通学路を走る車にとても気を使っていました。

私は一度、こんな話をきいたことがあります。

私が小学生になる前、小学校への通学路を走っていた自動車と通学中の児童のランドセルが引っかかってしまい、小学生が恐怖のあまり泣いてしまったという話です。

狭くて歩道がない道を毎日歩いていた私たち。すぐ近くを通りすぎていく数々の車は手が届きそうな距離を勢いよく走り抜け、とても怖かったです。

しかし、いつもの通学路の工事が始まりました。数週間後には広々とした車道に歩道がつくられ、真新しい標識が立っていました。

その新しい道は私たちに強い安心感を与えてくれました。歩道を歩くことができるので車の近くを通らなくてよくなったからです。

その後も私たちの通学路は続々に姿を変えていきました。歩道がつき、カーブミラーが設置され、「スピード出し過ぎ注意」と書かれた看板もできました。それだけではありません。塗装がはがれかけた横断歩道の白線も白く、濃く目につきやすいものになっていました。

そして歳月がたち、消費税が八パーセントになりました。世の中には増税に対する批判が増えていました。

でも、私の意見は違っていました。物の値段が上がってくるのは自分のお小遣いで物を買うことがある私にとっては少々負担が増えることになります。しかし、小学生のときに道を使いやすくしてくれた国・地元に協力できるのはうれしかったのです。

所得税に住民税、私の家はたくさんの税を納めています。しかし、私自身が国などへ納める税は消費税だけです。だからこそ、消費税の増税は私が社会に協力できることが増えるんだと思いました。

私の今の生活があるのは税金があるおかげです。もし税金がなくなってしまうと学校へも行けません。小学生のころ、あの危険な道を毎日歩き、事故をおこしていたかもしれません。

納税することは国民にとって大きな負担になっているかもしれません。しかし、私たちはそれ以外の公共サービスを受けていると、私は思います。

私は大人になったら納税の義務を必ず果たそうと思います。私たちの通学路を安全なものにしてくださった日本のどこかの方へ恩返しがしたいからです。

税金があり、国民同士で支え合って生活できる幸せな国、日本。私はその国の中で生活する一人です。その自覚をしっかりもって納税の義務を果たしていこうと思います。

私が納めた税金が日本のどこかの誰かの役に立つことを願って……。

税金と公共サービス

生駒市立生駒北中学校３年　　横山　詩乃

「税金はできるだけ少ない方がよい。」

「公共サービスはなるべく多い方がよい。」

このような考え方をする人が日本人には非常に多いと感じます。でも、実際にはこの二つの考えは矛盾しています。なぜなら税金は公共サービスの対価だからです。

例えば私の住んでいたアメリカでは食料品や衣服など生活に必要不可欠な物には消費税がかかりませんでした。「なにそれ、とてもいいことじゃん。」と思うかもしれません。しかし、そのためアメリカと日本では受けられる公共サービスは少し違います。アメリカでは救急車は有料です。一マイルにつき何ドル…と救急車というよりまるで病院へ行くタクシーのようです。最近、救急車を軽々しく呼ぶことが問題となっていますが、そのための費用が皆の払う税金からまかなわれている。それは本当にありがたいことなのです。

私はなぜ日本人は税金の使い道に対する意識が希薄で、税金を少なくすることだけを考えるのか、私なりに考えてみました。税金以外の事柄に関しても、日本人は自国の政治・経済に無関心な人が多いです。私のたどりついた答えは「他国の人は自分の国を自分たちで築きあげたという意識が強いのに対して、日本人にはそれがない。」ということでした。自分たちの国だから、税金の使い方も私たちが監視する。と考えるのに対し、日本人は、税金の使い方？私は政治家じゃないんだから。と考える人が多いのです。

私はこれではあんまりだと思いました。自分の国の税金なんだから、家計をつけるようにもっと自分たちで管理しないといけない。税金を減らしたいのなら、その使い道を知り、無駄がないかを調べること。まずはそれから始めないといけません。そしてまた、税金を納めているおかげで私たちはこんなにも豊かな生活を送れているのだ、と思ってそのことに感謝すべきだと思いました。また、税金がなくなったらできなくなること、困ることについても考えるべきだと感じました。

私は今回この作文を書いて、税金に色々と調べ、考えることができてよかったと思いました。前に書いたように、使い道を知りもしないで税金を少なくしろ、と言うのは日本人として恥ずかしいと思ったからです。これからも税金についてたくさん勉強していきたいです。

税の意味

日高川町立中津中学校３年　　小早川　由華

「税の作文？今年も来たかー」
税のビデオを見るでって言われて思った。今年で三回目になる。一年生にとったら難しいと思う。けど、３回目になる私でも税の作文は何を書けばいいのか分からなくて困る。だから私は難しいことよりも自分の身近にある税について書きたいと思う。

先日、台風十一号が襲い私の住む地域も少し被害を受けた。そこはキャンプ場で川にすごく近い。夏になると他の県からも遊びに来てにぎわいを見せる。でもそこは川にすごく近いため毎回大きな台風がやってくると、沈没して、水がひいてきたら、芝生が全部なくなって悲惨な姿になっている。だけど、次またきたときもこんな姿になってしまうし、何度直しても無理だと私は思っていたけど、悲惨な姿になっても、毎回お金をかけて直している。どうして？お金の無駄やん。って祖母に言うと、祖母は、
「ばあちゃんはな、ここはきれいな日高川がある。あそこがなくなってしまったら、よそから遊びにくる人が少なくなってしまうと思うんよ。田舎やから一つでも観光スポットがなくなったらおもしろくないやろ？」と言った。私は何度も台風がくるたびにやられてしまうこの場所を多大なお金をかけてまで直す必要があるのかと思っていたけど、祖母の話を聴いて確かにそうだなって思った。あのキャンプ場は私たちが住む地域にとってはなくてはならない場所だと今思う。この地域がもっともっといろんな地方から来てくれて楽しんでもらうためには、今あるものを減らしてはならない、減らすのではなく、増やしていかなくてはならないとも思う。中学生の私に何ができるのかは分からないけど、地域に使われている税について考えることがまず私にできる第一歩であると思う。

このキャンプ場のためにお金を出してくれているのは町ではなく、和歌山県であるそうだ。県をあげて直すということは、よほど直す価値があるのだと思う。私は十四年ここに住んでいるけど、まだ一回もそのキャンプ場でキャンプをしたことがない。だからそのキャンプ場でいつかキャンプしたいと思う。

私は祖母の話を聴いて、当たり前だけど私にとって当たり前でなかった、お金を使う意味を学んだ。目に見えた直さないといけないところをポコポコ使うのではなく、ちゃんと理由があって、みんなが幸せに暮らすために使っているのだと知った。税は私たち国民が毎日を幸せにする必要不可欠のものだと思う。

社会を支える税

岡山市立岡北中学校２年　　神垣　百花

念願の家が建った。私はとてもうれしくて喜んでいた。しかし、それと同時に、たくさんの税があることを知り、とても驚いた。

不動産登録免許税、不動産取得税、固定資産税、所得税、印紙税、消費税…。新しい家に住むためにはたくさんの税を払わなければいけない。初めて聞く名前の税もある。今まであまり身近に感じなかった「税」という言葉だが、頻繁に耳にするようになり、気になりはじめたので、調べてみることにした。

調べれば調べるほど、税にはいろいろな種類があることが分かった。よく耳にする消費税やたばこ税はそれらのほんの一部で、全部で約五十種類にもなるそうだ。さまざまな場面で支払われていく税。これらの税はどのように使われていくのか。疑問に思い、調べてみることにした。

すると私は、私たちの生活がたくさんの税で支えられているという事実を知った。私が今、学校で勉強しているときの教科書や机の購入などのための教育費、きれいな街を守るためにゴミを収集し処理するためのゴミ処理費、道路の建設や修理などのための公共事業費、みんなの生活や安全を守るための警察・消防費、高齢者や障がい者などの生活を援助するための社会保険。日常生活の様々な場面で税が使われている。実際に、私も私の妹も父も母も、みんな税の恩恵を受けて生活していることが分かった。税というのは、みんなの生活を支えている源だったのだ。住民の安全を守るために国民一人あたりに使われている税は、年間四万円だという。これらの税のおかげで、私たちは毎日平和で安心してきれいな街で暮らすことができていたのだ。

ニュースでは税の引き上げや無駄遣いについて、度々議論されることもある。私は、税を無駄に使われるのは嫌だ。だけど、今のように、私たちの生活をより良く支えてくれるために使ってもらえるのなら、とてもすばらしい制度だと思う。今回、税は払うだけでなく、こんなに人々の生活の役に立っているということに気づけて、本当によかった。それと同時に、身近に感じられなかった税が、少し身近な存在へと変わった気がする。

私もいつか大人になり、たくさんの税を納めることになる。その時の日本も、今の日本のように税によって私たちの生活が支えられて、安心して暮していける世の中であれば、私は責任と誇りとそれまでの感謝の気持ちを込めて、大切に税を納めていきたい。そして、自分たちだけでなく、子どももお年寄りも病気の人たちも、様々な人たちが安心して生活することのできる社会をつくる小さな力の一端に加わりたい。

税金教育

山口大学教育学部附属光中学校３年　　山本　りおん

夏休み、小学生の妹の宿題に、税金について調べて絵や標語を書くという課題があった。母に頼まれてその宿題を手伝うことになった。私はスマホ片手に税金の先生だ。

まず私達が生活する為に必要なたくさんのお金を皆で出しあって負担している、それが税金である事を妹に伝えた。

では、その税金は、どんなことに使用されているのか、身近なところで学校の話をした。毎日の学習に必要な教科書や、黒板、パソコン、体育で使用するとび箱やマットまでも税金がつかわれている事を知った妹は、とても驚いていた。そして私も知らなかったのだが、毎日何気なく見ている、信号、道路標識、カーブミラーにも税金が使われていた。毎日の登下校も、税金によって守られていたのだ。

私も妹もまだ子供だ。税金がかかるといえば、買物をした時の消費税、銀行預金、郵便貯金利子に所得税がかかるくらいである。それにしても私達は税金の事を知らなすぎるし、あまり身近なものという意識がない。

今回、小さい妹と税金の話をして私は思った。もっと小さいうちから税金について知る機会をもうけるべきではないだろうか。そうすれば、もっと学校の教科書を大切にするだろう。税金に感謝するだろう。少なくとも、大人になって、税金が高すぎる、とか、また税金をとられる、などという発言はなくなるであろう。

税金が私達の生活の中でどう使われているか具体的に知る事で、税金の大切さを身近に感じる事ができるであろう。私のように、中学生になってはじめて知る事も多い税金の力を妹達世代の子供達にしっかりと理解して大人になってほしいと願う。

妹は、今日の税金学習のあと、

「ありがとう、安心安全　通学路。」

という標語を作り、信号、道路標識やカーブミラーのある通学路を元気に登校する絵を仕上げていた。

税に救われた、私の家族

徳島文理中学校２年　　大本　泉

昨年の春から、つい先日までの約一年余り、私の家族は、打ち寄せる波のごとく、不幸が続いた。

祖父は四年に及ぶ肺がんとの闘いに、ピリオドを打った。続いて祖母は、腹部の手術をし、約一か月入院。祖父母のことが落ち着いた頃、今度は父が会社の定期健康診断で病気が見つかり、入院して手術をした。

五人家族のうち、三人までも入院と手術を繰り返し、その世話を母ひとりでしていたがついに母まで持病が悪化して、今年五月、手術をした。

このように、度重なる家族の入院や手術。一家の大黒柱である父が入院した時に、入院費などのお金のことが心配になり、母に

「病院に支払うお金、大丈夫？」

と、そっと聞くと、

「健康保険限度額適用認定証というのがあって、お父さんの給与所得によって区分されて病院で支払う負担限度額というのが、健康保険協会で決めてくれるから大丈夫だよ。」

と母が説明してくれて、私は安心した。

この制度がなければ、医療費は高額なため支払えず、手術も受けれないことになると思った。そのため、助かる命も、助けれない可能性がある。

また、祖父母は“後期高齢者医療制度”という、平成十八年にできた制度で、負担額が一割ですむことも分かった。母が

「これらの制度のお金は、全て税金から賄われているよ。」

と、教えてくれた。

母は退院後、しばらく薬を飲むことになり処方箋を持って、調剤薬局に私も一緒に行った。薬局の壁面には

「ジェネリックで調剤できます」

と書かれたポスターが貼ってあった。薬局の人に聞いてみると、ジェネリックの薬は後発品で、先発品の薬と効能は同じであるけれど薬価が安いため、税金の無駄遣いも防げる、ということだった。母は勿論、ジェネリックの薬を調剤してもらった。

私は今まで“税金”というと、悪いイメージしか持っていなかった。なぜなら、私の一番身近な税は“消費税”で、消費税が上がれば店で支払うお金が増えるので、「損」をしているように思っていた。

私達が生活していく中で、税金は切り離すことはできないけれど、滞納者がたくさんいることは、悲しい現実だと思う。税金が、どのように使われ、私達がその恩恵を受けているか広く周知させることが、大切だと思う。

今回、私の家族はかけがえのない“税金”で救われた。そのご恩返しのためにも、私は将来、一生懸命働き、率先して“税金”を納める社会人になりたいと思う。そうすることが、豊かで明るい未来の日本の礎になるにちがいない。

想いをつなぐ税

八幡浜市立愛宕中学校３年　　池井　瑠花

一学期から夏休みにかけて、日に日に暑さが増していく中、私が通う中学校では、少しずつ教室の荷物を移動させている。第一校舎の耐震工事のための引っ越し作業だ。

最近特に全国的に地震が多発していると感じるが、八幡浜でもついこの間、夜中に震度四の地震があったばかりだ。さらにその数日後、ドンッと何かが家に落下した様な強い衝撃に、夕食中の家族の箸が一斉に止まった。慌ててテレビで確認すると、どうやら家の真下辺りを震源とする地震だったようだ。近い将来、高確率で起こると言われている南海地震が現実味を帯びてきて、一層不安になった。

そんな中での耐震工事ということで、学校で長い時間を過ごす私達にとって、得られる安心感は大きい。調べてみると、ここ数年で全国各地の学校でも耐震工事が行われているようだ。それらの記録の中で、工事にかかる費用にふと目が止まり、思わず何度も桁を確認した。私の想像をはるかに超えていたためだ。驚くと同時に、こんな莫大な費用をいったい誰が負担するのだろうと疑問に思った。

資料を見ると、それが税金でまかなわれていることがわかった。私は今まで、税金が何に使われているのか、あまり考えたことはなかった。しかし思い返してみると、私が小学五年生の時にも、通っていた小学校の耐震改修工事が行われ、体育館も建て替えられた。おかげで私達は真新しい体育館で卒業式を迎えることができた。身近な場所でこんなに多くの税金が使われているのを目の当たりにするのは、まれな機会なのかもしれない。

しかし、考えてみると、税金はもっと日常的に私達の生活を支えてくれている。今まで義務教育として過ごしてきた小・中学校にかかった費用、登下校時の安全を守るためパトロールして下さった警察、病気やけがで病院を受診した際の医療費、ごみの回収・処理など身近な例だけでも挙げればきりがない。私達が安全で快適な毎日を過ごすために、税金はなくてはならないものなのだ。

では、その税金はどこからくるのだろうか。いろいろな種類の税金がある中で、今、主にたくさん税金を払っているのは私達の親の世代だろう。私の家にも年に何度か、父親や母親あてに税金に関する封筒が届く。中身を確認した両親は多少のダメージを受けている様子ではあるが、それでも毎回きちんと税金を納めている姿を見て、大人の義務なのだと認識している。しかし税に支えられている私達がそれを当たり前と思ってはならない。働いて稼ぐ事がどんなに大変か、去年の職場体験を通して学ばせて頂いた。そうやって一生懸命働いて得た収入の中から納められた税金には、より良い社会になるようにという想いが詰まっていると思う。そんな税金を通して支えて下さった方々への感謝の気持ちを忘れず、いつか自分も納税者として社会を支えることで、誇りを持って想いを繋いでいきたい。

コウモリナビゲーター

北九州市立霧丘中学校３年　　定宗　穏花

皆さん、イソップの『卑怯なコウモリ』のお話を思い出して下さい。私達中学生に似ていると思いませんか。自分の都合で子供だと言ってみたり大人だと言ってみたり・・・。

では、小学校の入学式を思い出して下さい。ピカピカのランドセル、服、靴・・・。この日のために揃えてくれた家族に感謝し、空っぽのランドセルに夢と希望を詰め込んだことでしょう。さてその後、ランドセルの中は急に現実化し、真新しい教科書でいっぱいになるわけですが、この教科書の送り主に感謝した人は、どれくらいいるでしょうか。

私は、入学当初の小学生から、税教育を行うことを提言します。そして、その初めの一歩が、税金で賄われている教科書に対して、気づきと感謝の気持ちを捉すことだと思います。言うまでもなく税金は、自分の家族だけでなく、たくさんの人から集められた大切なお金です。それが形となった教科書の重さを受け止め、感謝することは、見知らぬ誰かに支えられている、かけがえのない自分に気づくことにも繋がるのではないでしょうか。ではそこから、どのように税教育を進めていけばいいのでしょう。

「プチ・ディベート」はどうでしょう。ディベートとは、一つのテーマを異なる立場で議論するものです。「ディベート」という大人っぽさと「プチ」という可愛らしさが、小学生にはうけると思うのですが――。

手始めに、税金必要派と不要派に分かれます。子供達から出てくる意見は、大人の想像を超えるものになるでしょう。かつての自分がそうだったように小学生の心は正義感に満ち、とてつもなく美しいものです。大人も学ぶべきことがあるはずです。「プチ・ディベート」の最大のねらいは、どんなことでも視点を変えて考えてみる習慣を身につけることです。物事を深く考え、文句ではなく意見を言うことです。税金否定なら否定でいいのです。実際に税金が無かったら私達の暮らしはどうなるか、他に国の財政を補えるものはあるのかまで、考えることに意味があるのです。

では、私達中学生は何をしたらいいのでしょう。私達は税金に関してある程度の知識はあります。それをもっと掘り下げて勉強し、小学校に「出前先生」として赴いてはどうでしょう。純粋な子供の気持ちと、社会の矛盾に反抗したり受け入れたりする大人になりかけの気持ち。この中途半端さが、小学生と大人を結ぶ架け橋になるのではないでしょうか。きっと小学校の先生や保護者の方のお役に立てると思います。

私達中学生は、時として、自分が『卑怯なコウモリ』になってはいないかと悩みます。しかし、コウモリには変幻自在な賢さがあります。未来を担う小学生が、明るく前向きに税を択えてくれるなら、暗い洞窟の先に見える光まで、私達が道案内を買って出ましょう。コウモリも満更悪くないと思いませんか。

最大多数の最大幸福

福岡市立百道中学校３年　　柚須　愛海

「二〇五〇年には一．二人の働く人が一人のお年寄りを支えなければいけない社会」、「現状で国の財政の約四割は借金」といった、今後日本はどうなるのだろうと心配になるニュースばかりを耳にします。今の社会生活を維持することが難しく、今後次第に住みにくい国に日本がなっていくのではないかと心配です。

私は先天性の病気があり、「小児慢性特定疾患」の認定を受けているため、社会保障制度には特別の関心があります。難病や新しい疾患が増えているという背景から、平成二十七年七月一日時点で「難病」指定されている病気は従来の五十六疾病から三百六疾病に、「小児慢性特定疾病」は従来の五百十四疾病から七百四疾病に拡大されたと聞きました。様々な病気に苦しんでいる患者にとって医療費助成対象拡大は朗報です。しかし、同時にこの制度がいつまで続けられるのか将来が心配です。社会保障制度が崩壊しないような税制の改革を行ってほしいと思います。

書店に行くと、「税金をなるべく納めずにすむ方法」などといった本をよく目にします。また、選挙では「消費税増税反対」と大声で叫んでいる候補者も目にします。私はまだ中学生なので、選挙権もありませんが、今の大人はこの国をいったいどういう国にしたいと思っているのかが分かりません。全て面倒なことは先送りにして、今がよければいいという風潮が一部ではあるのかもしれません。

支出（ムダ）を削るのが、国会議員や国家公務員の仕事であるならば、私たちが出来る仕事は、どういうことに税金を使っているのかという点をチェックして、義務である税金をみんながしっかり納めることだと思います。税金は、単にいくらお金をどこから集めるといった財源の話だけではなく、一人一人の生活に直結する話なので、それぞれの税金の対象についての細かな議論もしっかりしてもらいたいと思います。

国民みんなが納める税金は、お金持ちとそうでない人でその負担度合いが違うべきではないでしょうか。みんなが豊かな生活を送るためには、一人一人の体力に応じた負担を考えてもらいたいと思います。消費税を一率でどのような商品にでもかけるのではなく、生きていくために必要な薬代、食品や衣類に対しては無税とし、贅沢品に対しての税率を上げるといった「最大多数の最大幸福」につながるような税制ができることを望みます。

私は病気に負けない強い身体を作り、将来納税者となって義務を果たせる立派な大人になりたいと思います。

税が担う役割

早稲田佐賀中学校３年　　牛山　悠

夏休みの宿題でマララ・ユスフザイさんのスピーチを覚えた。彼女のスピーチには「何百人もの子どもたちが学校に行っていないことを忘れてはいけません。」という場面がある。なぜ、世界では多くの子どもたちが学校に行けない一方、日本の子どもたちは学校に行けるのか。その差の一つとして税が関係するだろう。マララさんのスピーチの最後にはこういった場面がある。「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペン、それで世界を変えられます。教育こそがただ一つの解決策です。教育を第一に。」日本の子どもは学校に行くことを国から保障され、先生はきちんと収入を得ることができる。そして教科書は無償で私たちに与えられる。マララさんが「第一に。」と語る教育の裏で、税の力が働き、幸せな学校生活を送れている。

また、日本の税の力は教育だけに限らない。通勤、通学で使う道路、いつも飲み水がでる水道や電気､安全を守る警察など挙げはじめればきりが無いほど。私達は生まれてから死ぬまで、生涯、税の力にお世話になりつづけている。

しかし、そんな税でも自らが働いた給料が少し減ると思うとためらいたくなる人もいるとニュースで聞いた。

では、もしこの国なら税が消えたら……。公共機関は止まり、責任をもって自治体を管理する人はいなくなる。道路は劣化し、水道や電気もどうなることか分からない。そんな環境の中で具合が悪くなったとしても、「高額だ。」という理由から病院へ行くのをためらわなければならなくなる。税が無くなれば、そこには働くというより住むことさえ困難な国がある。私たちは生まれてからずっと税で守られ続ける反面、私達の当たり前の生活は「本当は当たり前ではなく幸せな生活」であることを認識しにくい。しかし、日本が安心して生活できる国である一因は税の力であることを忘れてはならない。

私は幸せにも生まれつき、割と体が丈夫な方で順調に大人になれれば元気に働くことができるだろう。そこで私はその幸せな生活に感謝するだけでなく、正当な理由で働けない人も幸せを共有できるよう、ちゃんと税金を納める。決して自分勝手な理由で税にお世話になるだけなって納めないようなことはしない。

税は今日も老若男女、分け隔てなく全ての人へ当たり前という幸せを届けていることに感謝を。

私の地元と税

長崎県立佐世保北中学校１年　　植野　栞里

私は、長崎県平戸市に住んでいます。「平戸市」と「税」で真っ先に思い浮かぶのは、「ふるさと納税」です。平戸市は、平成二十六年度の寄付額が全国の自治体で初めて十億円を超え、日本一となりました。日頃、税のことを考えることはないのですが、毎日のように平戸がテレビで放送されるのを見聞きしているうちに、少しずつ税の仕組みについて興味が出てきました。

先に寄付と書いたように、ふるさと納税は、自治体への寄付金のことで、寄付を行ったときに、住民税の一部が還付、控除される制度です。ふるさと納税のポイントをいくつかまとめると、「特産品がもらえる」、「税金が控除される」、「用途を指定できる」、「生まれ故郷でなくてもよい」などが挙げられます。特に、寄付を行った後の使い道を指定できることは、ふるさと納税以外になく、画期的だといえます。

ふるさと納税は、税の控除だけでなく、寄付額に合わせて地元の特産品や特典がもらえるということで、近年、注目度が高まる一方、自治体による特産品などの返礼競争が過熱しており、本来の趣旨と異なるなどの声も聞かれます。しかし、ふるさと納税は雇用の促進や新たな加工品の創出、販路拡大などの実績も出しており、地域振興策としてのふるさと納税の活用は有効であると感じています。つまり、一年間の寄付金の合計金額を競うのではなく、この制度をきっかけにどのような戦略をたてるのかが重要になってくると思うのです。また、「平戸市」の知名度向上に伴う平戸ファンの増加や、平戸市民としての「誇り」という部分でもよい効果があったと思います。

先に書いたように、ふるさと納税は、その使い道をあらかじめ指定できることが特徴です。平戸市では、人材育成や文化遺産の保存継承、地場産品のブランド化のほか、子育て支援の充実などに活用されており、その使い道も公表しています。

税金は「取られる」という人もいますが、税金は私たちの日常生活をより豊かなものにするために必要な活動の財源になるものです。私たちは生活する中でゴミを出しますが、一人でゴミ処理場を建設するのは無理です。舗装された道路を走りますが自分では建設できません。病気になったら病院に行くし、緊急の場合は救急車を呼ぶかもしれません。一人では生きていけない私たちにとって、税は社会で生活していくために必要不可欠なものです。道路標識や信号機がない世の中なんて不便ですし、医療費やその他公共サービスにかかる経費を全て自己負担するのは大変です。

今後、社会の一員になったときにきちんと納税するのはもちろん、その仕組みや用途についても興味をもち続け、ふるさと納税のような制度も積極的に活用したいと思っています。

税金がつくってくれたこの社会

竹田市立緑ヶ丘中学校３年　　岩川　志音

「百円ショップの品物が百五円から百八円になってしまうのかぁ…。」消費税が八％に上がった時、私は小さな溜息をついてしまいました。「折角貰ったお小遣いが今よりも手元に残らなくなるのか…。」と、すごく残念に感じたことを覚えています。

私は自分のお小遣いを自分で稼ぎます。クラスの友人達は「頂戴！」と親に言えば貰える子が多い様ですが、私は家業の手伝いをして、得られた収入の中からお小遣いとして、ようやく親から貰えます。ですから、私にとってお小遣いは“稼ぐもの”なのです。

私の両親はミニトマト農家です。毎日のように暑いハウスの中でミニトマトのわき芽を取ったり、誘引をしたりして、愛情を持って育てています。そして、たっぷり太陽の光を浴び、赤く染まった実を収穫するのが私の仕事です。私の弟妹達も一緒に頑張って収穫しますが、その後も選果をし、重さを測り、パック詰めまでして、ようやく私の任務は終了です。この作業が終わらない限りは家には帰れません。そんな環境もあり、小学校五年生くらいの頃から、ミニトマトの収穫を手伝うことでお小遣いを手に入れるという、我が家のルールは出来上がったのでした。

さて、ミニトマトは夏しか採っていません。つまり、私は夏にしかお小遣いを稼ぐことが出来ないのです。ですので、私にとってお金は大変貴重なことは勿論、なるべく無駄遣いをしない様に心懸けていました。そんな中、消費税率が従来より三％上がったこと、更に十％まで引き上げになることをニュースで耳にした時には、「もうこれ以上、お小遣い減らさんで！」「税とか無ければいいのに！」と、本当に最近までは税金が嫌で仕方ありませんでした。

そんなある日、学校に税理士の方がお見えになり、私達に税について話をして下さいました。私はその話を聞いて、今までの税に関する見方が大きく変わりました。税は、私達の教科書をはじめ、消防や警察、身の周りの公共施設等、私達の生活部面の至る所にあり、税システムそのものが無くなればどうなってしまうのか？を深く考えさせられる機会となりました。また、一昨年の積雪で我が家のハウスの殆どが雪の重みで倒壊してしまいました。しかし、その再建費用のおよそ九割を税が負担してくれたと聞きました。そのお陰で私は今でもお小遣いを得られるのです。来春に控えた高校進学でも、低所得者向けの為の就学資金援助制度を利用して、希望する学校に通学したいと考えていますが、こうしてみても、ほんの僅かな負担が、その何倍もの幸せとなって、自分に返って来てるのです。税と自分は強く“繋がっている”のです。

今日も私はトマトの収穫をしにハウスへ向かう。お小遣いを握り、百均へと走る。そして代金と一緒に税を払う。昨日までとちょっと違うのは税を払う自分が好きになったこと。

税について今思うこと

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校３年　　麦田　湧規

僕はいつも、税金によって作られた中学校に、税金によって整備された道路を通って登校している。思えば僕達は、多くの税金の中で生活している。学校で使っている教科書の裏表紙には￥０円の文字。いつも安全な水を飲むことができるし、家の近くのゴミ捨て場に捨てたゴミは、気づけばなくなっている。これらは全て税金のおかげだ。

僕は毎日登校中に「増税反対」と大きく書かれたポスターの前を自転車で通っている。普段何気なく見ていたそのポスターだが、最近「税金」について少し考え始めた。

僕が税金の存在を初めて知ったのは、小学校低学年の頃だった。家の近くの百円ショップに行ったのがきっかけだ。百円ショップというと、何でも百円で買えるイメージがあった。幼なかった僕は、三つの商品をレジに出し、財布から三百円を取り出して待っていた。すると、「合計で三一五円になります。」という声が聞こえた。驚いて残りの十五円を払って会計を済ませ、母親に十五円の存在について聞いた。すると母は、「それは消費税といって、品物の値段の五％を納めるんだよ。」と教えてくれた。あれから数年経った今、百円ショップで百五円ではもう買い物ができなくなった。気付けば自動販売機のジュースも値上がりし、消費税は八％となった。

中学三年になり、先日、租税教室があった。テーマは「増税について」だ。僕は消費税増税に反対の立場だったが、その増えた分の税金がどこへ使われているかなど全く知らなかった。話はなぜか少子高齢化の話題で始まった。（テーマがずれている）と思って聞いていたのだが、最後に見事に内容がつながった。つまり、少子高齢化によって、働き手に対して高齢者の数が多くなってきたため、その分を増税で賄っているということだった。二・三十年後の日本をしっかりと支えるための増税であることを知った。（なるほど）と他人事のように聞いていたが、ふと思えば二・三十年後といえば丁度僕達が大人の時ではないか。という事は、この増税は僕達のための増税なのだ。ただ単に「値段が上がるから嫌だ」というレベルではなかったのだ。そう考えると増税のもつ深い意味を理解することができた。

確かに、今の日本は少子高齢化が進んでいる。僕の祖母の時代は、六人兄弟など普通だったそうだ。しかし、そんな光景を僕は見た事がない。その祖母もこの前、救急車で病院に運ばれた。幸い命は助かったが、それにも税金が使われていたと思うと、税金の重さを身にしみて実感した。

今、僕達にできることは、税についての理解をより深めることだ。それが何より重要で必要な事ではないだろうか。租税教室を受け、日本を支える為の増税に僕は賛成だ。この夏、いつもの登校道の「増税反対」というポスターを今までと少し違う目で見る僕がいた。

助け合い精神

宮古島市立平良中学校３年　　與那覇　もも

私は今まで､｢税｣というものについてあまり考えたことがありませんでした。「税」についての講話を聞く機会は、これまでに何度かありましたが、なかなか自分の生活と結びつけることができず､自分から知ろうとはしませんでした。「税」といっても、「消費税が５％から８％に変わり、今後上がるらしい」ということぐらいしか思いつきません。そこで、税のことについて調べてみることにしました。

税金は、私たち学生が、毎日学校へ行き勉強するために使われたり、私たちの生活の支えとなっています。今年開通した伊良部大橋にも、たくさんの税金が使われていることも知りました｡橋ができたおかげで伊良部島にすむ人々は、船の時間を気にせずに、自由に島を行き来することができます。波が高いからといって学校が休校になることもなくなりました。あれほどの大きな橋が無料で通行できるのも「税」のおかげです。沖縄県では、たくさんの米軍基地に伴い、税金が使われているといいます。基地に近い学校では、飛行機の爆音などのため、窓が開けられません。そのため、全教室にエアコンが完備されていると聞き驚きました。こうして考えてみると、「税」は、私たち日本国民一人一人と、確かな、深い関わりがあることにも気づかされました。

私の祖父母は、年金で生活しています。私の両親が年金をもらって生活するようになるころには、私たちが税金を納め、お年寄りを支えなくてはなりません。しかし、少子高齢化が進む現代では、若い人たちの負担が増える、あるいは十分な年金が支払わられないケースも出てきてしまうかもしれません。そうなってしまわないためにも､新しい政策を考えなければならないと思いました。

いっそ「税」という制度がなかったら？いったい私たちの暮らしはどうなるのでしょうか。所得の少ない人たちが教育を受けられなくなったり、病院に行けなくなってしまったりと、社会的弱者が生活しづらい社会、いわゆる格差社会が広がってしまうのではないかと思います。ただでさえ、格差社会が問題になっている日本という国で、だれもが幸せに暮らせる未来を作っていくのは私たちです。今を見つめ、未来を見すえて、身近にある、「税」というしくみについて私たち学生が理解を深め、考えていくことが必要です。

税金とは、助け合いの精神です。誰もが安心して生活していくためには、なくてはならない制度なのです。私たち学生には、このしくみについてよく知らない人も少なくはありません。実際私もそうでした。しかし、自分には関係ないと思わず、すぐ先にある私たちの未来だと考えて、知っていくべきだと思います。これからの日本を担っていくのは、私たち自身なのですから。

ふるさとに元気を

小樽市立菁園中学校２年　　小山　はな

最近テレビや雑誌などで話題を呼ぶふるさと納税だが、その本来の目的を知らない人も多いのではないか。実際、以前の私もその中の一人で、二千円の自己負担で寄付をした自治体の魅力的な特産品が手に入る、とてもお得な制度だと思っていた。だが、ふるさと納税とは自分が応援したい自治体に寄付をすれば、自分が納める住民税などが控除され、さらにお礼としてその自治体の特産品がもらえるシステムである。大都市に集中した税収を地方に寄付をすることで、大都市と地方の税収の格差を軽減させる目的でつくられた。出身地や居住している場所に関係なく好きな自治体に寄付ができることが特徴である。

だが「わが町に寄付してほしい」ということで、自治体同士の競争が過熱している面や魅力的な特産品を用意するためにせっかくの寄付金を特産品に使ってしまう面が問題視されている。また、他自治体に住民の税金が流れて収支がマイナスになってしまったり、納税者はお礼の品ばかりに注目してしまったりと、寄付というより得をして物を得たいように思えてしまう。ものは一過性である。頑張っている自治体を応援する趣旨で始まったのに、いつのまにか豪華な特産品を入手するための手段になってしまっているようにも思える。

しかし、地場産業の品を返礼品にすることで、あまり費用をかけずに宣伝でき、全国の人に知ってもらえる機会ができることは良いことであると思う。そしてそのお礼の品をもう一度買ってみようと思ってもらえれば、その自治体の地場産業の販路拡大につながっていくのではないか。そうなれば地域の活性化になっていくのではないか。また、お礼の品を用意するのではなく自治体の事業そのものに寄付をしてもらうのも良いのではないかと思う。例えば里山の再生や伝統文化の継承など、目的をはっきりさせ、使い道に賛同してもらうことによってその町の特色として長期的に発展・維持させられるのではないか。

魅力的なお礼を用意する自治体、特産品には頼らない自治体等、考え方は様々だが、納税者にとっては様々な選択肢が増えていくことは良いことではないか。

まだ始まったばかりのふるさと納税。とても画期的な制度であり、今以上にもっと良くなる点も多くあると思う。

そして、小さい時に自分を育ててくれた地域、ふるさとに恩返しをするためにも、私は十年後、この制度を大いに活用していきたい。

より多くの人にふるさと納税の本来の姿を知ってもらい、ふるさと納税を利用して大都市も地方も、日本全国が活性化されていくことを強く願う。

豊かな暮らしを送るために

女川町立女川中学校２年　　阿部　航大

東日本大震災から早いもので四年が経ちました。私の通う女川中学校は高台にあり、教室からは女川の町が一望できます。その景色も、四年の間に随分変わりました。震災当時瓦礫でいっぱいだった道路は、一つ残らず無くなり、車が通れるようになりました。また、今年の三月には新しい女川駅が完成し、休日は多くの人が女川を訪れるようになりました。

そんな震災に負けず、立ち直ろうとしている女川をうれしく思う一方で、仮設住宅で暮らす友人のことを考えると、まだまだ復興は始まったばかりだなと感じています。

学校からの帰り道に、仮設住宅が立ち並んでいるいつもの光景があります。ある日私はこの仮設住宅がどうやって建てられたのか気になり、父に聞きました。すると、父は次のように答えました。

「皆がいつも払っている税金で建てられたんだよ。」

私は驚きました。その時の私にとって税は普段買い物をする時に何気なく払っているお金だとしか考えていませんでした。今まで、税がどんなことに使われて、役立っているのか知ろうともしませんでした。税が自分たちのこんなに身近なところで役立っていることを知り、税のありがたさを感じました。

それから私は､税がその他にどのようなことに使われているのか調べました。すると、瓦礫を撤去するための作業費や、震災で壊れた道路の修理も税で成り立っていることがわかりました。この四年間、女川が復興してきた背景に、税の力があったことを知りました。

これらのことを知り、私は、税が何のためにあるのか、その意義をしっかりと考えて生きなければならないと思いました。世の中では、税に対してあまりいいイメージは持っていません。税について流れるニュースは、いつもあまり良い内容は放送されません。しかし、私達は、瓦礫の山だった女川町が、今では豊かな生活を送れる女川町にまでなりました。そのような生活を送れるようになったのも、税のおかげです。そのことを私は、多くの人に知ってもらいたいです。

女川は今、復興の途中です。私が大人になる頃には、今の女川とはまた違った女川になっていることでしょう。女川はこれまでも、そしてこれからも、苦しい生活に負けることなく、復興に向けて、皆で力を合わせていくことでしょう。その時、この「豊かな暮らしを送る源」である税を、私たちは大切にしていかなければならないのだと思います。私の明るい未来のために。

税金の使われ方

筑西市立協和中学校２年　　小菅　太一

「えっ、薬代ただなの。」

皮膚科医院を受診した後、近くの調剤薬局に処方箋を提出した。約一か月分の飲み薬やねり薬を処方してもらい、大きくふくらんだ袋を受け取って立ち上がった母に、僕はびっくりしてたずねた。調剤薬局の局長さんが、「筑西市は市の支給制度があるから、お薬代は支払っていただかなくて結構なんですよ。」と笑って教えてくれた。そういえば、僕が部活などで身体のどこかを痛め、整骨院で治療してもらうときも、たいてい「六百円」だ。

いい制度だと思っていたら、これも税金のおかげなのだということが分かった。僕が住んでいる筑西市では「はぐくみ医療費支給制度」という、市独自の医療費助成制度がある。医療福祉費支給制度（マル福制度）の対象年齢や所得制限によって、医療費の助成を受けられない子供や妊産婦を対象にした制度だ。本来の保険診療で自己負担しなければならない費用を市が支払ってくれている。この制度で、安心して出産できる環境や子育て環境の充実が期待されるそうだ。

僕の叔母は福祉関係の仕事をしているので、こうした制度にとても詳しい。叔母によると、こうした助成制度は自治体によってかなり違うそうだ。市町村に納められた税金を何にどのように使うかは、市町村が決定する部分が大きい。それぞれの市町村の財源の規模や住民のニーズに合わせて、議会が決定する仕組みだ。筑西市は「市民の健康や生活を守る」事業に力を入れているので、市独自の助成制度が充実しているのだという。

逆に考えれば、どこかがけずられているということだろうか。税金を別のことに使って欲しいと考えている人もいるかもしれない。助成制度も、子どもがいない人にとっては、何の得もない制度に感じるのではないだろうか。全員の思いや願いに応える「税金の使い道」というのは難しいのだと思う。だから、「どんな市にしたいか」「どんな未来を築きたいか」といった市民の声を反映した計画を立てて、そこへ向かって少しずつ階段を積み重ねるように税金を使うべきなのではないかと思う。それは、国全体でも同じことだ。

消費税が八％になったとき、僕は「なんでそんなに税金を払わなくちゃいけないんだ」「たくさん税金をとられるなんていやだ」と思った。でも、税金は僕の生活に深く結び付き、僕を助けてくれている。そこを忘れて、「支払う」という視点だけで税金を考えてはいけないと反省した。そして、もう少し、税について関心をもち、知識をもたなくてはいけないとも思う。

将来、僕も納税の義務をおう。僕は、きちんと税金を納め、税金の使い道にもしっかりと関心を持てる大人でありたい。そして、大切な税金を、どんな未来のために、どのように使っていけばいいかを提案できるような大人になりたい。

天国のパイロットと博士が眺める消費税

町田市立町田第一中学校３年　　福惠　瑶

現代において、消費税（付加価値税）を世界で初めて導入したのはフランスで、一九五四年のことだ。しかし、その原型が日本で作られていたことはあまり知られていない。第二次世界大戦後、税制使節団としてアメリカから来日し、日本の戦後税制を構築したカール・Ｓ・シャウプ博士が、一九四九年に日本で提唱した「附加価値税」がその原型だ。

これは、販売やサービス取引により生じる「付加価値」に課税するというもので、基本の考え方は今の消費税と同じ。結局日本では実施されず、その考え方は海を渡っていった。

日本に消費税が導入されたのは、シャウプ博士の提唱から四〇年後の一九八九年。昨年には、導入以来二度目の税率変更が行われた。

税率変更によって増える税収の使い道の中に、「難病対策」がある。難病対策はこれまで予算で賄われる事項だったが、新たな法律が昨年成立したことにより、消費税アップ分の一部が割り当てられることになった。難病の治療のための研究開発はもとより、患者の医療費補助や生活環境の改善にも役立てられるという。初年度に投入されるのは約三百億円。新国立競技場の建設費には遠く及ばないが、患者とその家族には希望の光に違いない。

税率アップの賛否が渦巻いていたころ、難病対策には「小児がん」も含まれることを新聞記事で知った。小児がん―。この言葉を聞くと、思い出す人がいる。父の友人のことだ。

父の友人は、小児白血病という病気だった。小児がんの一種で、今では早期発見によりかなりの割合で助かるようになったが、わずか三十年前にはほぼ助からない、まさに「不治の病」だった。父の友人も長い闘病生活のすえ、治る薬が開発されるという奇跡を願いながら、わずか一八年の生涯を閉じたという。

若い人が事故や病気で亡くなったというニュースに接すると、父はよくその人の話をしてくれた。パイロットになることが夢だったという。病床で彼は、「この世でだめなら天国の空を飛ぶさ」と言っていたそうだ。

日本で難病対策が始まったのは一九七一年。今から四四年前のことだ。この間、難病に倒れていった大勢の人々の中に、父の友人もいる。きっと天国でパイロットをしている彼は、今回のことを遥かな空の上からどう眺めているのだろう。「遅いよ」と憤っているだろうか。「少ないよ」とあきれているだろうか。そうかもしれない。しかし、難病を克服してパイロットになる少年少女がきっと出てくることを、楽しみにしてくれているとも思う。

全ての人が健康で幸福な生活を送れる公平な世の中が来るとすれば、それには公平な税制が不可欠だ。だからこそ、消費税から投入される対策費が、今も難病に苦しむ人々を救う新たな力になることを私は信じたい。

シャウプ博士は、二〇〇〇年に九七歳で亡くなった。彼の税に対する信条は、生涯に渡って、「公平（fair)」だったという。

家族を支える社会保障

富山市立南部中学校３年　　五十嵐　万倫

私の父は二年前に家の階段から落ち、首の骨を折るという大事故に遭いました。その時は家族みんな焦っていて、慌てて救急車をよびました。すぐに救急車が家に到着して、そのまま父は病院に搬送され手術を受けました。手術は無事成功しましたが、頚椎を損傷していたので、医師には車イスでの生活になると宣告されていたそうです。それでも父は入院中のリハビリを頑張って、以前のように元気に歩けるようになりました。

当時のことを考えると、手術代に入院費、点滴、薬代などたくさんのお金が必要になったと思います。また、父が働けない間、私たち家族はどうして普段通りの生活ができていたのか疑問に思い、私は母に家計は苦しくならなかったのかたずねました。母は、社会保障という税金が、父の健康と、私たちの生活を支えてくれたと話していました。私はこの話を聞いたときに、税金は国民一人一人のために使われ、私たちを支える欠かせないものだと知りました。社会保障は「医療」、「年金」、「福祉」、「介護」、「生活保護」など、いろいろな面から私たちの生活を守ってくれています。

日本は国民全員が公的健康保険制度に加入する義務がありますが、アメリカなどの外国は加入義務がなく、保険が高額で国民全員が加入できないというのが現状です。いざというときにお金が払えず、医療がうけられない人々がいます。私は、世界中の人々の助かる命を救い、健康を支える制度を整えるべきだと思います。

また、日本は救急車が無料で利用できます。これもまた税金のおかげです。すぐにかけつけ、私たちを助けています。しかし今救急車の有料化問題がでています。なぜなら、救急車の必要のない人がいたずら目的で救急車を出動させるということが起きているからです。私は救急車は無料のままであってほしいと願います。私の父のときのように、素早く助けどんな人も利用することができるからです。有料になると利用できない人がでてきて、助かる命も助からないことがあると思うからです。だから、本当に必要な人の元へ救急車がすぐに出動できるように、私たちは税のありがたさを知り、しっかり考えて行動できるようになるべきだと思います。

私たちは本当にたくさんの場面で税金に支えられて生活しています。私たちの生活に税金は欠かせない存在です。だからこそ、税金の使い道や大切さを国民一人一人に理解してほしいです。私は、私たち家族を支えてくれたように、税金によって多くの人々が支えられ、安心して生活できるようにするために、税金を納めていきたいと思います。

税は未来への投資だ

藤枝市立青島中学校３年　　堀江　健太郎

「日本列島は災害列島だ。」我々は、よくその言葉を耳にする。東日本大震災や御嶽山の噴火、広島県での土砂崩れの発生は記憶に新しい。僕の住む静岡県では、東海地震や南海トラフ地震が近いうちに高い確率で発生すると考えられている。日本の生活は、まさに自然災害と隣り合わせなのである。そのような中、国や地方自治体では自然災害の被害を減らす「減災」の考え方に基づき、ハザードマップの作成や公共工事が行われている。

僕が小学校中学年の頃、大分県の川沿いに住む祖父母の家の隣に、樹林帯が造られた。祖父母の家と川の堤防との間に、木が植えられたのである。一体なぜ樹林帯が必要なのだろうか。心の中に一つの疑問が浮かんだ。

しかし、その疑問はすぐに解かれることになった。帰省中のある日のこと、僕は祖父と堤防の上を散歩していた。すると、突然祖父がある石碑の前で立ち止まった。

「昔な、ここで土手が切れて多くの方が亡くなったんや。」祖父はおもむろに話を始めた。

祖父がまだ子供だったころ、台風の影響で川が増水し、石碑のところで堤防が決壊。多くの人が溺れて亡くなった。祖父が散歩道として利用している現在の堤防は、洪水後造られたものであり、今回造られた樹林帯は万が一、川の水位が堤防の高さを超えたとき、樹林帯で水の勢いを弱め、被害を軽減させるものだったのである。

これを聞き、僕はとても驚いた。いつも眼下を穏やかに流れている川が大きな被害を出したということが信じられなかったのである。また、それと同時に多くの人々の尊い命を奪う自然災害の恐ろしさを感じた。

さらに僕を驚かせたのが、この計画は数十年単位で動くものであるということだ。川の水を止めるには、大きな木が生えていなければならない。水の勢いを弱めるほど大きな木になるには、長い年月が必要なのだ。数年前納められた税金が、数十年後の住民の暮らしに安全と安心を与えるのである。僕はこのことに感銘を受けずにはいられなかった。

この他にも、防潮堤や津波タワーの建設など、一朝一夕には行えない「防災」「減災」を目指す公共工事が数多くある。その全てが数十年後の国民の暮らしの安全と安心を考えたものだ。税金とは、この国の未来への投資なのだと思う。納めた税は将来、より安全で暮らしやすい国民生活として必ず反映されるのだ。

世界でも指折りの災害大国だと言われる僕たちの国、日本。自然災害から自分の身を守るには、一人一人が災害に対する意識を高めると共に、納税の意識を高めることも重要だろう。僕は大人になったら税を前向きな気持ちで納めていきたい。なぜなら、税金はこの国の未来への「投資」なのだから。

消費税率のこれから

茨木市立養精中学校３年　　安井　智紀

私たちが普段話している「ことば」にはそれぞれ同じような意味でもプラスのイメージやマイナスのイメージにとれることがある。例えば、私が卓球の試合に出場したときに、ある先生から「君は攻めも守りも中途半端だから…」とアドバイスを頂いた。しかし、他の先生からは「君は攻めと守りのバランスが　とれていて…」とお褒めの言葉を頂いた。“中途半端”“バランスがとれている”同じような意味ではあるが、それぞれプラスとマイナスのイメージをもっているだろう。私が最初に税に関して疑問に思ったのは、日本の消費税率は、“中途半端”なのか“バランスがとれている”のかどちらかということである。

まず、消費税率が高い国からみていこう。消費税率が高いことで有名なのは、デンマーク、スウェーデンなどの北欧が挙げられる。消費税率がなんと 20 パーセント以上もあるらしく非常に驚いた。これらの国の特徴はバリバリ働く若者には厳しいが、政府の面倒見がよく、貧しい人、病気の人やお年寄りなどにはやさしいというところだ。

対して、消費税率が低い国といえば、アメリカである。この国には一律の消費税率がなく、州によっては所得税や消費税がゼロというところもあるそうだ。小学生の頃、よく「消費税なんてなくなってしまえ！」と思っていたが、実際アメリカで破産する人の半数が医療費を払えなくなった人だというデータもある。この国の特徴は政府がすることを極力減らし、所得税や法人税を少なくしてお金持ちにやさしくすることで、国民の競争意識を高めているというところだ。しかし、貧しい人、病気の人やお年寄りには厳しいだろう。

ここで、日本の現状を見てみよう。2015 年７月現在、消費税率は８パーセントである。2017 年４月には 10 パーセントに上がる。そのうえ「景気条項」が削除された。これは 2017 年４月がどんな政治情勢であっても消費税率が引き上げられることを意味する。それでは福祉の面ではどうか。今は介護士の減少により、介護付きの老人ホームを建てても介護士が足りないという問題がある。それが原因で老人ホームに入れない高齢者が増えている。とても福祉が充実しているとはいえないだろう。これは消費税率を上げて解決できる問題ではない。このままではいわゆる中途半端な国になりかねない。今の日本では超高齢社会と共に 2005 年を境に人口減少社会へと転換した。それに伴い、若者がどれだけ税を負担しても、それに見合う老後の生活が送れない可能性が大いにある。

バランスがとれている国になるのか、アメリカのようになるのか、北欧のようになるのかが決まるのはそう遠くない未来のはずだ。いよいよ私たちが税と真剣に向き合い今後の日本を変えなければならない時代が来たようだ。

わたしたちの未来

高松市立玉藻中学校３年　　堀場　千裕

昨年の秋から、私の机の前に飾っている写真があります。高松税務署で署長さんの椅子に座って撮ってもらった写真です。職場体験学習で、私は高松税務署を訪問しました。とても貴重な体験でした。税務署で学んだことで、私は税に対する考えが大きく変わりました。今までより具体的なこととして、身近に考えるようになりました。例えば、ニュースでギリシャの問題や相続税の改正などを取りあげているときも、以前より関心を持って見るようになりました。

税を具体的に考えることができるようになったきっかけは、「会費」という言葉です。税務署で「税金はいわば会費のようなもの」と学んだとき、なるほどと感じました。「会費」という言葉からイメージできることはいろいろあります。まずは、会のメンバーである以上、必ず払わなければいけないこと。もし払い忘れたら、会計担当者に迷惑をかけてしまうこと。払った会費がどのように使われているのかを会のメンバー全体が把握しておくということ。会費の使い方に無駄がないかをメンバー全体で考えるということ。このように考えていくと、「会」を「国・自治体」におきかえたときに、私たちにとって「税」とは何かが具体的に見えてくると感じました。

「会費」、つまり「税」がどのように使われているかを知ることは、特に大切なことだと感じました。平成二十七年度一般会計予算（当初予算）では、国の歳出の約三十三パーセントを占めるのが社会保障関係費となっており、これは私たちの健康や生活を守るために使われている税金です。また、県の歳出としては、最も大きな割合である約二十二パーセントを占めるのが教育費となっており、これはまさに今の私たちが学校で使う教科書など、私たちの教育のために使われる税金です。教科書は、その場でお金を出して買わなくても、学校で配ってくれます。私たち子供の視点からは、当然のように受け取り当然のように使っているものです。この教科書一冊一冊にも、大切な税金が使われていることを改めて実感しました。

教科書を手に取って感じることは、私たちが受け取っているこの教科書をはじめ、学校生活を支えてもらっていることに感謝すると同時に、次は未来の子供たちへとつなげていかなければならないという使命です。少子高齢化の日本社会において、将来の私たちの負担は大きくなると学校でも学びました。職場体験をきっかけとして私は国税庁のホームページを見たり、テレビや新聞で税金についてふれているときも以前より関心を持って見るようになりました。私たち子供は、これから未来を支える大人になります。税について今後も関心を持ち、ルールを守り、大切な社会を支える大人になりたいです。

安心をつくる税金

中間市立中間東中学校３年　　村松　万里子

「税金はなぜ必要と思う？」初めての公民の授業のとき、先生はこう言いました。私は今まで「消費税が上がったからもう、たくさんは買えないな。消費税は上がったのにおこづかいは上がらないし。」と軽い気持ちで考えていました。しかし改めてこの質問をされたとき、一つのことを思い出しました。

「目まいがする。」夕方からそう話していた祖母は、深夜になってひどい目まいと頭痛で自分の体を支えることができなくなりました。頭を上げると目まいが強くなり、横になると吐き気がする。そんな祖母の姿に、私はとても心配しました。「救急車を呼ぼう。」と母が通報し、三分程で救急車が到着。ベッドに横たわることを拒む祖母を救急隊員の人は背負って車内に運び、ベッドを少し上げた姿勢で応急処置をしていました。こうして祖母は救急車で病院に搬送されて行くことになります。幸い祖母は検査の結果、三時間の点滴と薬の処方で帰宅することができました。祖母は、「呼んだらすぐに来てくれたので本当にありがたかった。」と話していました。

救急車の出動には人件費、医薬品代等で一回、四から五万円の費用がかかると言われています。しかしその費用のすべてを税金でまかなわれているため、私たちは無料で利用することができます。救急車だけでなく、消防車やパトカーなどもその一つです。私たちが納めている税金で安全、安心な生活が築かれていると思うと税金の必要性を深く感じられます。

しかし最近、救急車の有料化が検討されていることを知りました。救急車をタクシー代わりに利用する人が増加し、年間では相当のお金が無駄に使われていることなどから有料化を検討するというものです。本当に救急車を必要とする人が有料化によって通報をためらい、本来の目的である人命救助ができなくなってしまっては大変です。一方で安易な利用の影響で救急車がすぐに来てくれない事態も困ります。

国税庁のホームページには『税金は私たちが健康で文化的な生活を送るために、その費用を分担し合う会費のようなもの』と記載されています。つまり税金を納めている人には救急や消防といった公共のサービスを受ける権利があるのです。しかし公共のもの＝自分だけのものではありません。社会には同じように生活する人が大勢います。権利があるからどんな使い方をしてもいいというのはどうでしょうか。私たちの税金でまかなわれている公共のものを使う側も、その使い方を考えるべきではないかと思います。

これから大人になる私は、この豊かで安全安心な生活を当たり前と思わず、税金をきちんと納めていこうと思います。また、税金は必要とする人が必要な分だけ使うものという意識を持って行動していくよう心がけたいです。

税と私の暮らし

熊本市立出水中学校１年　　平野　帆南

「ありがとうございました。」
店内に響き渡る声に、一人での買い物に慣れず、緊張する私は少し照れくさい。新学期を前に購入すべき文房具を一人で選び、レジに並んで精算するという一連の行動の背景には、我が家なりのルールがある。

我が家では定額のこづかいがなく、必要な物を両親に相談する。物の種類や個数、値段の他に、必要不可欠な理由重要だ。いわば、私の概算要求は、家族会議で審議される。両親と私の話し合いで支出項目と金額が決定され、そこではじめて執行されるというルールなのである。もちろん、百パーセント回答ではない。その時はやりくりが難しい。しかし最近では自分なりの創意工夫で難局を乗り越えることも楽しみになった。私の限られたおこづかい、つまり予算内で、支払うべき消費税の存在は大きい。しかし私の財布から消費税という形で支払われるお金が、様々な社会保障に役立てられていると思うと、少し誇らしい。

調べてみると、消費税は、国税収入の約四割を占めるという。そして、その多くは社会保障の財源となっている。つまり快適で安全な日々の暮らしそのものは国民が支払う税で賄われているである。

私は十二才となり、中学校へ進学した。この世に生命を受け、母が出産した時の費用も、私が将来にわたり、健康に過ごすための数々の予防注射も、友達と語り、競い、学ぶ学校も税があってこそなのだ。

幼い頃から私は近所の図書館へ通うのが楽しみだった。沢山の本を読み親しんだ。あの感動は忘れない。その図書館も今年補修工事が行われ、新しく生まれ変わった。蔵書も増え、人々が集う場になった。将来、多くの人々の思い出に残る財産となるはずである。

税収で賄われる数々の公共サービスは、人々の快適で安心な生活を願う思いが、繋がり、表されていると思う。税は、そうした思いを社会へ活かす潤滑油のような役割を果たすものではないだろうか。日々の暮らしの側に、税の存在を感じる。

この夏休みの終わりにも、新学期の文房具を準備する。レシートの消費税の欄をしっかり見ようと思う。私が果たした小さな義務が、いつか誰かの役に立つと思うと嬉しい。社会の成り立ちの中で、私はこれからも様々な税と向き合うだろう。よりよい未来の実現のために、一人の社会人として貢献できるように努めたい。そして、社会を担う人々の希望や願いを託した税が、それらの思いを繋げた活かし方であり続けるよう見続けていきたい。

一人一人の幸せのために

宮古島市立下地中学校３年　　花城　夕梨々

社会の時間に「税」について学びました。これまで私は、「税」という言葉を聞いた事はあっても、どういう意味か、どう私たちの生活に関わっているのか知りませんでした。学んでよかったと思いました。

日本には「教育」、「勤労」、「納税」という日本国民の三大義務があります。税金を納めるためには、働かなければならない。働くためには、教育を受けなければならないとの事です。税金を納める事は、私たちが住みやすく、平和で暮らせる事につながっていました。道路や学校、教科書も税金からつくられていたのです。何げなく使っている物や、公共の建物に税金が関わっている事、私たちが平和に暮らせる事に税金はとても大切なんだと納得しました。

夏休み、私は家族と伊良部島へドライブに出かけました。今年の一月までは伊良部島へは船で行く事しか出来ず、あまり伊良部島に渡る事はありませんでした。しかし橋の完成後は度々ドライブで渡れるようになりました。宮古島から伊良部島までの三五四〇ｍはとても快適なドライブです。「海がきれい」と地元住民はもちろん、観光客からも言われます。ビーチの白い砂浜もいいですが、橋の上から眺めるロケーションも最高にいい眺めです。島外からの親せきや知り合いが来島した時のおすすめ観光スポットの伊良部大橋です。宮古島、伊良部島の島民には、ありがたい橋です。また観光客にとっては名所の一つです。こうして渡る事が出来るのも、この橋が出来たからなんだと思ったと同時に、この橋の完成までにどのくらいのお金がかかったのだろうか。その費用はどこから出されてたのだろうか。という疑問が生まれました。父に聞くと「税金でつくられたんだよ。」と教えてくれました。国民が納めている税金がここにも関わっているんだと初めて知りました。橋が出来てから、伊良部島の人々はすぐ病院に行くことが出来、買い物の場も増え、生活が豊かになったと聞きました。生活が豊かになるという事は、多くの人々が幸せになるという事です。伊良部島の人々を初め、私たちにも税金は生活を豊かにするために大きな役割をはたしているのだと感じました。

なぜ納税するのか。それは、一人一人が幸せに暮らすためです。人々が生活しやすいと思うために税金は無くてはならないものです。

私はこれから、しっかり教育を受け、働き、ちゃんと納税できる大人になりたいです。税金について学ぶ事は、将来自分のため、日本のため、全国民の笑顔のためにつながると思います。一人一人が学校で学んだたくさんのことを将来に生かし、そして働き、しっかり納税出来る。それが日本国民がよりよい生活を送る大きな一歩になると私は思います。

税金への私の思い

苫小牧市立植苗中学校３年　　山﨑　伊麻里

税金は、何に使われているのだろうか。

私は以前、テレビで生活保護の不正受給者の映像を見た。その映像の中の中年男性は、『働けない』のではなく、『働かない』という状態で、生活保護を受けていた。生活保護は、私達の税金から支給されているものだ。本来、生活保護とは、健康で文化的な最低限度の生活を保障するとともに、自立を助長することを目的としている。税金は、楽に生活するためのお金ではない。本当に働けない人や、支援してくれる身内がいない人に使われてほしいと私は思う。

また、私達が毎日通っている小中学校にも税金が使われている。ノーベル平和賞を受賞した、マララ・ユサフザイさんのスピーチで「なぜ戦車をつくることは簡単で学校を建てるのは難しいのか」という言葉がある。日本では、国の税金で学校が成り立ち、義務として学校に行くことができている。このことが当たり前となった今、マララさんの言葉を聞いて何を感じるだろう。世界には、戦争のために税金を使い、国民の生活は貧しい国がある。学校に行きたくても、学校がないのだ。日本は、戦車をつくらない。戦争をしない。たくさんの学校がある。豊かな生活ができる。これがどんなに幸せか痛感させられる。

日本の中学生一人に一年間百万円近く税金が使われている。私達は、学校に行けることに感謝しなければならない。

この他にも、公園や図書館、医療費や介護など、身の回りのたくさんのことに税金は使われている。日本は、少子高齢化が進んでいる。高齢者が増えると、税金が使われている医療や年金、介護などに必要なお金が増えていくことになる。しかし、高齢者を支える若い人の数は減っていくので、今のままの税のしくみでは、私達の生活を支えることが難しくなっていく。

こうした中で、私は何ができるだろう。国からの税金で通うことのできる学校で、一生懸命勉強すること。税金の集め方や使い方を考えること。これらのことが、今の私にできることだと思う。そして、大人になったら、誰かの役に立つ仕事をして税金を納めたい。その税金が正しく使われ、次の世代へと受け継がれていき、平和な世の中になっていってほしい。

税について考えた夏

東根市立大富中学校３年　　寒河江　志織

今年の夏は、母も祖母もいない夏だった。母は脳動脈の手術を控え、祖母は二度手術した股関節が再び炎症を起こし、入院している。「おばあちゃんの入院も長引きそうだし、お母さんの難しい手術もあるし、お金がかかるね。」入院する前日、ふと私が口にすると、母が医療費の援助について教えてくれた。手術費はもちろん、検査だけでも随分お金がかかる。しかし、県から交付された保険証があるため、医療費は三割しか負担しなくていよいという。さらに、一定の限度額を超した場合、それ以上の負担を免除する限度額適用認定証を交付してもらっていた。現役で働き、収入のある母でさえ、医療費を県に負担してもらっていることを聞いて、私は驚いた。今年七十七歳になる祖母は後期高齢者の対象となり、一割負担で済む。その上、中学生の私の医療費は昨年から市で全額を負担してもらっている。「おかげで、家族みんなが安心して治療に専念できるね。」母は笑ってそう言った。

母が働いて納めていた税金がこれほど身近な所で還元されていたことに、私は感動を覚えた。他にはどのようなところに使われているのだろう。詳しく知りたくなって調べてみると、税の多様な使い道が見えてきた。

母や祖母が医療費の援助という形で受けていたのは「社会保障関係費」の一部で賄われた公共サービスだ。これは、国の歳出予算のおよそ三分の一もの額を占めている。民間企業では実現しにくい大規模な設備や医師がそろった病院を県が社会資本として設けることができる。また、祖母が退院したら参加したいと楽しみにしている高齢者向けサロンの運営も市の税金が賄っているものだった。

現在私の家の近くで高速道路が建設されているのは「公共事業関係費」、毎日学校へ行って、国から無償で支給された教科書で多くのことを学ぶことができるのは「文教及び科学振興費」のおかげだ。また、歳出予算のわずか一・三パーセントではあるが、「経済協力費」という名で使われている税もある。世界の発展途上国の経済援助のために使われている税だ。税の仕組みが成り立っていない国では、学校に行けないどころか、生活もままならない。日本の税による援助で、明日も生きていけるという安心や教育による夢を与えることができるなら、それは素晴らしいことだ。

税は、私たちの生活を身近なところで支えている。税があることで、安心して毎日を生き、豊かな生活を営むことができる。その対象は、母のような働く世代、祖母のような高齢者、そして私も含むこれからの未来を担っていく子供、全ての人々である。日本にこのような税の仕組みがあることを私は誇らしく思えた。あと数年すれば、私も一人の社会人として税を納めることになる。その時は、税が私たちの暮らしを豊かにし、支えてくれていることを心に留め、責任を持って税を納めていきたい。

車椅子の弟と八十一才の祖母

行田市立行田中学校１年　　江森　直輝

ぼくの弟は、今年の二月、突然、車椅子で生活することになりました。今まで元気に走り回って、生意気なことばかりしていたので、最初は、全然、信じられませんでした。

幸い、図書館やスーパー、映画館など、今まで弟と行っていた近くの施設は、車椅子の駐車場や、通路が完備されていて、不自由を感じることなく、一緒に外出することができました。弟の好きな「かっぱ寿司」も、エレベーターがあり、みんなで行くことができました。

ただ、一番困ったのは、学校のトイレと、家や学校から出た時のぼくたちが歩いていた道路です。当時、ぼくは六年、弟は一年生でぼくの通っていた東小は、体育館にしか車椅子用のトイレがなかったため、校舎から一度外に出て、トイレに行かなくてはなりません。ラッキーなことに、東小学校には、給食を運ぶ大きなエレベーターがあり利用できたこと、あきらめていた車椅子の補助をお願いできる先生もきていただけることになり、小学校生活最後の二ヶ月間を、弟と一緒にすごすことができました。もし、この二つの条件が、かなわなかったら、弟は病院に入院したまま、岩槻の小学校で、別々に生活することになっていました。なので、本当に嬉しかったです。

「歩いていた道路を通って一緒に帰りたい。」

と弟が言った時は、ぼくも、

「卒業までわずかだし一緒に帰りたいなあ。」

と思いましたが、道路にはとてもたくさんの段差やでこぼこがあり、歩道がない道の方が多く、車椅子で通るのは、とても難しいと感じました。

ぼくの祖母は八十一才ですが、毎年、ぼくが、熊本に帰って、電車で、九州のいろいろなところを案内するのを、楽しみにしてくれています。今年、世界遺産になった炭坑を一緒にまわっている途中の駅で、エレベーターもどこにもなく、急な階段があり、祖母はだいぶ目が悪くなっていたので、下りの階段で段差がわかりやすいよう、転ばないよう、ぼくが前に立って歩きました。暑いのでペットボトルのお茶を飲もうとすると、祖母は、

「指の力が弱くなってふたがあけられない。」

と言いました。小さい頃は、ぼくが転ばないよう、ぼくの手をしっかり握ってくれていた祖母の手です。この時、年をとると、今まで普通にできていたことが、どんどんできなくなってしまうのだと、気づきました。

税金のことを学び、街づくりや学校、道路、ぼくが体験したこれらのすべてのことに、税金が使われていることを知りました。

弟のように、ある日突然、自分が、体の不自由な人になってしまうかもしれません。十年後の高齢者の割合は、全人口の二十六％。四人に一人が、ぼくの祖母だと思うと、もっともっと、お年寄や体の不自由な人の暮らしやすい未来のために、税金が使われてくれたらと、この夏、ぼくは、心から思いました。

税への感謝を忘れずに

南アルプス市立白根巨摩中学校３年　　石原　裕貴

「税金って何ですか。」と聞かれたとき、あなたは何と答えますか。僕はこう聞かれても全く答えられない状態でした。昨年に、消費税率が八パーセントに引上げられたときも、「えー。」と少し嫌な気分になってしまいました。「税金が無くなってほしい。」そう思いもしました。しかし、今では違います。

そもそも税金とは、身近な消費税の他にも、所得税や住民税、さらには酒税といってお酒にも税金がけけられています。そのように、多くのものから集められた税金は、国の歳入となります。その国の歳入を歳出として、年度ごとに使っていくことになります。今年度、その歳出で最も多いものは社会保障関係費です。社会保障とは、僕達が安心して生活していくために必要な、医療・年金・福祉などといった公的サービスのことを言います。僕は先日、知らないうちに、この社会保障の恩恵を受けていました。

僕は部活動でフィールドホッケーをしています。固いボールやスティックを使いプレーするので、少し危険かもしれないスポーツです。先日、学校でいつも通り一生懸命に朝練習をしていたとき、仲間のスティックが顔に当たり、顔から血がたくさん流れ出しました。止血後、先生に救急車を呼んでいただき、搬送された病院で手当を受け、その日のうちに学校に戻ることができました。救急車は緊急時に無料で利用できるものです。僕はその後、この救急車も社会保障関係費によって賄われているのだと知りました。

今まで税金に対してマイナスのイメージしかなかった僕は、この体験を通じて税金の大切さというものを肌で感じました。いつも納めていた税金は、何かがあったときに助けてくれる素晴らしい仕組みなのだということを思い知りました。それと同時に、このような分野で支えてくれる税金に僕達にできることは何なのだろうかと思いました。

僕は、税金を一人一人がしっかりと納めることが僕達にできることだと考えます。ここで大切なことは「一人一人が」ということです。誰か一人でも脱税をしてしまうと、納税の公平性が欠けてしまうばかりか、支援されるべき人の支援ができなくなってしまうかもしれません。日本国憲法第三十条には、国民は、法律の定めるところにより、納税の義務を負うと定められています。また、現在では、少子高齢化で増加した社会保障関係費に対応するため、社会保障と税の一体改革が進められています。社会保障の充実・安定を図り、消費税率がさらに引上げられます。社会保障などの国民の生活を支えるためのものに使われていくならば、僕もそれを信じて納税の義務を全うします。いつも僕達の生活を支え、充実させてくれる税に感謝するという心を一生忘れずにしたいです。そして、その心を将来の世代にも伝え、税金が暮らしを支える社会をつないでいきたいと思います。

税金のありがたさ

富山市立速星中学校３年　　伊藤　勇生

僕は税金に助けられてきました。小さい頃は税金について理解できなくて「どうして何も買っていないのにお金を払うんだろう？」と不思議に思っていました。しかし、大きくなるにつれて、母から話を聞き、税金について知り、ありがたみを感じるようになりました。僕が税金に助けられていると特に感じるのは、片親家庭等の医療費助成制度です。

僕の父と母は僕が小学生の時に離婚し、それから母は、わがままばかりで手のかかる僕と兄を女手一つで育ててくれました。片親家庭等の医療費助成制度とは、母子家庭等に対しその医療を受けるのに必要な費用の一部を助成することにより、母子家庭等の福祉の増進に寄与することを目的とするものとあります。僕は小学五年生の時にサッカーの練習で足を怪我してしまい、病院に通ってばかりでした。小学六年生になった僕は母に言いました。「お母さん、いつも病院に連れていってくれてありがとう。お金たくさんかかるのにごめんね。」すると母は言いました。「ううん、あなたがお医者さんに診てもらうのにはお金がかからないのよ、だから大丈夫。」僕はその時は何故お金がかからないのか分かりませんでしたが、中学生になり、何故お金がかからないのか調べると、県民の皆さんが納めている税金で母子家庭の、僕たちのような立場の人間が助けられているということを知りました。この制度があったから、僕が足を怪我して病院に行かなければならない時もすぐに病院に行くことが出来たのです。母子家庭では医療費も何もかもが家計に大きな打撃を与えます。もし、この制度がなかったとしたらどうでしょうか。母はきっと足を怪我した僕を迷うことなく病院に連れて行ったでしょう。しかし、その後当然請求される医療費に首が回らなくなり、僕たちは一般の人々が送る生活を送ることが出来なくなっていたかもしれません。節約などは進んでしていますが、僕も兄もスポーツをやっているので生活は苦しいです。それでも、県民の皆さんが、国民の皆さんが助け合って生きている、そう考えると頑張らなくては、と思うのです。税金とは「幸福」を買うものだと今の僕は考えます。

僕は現在中学三年生で、来年からは高校生そしていずれ社会人になります。社会人になったら、助けられるだけの立場から助け合うことのできる立場に立つことが出来ます。僕は今まで顔も名前も知らない人たちに助けられてきました。今度は僕が手を差し伸べ、助ける番がきます。自分が、家族が、健康で安心な暮らしを送ってこれたこと、これからも生きてゆけること。日々忘れることなく感謝の気持ちを持ち続け、毎日をただ過ごすだけでなく、意味のあるものにしていきたいなと思います。人のため、自分のために働き、社会に恩返しが出来るような立派な大人になれるよう一歩一歩踏みしめながら生きることを努めていきたいと思います。

税金と関わって

関市立旭ヶ丘中学校３年　　兼松　宜弘

僕は今年、アメリカに行きます。僕にとって初めての渡航になり、発展したアメリカを自分の目で見ることができるので、とても楽しみです。しかし、家族旅行として行くのではありません。「学校教育夢プラン」の「中学生海外研修」に参加して行きます。

僕が住んでいる関市では、「学校教育夢プラン」が行われています。これは、将来の関市を担う僕達を育むための企画です。「中学生海外研修」の他にも「中学生スピーチコンテスト」などが実施されています。

「中学生海外研修」は、普通の旅行では見学できない企業を訪問することができます。また、ホームステイもできるので、自分の英語力やコミュニケーション力を高めることができます。僕はこれらが、将来に役立つ、とても貴重な経験になると思っています。

しかし、この研修の参加徴収金は、海外旅行にかかるお金の一割程度しかありません。僕は、この研修に応募したときからずっと不思議でした。なぜ、これだけのお金でアメリカに行けるのかな？足りないお金は誰が払っているのだろう？といった感じです。その疑問は教育委員会の方の話を聞いて解けました。税金が使われているということです。「僕は、関市民全員のお金を使ってアメリカに行く」このことを知ったとき、「市の代表」という強い責任感を覚えました。

僕は今、十回行われる事前研修に参加しています。そして、英会話研修などを、共にアメリカに行く七人の仲間と行っています。アメリカで通用する英語を身につけるとともに、アメリカの文化を学ぶためです。家では、アメリカについての調べ学習をしています。関市民全員の思いを背負っているので、生半可な気持ちではアメリカに行けません。少しでも多くのことを体験し学ぶことが、この研修に参加させてくれた家族を始めとする関市民全員への恩返しになると思います。だから、よりはりきって事前研修を行い、アメリカでの研修に備えています。

「中学生海外研修」に税金が使われていることを知って、「中学生海外研修」は関市民全員のおかげで成り立っていて、みんなの思いが詰まっているんだなということを感じました。僕は今まで、税金についてよく知らず、あまり深く考えたこともありませんでした。しかし、周りを見ると学校も病院も図書館も警察もみんな、税金が使われていることに気づきました。税金は「払っている」「使っている」といった感覚は少ないけれど、知らず知らずのうちに関わっています。税金が欠かせない生活になった今、しっかりと税金のありがたみを感じることが大切だと思いました。僕もこれから大人になるにつれて、様々な税金を払うようになると思うけれど、「このお金はきっと、たくさんの人の役に立つだろう。」と、関市のため、日本のみんなのために気持ちよく払っていきたいです。

税があるから笑顔が咲く

朝来私立生野中学校３年　　細川　恵理菜

久しぶりのお出かけに、祖母は顔をほころばせた。祖母は重い病気と共に生きている。もう歩くことさえできないのだ。そのため、祖母はいつも、病院で独りぼっちなのだ。そんな祖母を気づかって、娘である母が、祖母と外に出かけることを計画した。病院からの許可を得て、祖母はあの日、やっと外の空気をすったのだった。

学校の先生から渡されたパンフレットには税について書かれていた。税、と聞いて私が真っ先に思い浮かべるのは、消費税である。買い物をするときにいつもついてくる税だから、私にとって身近だと感じる。しかし、消費税以外については、全くといっていいほど知らなかった。住民税や、所得税など、耳にはするけれど、自分とは関わりのないものだと思っていたからだ。

パンフレットのページを、パラパラとめくると、目についたのは老人の乗る車椅子と、それを押す女性のイラストだった。そのときふと、あのときの祖母の笑顔を思い出した。

あのとき、というのは、久しぶりに外に出た祖母の車椅子を、私が押して歩いたときのことである。祖母は花が大好きだ。だから、近くの公園に来ていた。祖母は、公園の脇に咲くパンジーの花を見て、

「きれいやな。」

と言って笑った。もう、すっかり祖母の足となった車椅子を押す私と祖母の距離は、思っていた以上に近かった。こんなに近くで祖母の顔を見たのは、いつぶりだっただろうか。心からの、美しい笑顔だった。そのときのことは、私の記憶に深く残っている。

どうやら、私とは関わりのない、と思っていた税は、こんなに身近に存在していたようだ。私と祖母との距離を近づけた車椅子も、祖母と花を見た公園も、そして祖母がいつもいる病院も、すべては税金あってのものだったのだ。私は知らなかった。関係のないものだ、と割り切っていた税は、私たちのためにあった。確かに、私たちの役に立っていたのだった。

私はこのことから、もっと税について知りたいと思った。私にも、一人の国民として、色々な税を納めなければならない時が来る。ならばその時までに、しっかり勉強しておきたい。そして、私がそうしてもらったように、私が税を納めることで、誰かの役に立てればいいな、と思う。一人一人が納める税金は、きっといつか、どこかで誰かのために使われるのだから。

税には、とても感謝しなければならない。私たちの生活を支えてくれること、それから祖母に笑顔をくれたこと。

安心・安全に暮らすために

広島大学附属三原中学校３年　　平野　由莉

昨年末、今年の漢字に「税」が選ばれた。十七年ぶりの増税も選考理由の一つでしょう。

私が、一番身近に感じる税は消費税です。

増税とともに、買い物の支払い時には、商品自体が、値上がりしたような錯覚に陥り、さらに、お小遣いも早く減るようで嫌でした。

しかし、税について調べてみると、医療、教育、福祉、介護など、私たちの生活は税金によって守られていることが分かりました。

安心・安全に暮らすためには、なくてはならないものです。

今、日本では、少子高齢化が問題になっています。高齢化の進んだ日本が、社会保障と税の一体改革で、財政や仕組みを充実できるのなら、消費税アップも将来の私たちの生活のために必要なことだと思えてきました。

なぜなら、消費税アップの増収分を社会保障に充てることで、働き手の負担を軽減させ、どの世代にも安定した支援ができるからです。

支援といえば、ふるさと納税の寄付に関する、ある新聞記事に私の心は動きました。

広島県の神石高原町では、捨て犬の保護を行い、犬の殺処分ゼロの目標を掲げた団体に、全国からの寄付が急増したのです。

私は、この記事を読んだ時、「命がこぼれおちる前に」という一冊の本を思い浮かべました。この本には、人間の身勝手で捨てられた犬や猫の結末が、どんなに痛ましいかということが書かれています。

生活に喜びを与えてくれる動物を家族同然にかわいがっておられる人たちがいます。

その一方で、動物を飼い出したものの、途中で世話をすることが面倒になり、無責任に捨ててしまう人もいます。

捨てられた犬が、最後に辿るのは、処分機による殺処分。

ふるさと納税で、応援したい自治体に寄付をする制度は、自分が何に関心を持ち、大切なのか考えられることや、自分のお金がどのように役立てたのか分かるところが魅力です。

昨夏、広島では、集中豪雨で土砂災害などの大きな被害がありました。

その時、ここで訓練を受けた犬が、救助犬として活躍し、行方不明者を発見しました。

この立派な犬は、県の動物愛護センターで殺処分される寸前の犬でした。

ギリギリのところで保護されたのです。

今年は、救助犬として国を越え、ネパールにも派遣され懸命に働いています。

命がこぼれおちる前に、救われた尊い命。

私は、ふるさと納税の寄付によって、かけがえのない命が救われ、その命から、私たちも助けられていることを知りました。

そして今回、税について学ぶことで、日本のように、治安が良い国で、便利に生活できているのも税金のおかげだと理解できました。

このような日々の暮らしに感謝しながら、少しでも社会貢献できるよう、将来、自分に何ができるだろう？と考えていきたいです。

「支えられる」から「支える」へ

宇多津町立宇多津中学校３年　　秋山　佳奈

私は吹奏楽部に所属していました。その吹奏楽部に去年「ハープ」が届きました。ハープの美しい音色が加わることにより、演奏が一段と深みのある良いものになりました。そのおかげが今年もコンクールで金賞をもらうことができました。

ハープは高価なものです。母が「税金で購入したものだよ。」と教えてくれるまで、そこに税金が使われていることを私は知りませんでした。顧問がいつも「地域の人々に支えられて演奏ができている。感謝しよう。」と言っていた意味がようやく分かりました。私達の演奏は地域の人々が納めてくれた税金によって支えられていたのです。

吹奏楽以外の学校生活でも多くの部分で税金によって支えられています。机やいす等の学校の備品、最近では全ての教室につけてもらったエアコンも税金によってまかなわれています。教科書にも「これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と書かれていました。

学校生活以外に目を向けてみると、やはり多くの部分で税金によって支えられています。私の住んでいる宇多津町では、医療費の自己負担分が中学三年生までは無償化されています。他にもごみ収集にかかる費用や、私達がいつも演奏で使わせてもらっている「ユープラザうたづ」のような公共施設の費用も税金でまかなわれています。こう見ていくと税金は国民の暮らしを支えている大切なものだということが分かりました。

税金により支えられているということは、支えている人もいるということです。私の両親は共働きです。二人の給与明細を見せてもらうと、そこには所得税・住民税が引かれていました。また、通勤に使う車やガソリンにも税金がかけられているそうです。私の身近なところでは消費税も多く負担しています。私の両親のように多くの人が多くの税金を納めてくれています。

しかし、中には正しく税金を納めない人もいるようです。また、税金の使い道にも問題があるようです。ニュースで話題になった二〇二〇年に行われる東京オリンピックの会場になる新国立競技場の建設でも、多くの税金が使われるそうです。日本は今、多くの借金を抱えています。だからこそ本当に必要な所に税金を使い、決してむだ使いをしないようにしてほしいと思います。

私は今まだ中学生なので、働いて税金を納めることはできません。まだまだ支えられるだけです。でも、何年かたって大人になった時には、今私が支えてもらっている以上に支えることのできる人間になりたいと思います。そして、国民のみんなが「安心・安全で健康で豊かな生活」が送れる社会にしたいと思います。

消費税の行き先

福岡教育大学附属福岡中学校１年　　髙名　まや

今年で戦後七十年が経とうとしている。戦後の日本といえば短い期間で奇跡的な経済成長を成しとげたという記事が、近頃、新聞やテレビでよく特集されている。こんな奇跡が起きたのはもちろん、国民一人一人の努力の結果なのだろうが、「ＯＤＡ」のおかげも大きいと思う。なぜならば、第二次世界大戦が終わってからアメリカや国際機関などからもらったり、借りたりした「ＯＤＡ」の総額は十数兆円にものぼるそうで、これらの「ＯＤＡ」で新幹線や高速道路、ダムといった社会の基盤となる施設を作り、驚くほど早く復興することができたからだ。

その後、復興を果たした日本は、一九五四年からは、今度は国際貢献をする側になり、現在までに「ＯＤＡ」を通して援助した国や地域は百九十以上にもなるそうだ。高い技術力を生かして、橋や道路などの人々の生活を支える施設の建設を世界各地で行ってきた。しかし、それだけではない。発展途上国が経済成長を続けていくためには、その国の人々が自らの手で努力することが必要だと考え、色々な分野で「人づくり」にも取り組んでいるそうだ。

私の父は建設会社に勤めている。私が生まれる前（一九九四年)、ラオスという国に灌漑用ダムと用水路を作る「ＯＤＡ」の土木工事があり、それを管理するサポーティングセンターという建物を建設するため、建設マンの父も参加していた。当時のラオスは、とても貧しく、サバナケットはラオス第二の都市なのに、電気も水道もまだない状態だったらしい。そんなところにダムや水路ができて現地の人々は、畑や田んぼの収穫量が増えると収入が増える、と言ってとても喜んでいたそうだ。その後、日本の協力で上水道もでき、不便な土地はもっと生活しやすくなり、隣のタイや日本の文化も入ってきて、新たなよい循環ができているらしい。父はこの工事に携われたことをとても誇りに思っている。

実は今回初めて「ＯＤＡ」は政府開発援助のことで、税金が使われていると分かった。今までは、税金は大人が払うもので、私達子供には消費税以外は関係ないとさえ思っていた。千円の物を買うと八十円も多く払わなければいけない嫌なもの。しかし、今回、新聞やテレビ、父の話を聞いて、消費税の本当の意味や他の税金についても改めてもっと知るべきなのだと思った。この八十円もどこかの国の役に立っていると思うと少しだけだが、世界につながっているという気持ちになれる。将来はこのことを色々な人に伝えられるような仕事に就きたいと思う。明日からは「どこかで人の役に立っているんだ。」と思いながら税金を払うつもりだ。

「感謝」の気持ちをもって…

諸塚村立諸塚中学校３年　　竹内　理緒

私はこれまでに、消費税、たばこ税、酒税、所得税などよく耳にする税しか聞いたことがない。しかし、ある時テレビを見ていたらニュースである税のことについて話していた。それは、『ふるさと納税』という私が初めて聞いた税だった。

詳しく見てみると、匿名の男性が愛知県の児童養護施設の子どもたちに笑顔になってほしいということで、ふるさと納税を使って、地元の遊園地に招待した、というニュースだった。

私はこのニュースを見て、普段遊園地で遊ぶことのできない子どもたちにとって、とても嬉しかっただろうなぁと思った。

もし私がその子どもたちの立場だったら、嬉しすぎて夜も眠れないくらいだ。楽しい遊園地に行けることに感謝しなければならない。

私が大人になったときに、もしも、ふるさと納税を使っても良いという権利を得たら、いつも私がお世話になっている、諸塚村のみなさんに何かを寄付できたらいいなぁと思った。そのためにも、しっかりと税を払えるように、仕事に就いて、社会に貢献できる大人になりたい。

そんな私にとって、今もっとも身近な税が「消費税」だ。今の消費税は５％から引き上がって８％になったが、いつかは10％に上がるときがくる。自分たちが生活していくうえで大変なことはたくさんあると思うが、日本は少子高齢社会というのが現状にある。そういうことをふまえると、税金を使って、設備を整えていくことが大切である。将来、大人になって年をとっていく自分のことを考えると他人ごとではない。

また、中学三年生までは義務教育だ。私は今、中学三年生。私は小学生から中学生までの九年間、税で学校生活を送ってきた。校舎、机、いす、教科書など、税が関わって成り立っている。こうやって勉強ができるのは、税を払ってくれる人など、たくさんの人が関係して多くのことを学ぶことができた。だから、これまで関わってきた方々に感謝したい。

来年は高校生になって、義務教育という制度はなくなる。大きくなるたびに、税を利用する側ではなく、税を払っていく側になる。

これからは、私たちがみなさんを支えていく立場となる。

私が税を納める立場となった時、一人一人が納めているから生活が成り立っていることに誇りを持って、税を納めていきたい。そして、周りの方々に感謝の気持ちを持って生活していきたい。

「税金」に感謝

学校法人尚学学園沖縄尚学高等学校附属中学校３年　　新城　朋未

私は、アレルギー性鼻炎症で小学生の頃から耳鼻科に通院しています。治療費は診察の内容で毎回まばらではありましたが、もちろん安いといえるような金額ではありませんでした。その時の私は「税」についての知識は無く、毎月、父が家族の為に国民健康保険を納めていることは知りませんでした。ですが今、学校で「税」について学んでいくにつれて国民健康保険がどれだけ私にとって身近な税だったことに気付かされました。国民健康保険制度があるから、病院に支払う私達の治療費が三割負担程度で収まり、安心して医療機関で治療がうけられるのです。

私達の身の回りには、国や地方公共団体による「公共サービス」や「公共施設」がたくさんあります。これらを提供する為には、多額の費用がかかります。それらが全て税金でまかなわれていることを私達は、忘れてはいけません。もし、「公共サービス」などが無かったらどうなるのだろう。これらの必要な費用はどうやってまかなうのだろう。福澤諭吉の『学問のすすめ』の中に、「税金」とは国民と国との約束であると述べられています。自分達の国を支える為には、自分達一人一人が税を納め、人々の生活や安全を守る為にも、みんなで助け合うという精神がつまっているなと感じられました。「税金」は、私達の暮らしを豊かで安全にする為に、国や地方などに納める必要不可欠で大切なお金のことだと分かりました。税金を納めることで私達の健康や夢が支えられているのです。

また、私は去年の九月、文部科学省委託事業の一環で「アジアの架け橋、沖縄スリランカプロジェクト」に参加しスリランカの中学生と交流しました。両国の中学生が「命と平和」を育んできた歴史や文化を英語で語り合い、学びあい、異文化交流の素晴らしさを肌で感じました。このように、私が参加したこのプロジェクトにも「税金」が使われていました。このかけがえのない経験は私の心の大きな糧となり成長させてくれました。沖縄とスリランカの未来へ繋ぐアジアの架け橋として国際的視野が広がり、将来の自分を作る材料となりました。また私の未来の進むべき道を「税金」が繋げてくれたように思います。感謝の気持ちで一杯です。

私はまだ中学生で消費税８％しか支払えませんが、国や私達の生活を守る為に働いてくれている両親や人々がいます。私は、大人になって一生懸命働き、豊かで安心して暮せる日本の未来に貢献できるような人間になりたいです。これからも税金の使い道に関心を持つことも、これからの納税者としての重要な役割りだと思います。

北欧の税金から学んだこと

千歳市立北斗中学校３年　　有村　遥香

私が税金に興味を持ったのは、中学一年生の冬のことだ。その時期は、消費税が五パーセントから八％に値上がりするというニュースで持ちきりだった。私は、毎月両親から貰う限られたお小遣いでやりくりをしている。そんな私にとっては、少しの値上がりでも痛手となってしまう。だから、増税なんて断固反対だった。

その年の冬、私の興味をひくプリントが学校の掲示板に貼られていた。それは市内の中高生を対象とした、ノルウェー派遣研修への募集用紙だった。私はこの研修にぜひ参加したいと思い、すぐさま応募条件であった作文を書いた。そして見事選考され、晴れてノルウェー研修に行けることになった。ノルウェーでの研修は本当に素晴らしいものだった。そして、私の税に対する考え方を変えてくれた、大事な研修でもあった。

ノルウェーは、税金が二十五パーセントもある。最初聞いたときはとても驚いた。実際、普通のスーパーで売られていたチョコが一袋千円近くし、日本の百円ショップで売っているような雑貨も高い値段で売られていた。おおよそ、日本の約三倍の物価だった。

その時の私は、「こんなに税金が高くて生活は大変ではないのか。」「高いことに何かメリットがあるのだろうか。」と疑問に思った。

疑問を解消する為、インターネットを使ってその事について調べてみた。すると、沢山のことが分かった。ノルウェーのみならず、大部分の北欧では、高い税金がかけられている。しかし、高い税金を払っている分、子育て支援・教育費・医療費など手厚い福祉制度の恩恵を受けていることが分かった。ひとつの例を挙げると、ノルウェーでは公立ならば大学まで学費は無料である。私はこの制度は素晴らしいと思った。お金に困っている人でも、自分が学びたいと思えば大学まで行くことができ、学びを深められるから。また、病気や怪我をした時でも無料で手当を受けられるのだ。

そして今、また日本では、消費税が二〇一七年に一〇パーセントに上がる、と騒がれている。以前の私だったら、「なんでまた上がるんだ！大変な思いをするだけじゃないか。」と、文句を言っていただろう。だが、今は違う。国民が、より良い生活を送れるように増税をするのなら、それはぜひ推進すべきだと思うようになった。

国民の生活を豊かにしてくれる税。税金という制度があるお陰で、私たちは暮らしやすい生活を送れているのだと思う。政府にはこれからも、国民ひとりひとりの為、税金の使い方を間違えず、世の中の為になるような使い方をしてもらいたいものだ。

税への意識

秋田市立秋田西中学校３年　　和田　望幹

納税は国民の義務である。だから本来は、自主的に納付することが前提なのだ。私自身、税金は大切なことだと理解しつつも、買い物の際にはつい、「とられている」と感じてしまうことがある。その背景には、「税制度や税金の使い道を正しく理解していない国民が多いこと」が挙げられるのではないだろうか。

私は陸上競技部に所属している。今年だけでも八つの競技場で走った。どれも「県立」や「市立」の名前どおり、国民が国や地方に納めた税金で作られた公共施設である。使用料が無料、もしくは、安値であるのは、税金のお陰なのだ。私達が毎日通う学校や図書館、プールなどは皆税金で作られている。信号機や道路もその一つだ。公共施設を利用する私達は、納税者への感謝を忘れてはいけない。

また、今夏利用した競技場の中には、ネーミングライツを導入し、節税に努めている自治体もあった。ネーミングライツとは、施設に名称を付与する権利のことである。一年間で二一〇〇万円（消費税及び地方消費税は別途）を地元企業が県に払う代わりに、契約期間内は企業名をその施設の名称に組み入れる。他県から訪れた私がその企業名を知る機会を得たように、企業には認知度の向上、そして、自治体には「新たな財源確保」というメリットがある。税金で施設を建てたまではよいが、その後の維持費や運営費をも税金で賄うことは厳しい。官民一体となり、より良い街づくりを目指すことで節税につながる。節約された税金は、他の分野で私たちの暮らしを支える。

ところで、税金のない世界を考えたことはあるか。国と地方が担う公共サービスは、税制度に支えられている。例えば、私達小中学生の教科書は現在、無料で配付されている。税制度が無ければ、経済力の乏しい家庭では、教科書が買えず、教育が平等に行き届かない恐れがある。また、医療費が患者の一部負担で済んでいる現状。全額個人負担となれば、医療費を払えない人は病院へ行くことができず、病状悪化につながりかねない。災害時にも援助が来ない。開発途上国への技術支援も滞る。消防や警察が機能しなければ、安心して暮らせない。つまり、税制度によって、すべての国民に平等に安全で快適な生活が保障されているのだ。

消費税が五パーセントから八パーセントになった時、私の財布は一円玉で厚みを増した。税制度の意義を理解した今なら、「この厚みは、私が納税者としての義務を果たした証拠だ。そして、将来の日本を支えていくお金となるのだ。」と実感できる。三年後の私は十八歳。選挙権を持つ。一有権者として政治に意見を述べ、税金の使い道についても、賛否を唱えるだろう。だから私は、「中学生だから関係ない」と、税制度について学ぶことを避けることなく、日本の未来を担う若者である自覚を持ちたい。税制度への理解を自らの市民としての意識向上につなげるために。

働くということ

さいたま市立大宮東中学校３年　　木谷　駿介

僕の家庭は共働きです。それで僕と弟は、生後４か月から保育園に入っていました。また弟は1400ｇの未熟児だったので、産まれてから２カ月病院に入院していました。弟が入院していたのは、ＮＩＣＵとＧＣＵという未熟児のための特殊な病室で、24時間体制でとても入院費がかかる施設だったそうです。しかし国とさいたま市の医療制度のおかげで、当時入院費の負担はなかったそうです。

両親の実家は二人とも金沢なので、僕たちが具合の悪い時に祖母や祖父に面倒をみてもらうことはできませんでした。弟はとても体が弱く保育園をよく休みました。「病児保育室」が自宅から車で30分ほどの場所に開設されてからは僕も弟もよく預けられ、ここの看護師さんや保育士さんと仲良くなったことを覚えています。病児保育は病気の子を預かってくれるからお金がとてもかかりそうなのですが、これもさいたま市の子育て制度の一つで、とても低料金で利用できたそうです。

僕たちが小学校に入ってからは学童保育に行きました。僕が小学２年の時に学童保育の施設が小学校の隣に建設され便利になりました。僕たちが通った学童保育はＮＰＯという組織の下で運営されており、さいたま市から委託金が支払われるそうです。学童保育はその委託金と保育料で運営されているので、先生の給料は安いのよ、と母から聞きました。

こうして振り返ってみると、僕の人生は、僕の両親以外の多くの人々にお世話になってきた歴史だと思います。そして裏を返せば、お世話をしてくれる人がいなかったら、両親特に母は、働き続けることができなかったと考えます。

働きたい人がたくさんいるのに、子供を預ける場所がないとニュースで耳にします。保育園、病児保育、学童保育がもっとできればいいのに、と思いましたが、これらの施設は税金で成り立っているものなので、施設が足りないからといってすぐにたくさん建設するわけにはいかないそうです。

しかしながら、子供を育てながら仕事をするということがとても困難な社会であるという現実は、子供を産もうとする人が減っていくことを加速していくに違いありません。

日本は世界で一番少子高齢化が進んでいる国です。もっとたくさん子供が増えて、もっとたくさんの人が働かないと、増え続ける高齢者を支えることができません。税金は会社だけでなく働いている人たちも納めているし、僕の少ないお小遣いからも消費税を納めています。多くの人から集めた税金は、本当に必要としている人々に本当に必要としているサービスを提供するために使って欲しいと思います。

僕は数年したら社会に出て働くことになります。その時、僕たちが税金から受けた多くの恩恵を精一杯働くという形で返していきたいと思います。

税の重要性と正しい使われ方

白子町立白子中学校３年　　徳若　宏樹

この作文を書くにあたり、税金のことについて、消費税という言葉しか知らなかった私は、親が納めている税金や、買い物をした際に発生する消費税が、どのように使われているのかを調べてみた。

すると、税金は、例えば警察や消防などの生活の安全に関する費用、ゴミ収集などの環境に関する費用、道路整備などの建設に関する費用、高齢の方や障害を持った方などの福祉に関する費用、他にも公立の図書館や美術館、病院の建設・運営費用など、私たちが暮らしている様々な分野で、様々な形で使われていることが分かった。

私の身近なところでは、一つは学校である。私の通う公立の中学校の場合、校舎の建設費用や維持・修繕にかかる費用、教室の机やイス、教科書やプリントなどの教材に税金が使われている。また給食についても補助金という形で税金が使われている。日本の場合、中学までは義務教育となっており、全ての人が中学までは公平に教育を受けることができる。これも税金によるおかげである。もう一つは医療費である。私の住む白子町では、中学三年生までは一定額で通院や入院が出来る子供医療助成制度というものがある。これにも税金が使われており、そのおかげでお金の心配をすることなく安心して医療を受けられる。

このように、税金は私たちが生活する様々な場面で生かされており、知らず知らずの間にその恩恵を受けている。言い換えれば、税金があることにより、私たちが健康で快適に生活ができ、加えて教育を受けることができるのだと感じた。

しかし最近、私たちの生活に欠かせない税金の無駄使いがニュースに取り上げられた。東京オリンピックの新国立競技場建設のニュースである。建設費用が高すぎるため新たに見直しをしているが、中止が決まった前の建設計画に既に何十億円というお金を支払っており、回収は不可能だと言われている。その回収不可能な何十億円というお金も税金である。この回収不可能なお金を無駄にしなければ、例えば病院がない地域に病院を建設することができたかもしれないし、待機児童の問題に対応できるよう、保育所や保育園を建設できたのかもしれない。

税金は国民から預かった大切なお金である。親からもらったお小遣いを無駄遣いしないように私は考えながら使っている。税金も無駄のないよう、納めている国民が納得できるように使って欲しいと思う。

私はまだ自分の力で税金を納めているわけではないが、社会人になり税金を納める立場になったときには、公共の福祉のために、納税の義務を怠ることのないようにしていきたいと思っている。

税の存在の大きさ

輪島市立輪島中学校３年　　松本　望来

私の中での税金とは、消費税が８％になり、『高い』という印象があったので、今までなぜ払わなければならないのかわかりませんでした。また、小学生の頃にインターネットで『日本の借金時計』を見て、家庭の負債額は 1925 万円もあり、驚いたことがあります。なぜ税金を払っているのに借金があるのか不思議で、税金を払う理由がますますわからなくなりました。しかしある日の出来事をきっかけに、私の税金に対する関心は高まりました。

それは、中学二年生のときでした。私は腰痛持ちなので、接骨院に通っています。治療後に支払いのため受付に行くと「中学生ですので、お金は市から出されるから払わなくてもいいですよ。」と言われました。輪島市で中学生以下の子どもは、医療費が市から免除されることが決まったのです。風邪を引いて病院へ行っても、診察費・検査費・薬剤費なども免除されました。治療を受けてもお金を払わないで接骨院や病院を出ることは、とても違和感がありましたが、有難いなぁと思いました。この医療費はどこから出されているのか、家に帰って調べてみると、全て市民の税金から出されていることがわかりました。税金を払う意味、そして税金が果たしている役割りを知り、納税は必要なのだと納得しました。私も社会人になり税金を納める年になったら、その恩恵を返すつもりで納めようと決めました。雇用に感謝し、自分で働いて得た給料の一部を国に納税する。納税は、親からの自立を感じさせてくれる誇らしい行いだと気付くことができました。また何かを買うとき、これからは消費税を誰かの役に立つことを願って気持ちよく払えることと思います。消費税が上がったから払う手が重くなるのではなく、消費税が上がったことでより国にに貢献できると考えれば、納税への意識も良い方へ変わっていくのではないでしょうか。

税金あっての義務教育です。税金は子どもの将来の可能性を無限に広げてくれています。では、もし納税制度がなかったら…。図書館で無料で本を借りられない。道路に穴が空いても工事してくれない。ゴミの収集に来てくれない。警察官がパトロールできなくなる。私たちが日々豊かに暮らせている理由の源は、税金にあったのです。

税金の中に、経済協力費というものがあります。税金は日本だけでなく、世界中の人々のためにも使われています。飢えに苦しむ人が多くいる国を助けるために、病院を建てたり特効薬を送ったりしているそうです。このような活動を「政府開発援助（ＯＤＡ）」といい、私たちが納めた税金から払われています。私たちが納める税金で救える命がある。とても嬉しいことです。

税金は世界を救う。納税は世界の平和や他国の発展への手助け。税で自分が助けられ、税で誰かを助けることができる。税は助け合いを生む国境を越えた架け橋だと思うのです。

ありがとう救急車

高浜市立高浜中学校３年　　中村　花未

数年前のある日、見覚えのない携帯番号が表示され家の電話が鳴った。
「お母さん、誰だろう？とっていい？」
と、お兄ちゃんが言うと、
「私が出るね。」
と、お母さんが電話に出た。すると、お母さんの顔色が変わり、深刻そうな顔で
「はい…はい…そうです。」
と、長い間話していた。電話を切ると
「ばぁばが事故にあって、今病院に運ばれている。じぃじに連絡してほしいって。」
お母さんは、とてもあせって、いろいろな所に電話をかけていた。
ばぁばは静岡県の駿東部という所に住んでいる。買い物途中の横断歩道で車にはねられ、重傷だった。救急救命士さんは、ばぁばがやっとで答えた娘である母の電話番号を聞きとってくれ、わざわざ遠方の私の家に電話をかけてくれたのだ。
そのおかげでじぃじと連絡がとれ､ばぁばは何時間もかかった手術が成功し、後遺症でつえをついているが今も元気にしている。
私たち家族は、父も母もそして私も救急車に助けられている。
父はジョギング中に倒れ、通りがかりの人に救急車を呼んでもらい、母はウッドデッキで足を骨が見えるほど深く切り、自分で救急車を呼び、病院に運ばれ、９針縫った。
「あの時救急車がこなくて、自分で病院に行かなきゃいけなかったと思うとゾッとする。」
と母は言っていた。
私はまだ生後２ヶ月の頃高熱を出し、病院から大きな病院へと救急車で運ばれたそうだ。
こう考えると私たち家族はどれだけ救急車に助けられただろう。母が言っていたように救急車がなかったら、ばぁばは命が危なかっただろうし、父も母もとても大変な思いをしたに違いない。もちろん、私も高い熱が続いていただろう。救急車、救急救命士さんに感謝してもしきれないくらいだ。
平成二十六年の救急出動件数は五百九十八万二千八百四十九件。全国でもどれだけの人が救急車のおかげで助けられただろう。
今もどこかで何台もの救急車が出動していることだろう。
もし、救急車に料金がかかっていたら…と考えたことがある。海外では救急車が民営で、有料のところもあるらしい。
私たち日本では、保険に未加入でも、救急車の利用は税金でまかなわれているためお金がかからない。私たちが安心して生活できるのはそのおかげかもしれない。
国民の三大義務である「納税」。税金にどのような種類があり、どこでどのように使われているか、正直なところ私は詳しくは知らない。でも、私たちが生きていく中で、それにより守られている、助けられていることがたくさんあるのは確かだと思っている。

税と募金

大阪市立蒲生中学校３年　　辻本　伊織里

私は中学一年生の時、学校からユニセフ募金のプリントをもらいました。それまで募金について深く考えたことはなかったのですがその時は興味が出たので調べてみました。世界中に困っている子供達が大勢いることに驚き、役に立ちたいと思いました。早速、母に「お小遣いから三千円募金してもいい？何十人分のワクチンが買えて命が助かる子もたくさんいると思う。」と尋ねました。母も賛成してくれると思いましたが、「気持ちはわかるけど、あなたが大きくなって働き、自分で税金を払えるようになってから沢山募金したら？今は大金を募金する立場ではないから。」と言われました。税の知識がなかったため、私には募金をすることと税金とは全く関連性がないように思えました。

世界には医療制度が整っていないために医薬品が不足して、また安全な水を手に入れられず汚水や不衛生な環境で感染症を引き起こし、命を落とす子供達が大勢います。紛争による影響で学校に通えず、教育を受けられない子供達も大勢います。もし日本でも税金の恩恵を受けられなければ、私達も同じような立場になるのではないでしょうか。

私達は日々、税金で賄われているものの中で生活をしています。蛇口をひねれば安全な水が飲めること、整った医療制度の中で病院にかかれること、小学校・中学校に教育費が無料で通えること、その病院や学校に安心して通えるための道路が整備されていることなど、多岐にわたる公共サービス・公共施設のお世話になっています。私はまだ所得からの納税はできないですが、まずは身近なところでどこに税金が使われているかを学び、税金のお陰で今の生活があることを認識し、感謝をして大切に扱っていかなければならないと思います。

国民が一生懸命に働き、得た収入の中から様々な形で税金が払われています。支払う税金が少なくなれば家計は助かるように思えますが、税収入減少となれば公共施設や公共サービスに充てられる税金も減り、しいては自分達に返ってくるものも少なくなるのです。私達の生活がより豊かで安心安全なものになるよう、公平公正に納税の義務は果たされるべきです。

社会に出て納税の義務を果たせるようになったとき、税の恩恵を受けるだけの立場から社会を支える一員に加わったという立場に変わります。今まで守り育ててくれた日本に、また支えてくれた人々に恩返しができるよう社会に貢献して初めて、世界にも目を向け、手を差し伸べられるのだと思います。

税金と募金、同じではありませんが、人を支えているという点では同じなのです。母の言葉を思い出し、世界で命の危機や苦難に直面している子供達を支えられるよう、まずは知識と意識を持って納税できる大人になりたいと心に決めました。

税金と私たちの暮らし

学校法人安田学園安田女子中学校１年　　柚木　萌花

通学の途中で車イスを使用している人と毎日出会います。その人は、電車に乗る時に駅員さんに手助けをしてもらっている。駅のホームと電車の乗り口の段差は車イスの人ひとりではどうにもならないものでした。電車に乗り込むとその人はお礼を言って駅員さんと別れるのでした。私はその様子を見てホームに車での経路はどうなっていたか改めて考えてみると、改札口、階段、道路と私たちが日頃何にもないように通っている経路は車イスの人には多くの困難のある経路でした。

しかし、道路にはスロープ、階段にはエレベーターといった車イスの人への思いやりの対応がされていた。その他にも、道路の点字ブロックや横断歩道の音楽など体の不自由な人への思いやりはたくさんあり、これは税金によってつくられたものであることを父に教わりました。体の不自由や人への思いやりだけではなく、公園、図書館、学校など私たちの生活に関わるものすべてに税金が使われているとのことであった。私たち中学生にとっては、税金を納めるという実感は薄いですが、これら施設を利用する機会は多く、私たちの生活と税金が深く関わっていることを知りました。

それなのに大人の人たちは「税金をとられる」といういい方をするのはどうしてでしょう。まるで税金を払うのが損といわんばかりです。大人の生活には税金で助かっていることはないのでしょうか。そんなことはありません。道路、病院、警察、消防など税金と関わっているものがたくさんあります。私の父も若いころには税金は「取られる」と感じていたが、祖父が介護を受けるようになって考えが変わったと言っていた。

自分がどのように税金を払い、どのように使われているかを身近に知ることが大切なことで、税金は誰かのために役に立てるために国民ひとりひとりから集めて、巡り巡って自分にも返ってくるものであることをみんなが知るべきである。

税金を集める仕組み、使われる仕組みをもっと国民に分かりやすく知らせることで、税金を払うことに自然と感謝が涌くような社会になり、住みよい社会づくりにつながっていくと思う。私のような中学生も税金に興味を持ち、社会の仕組みを知ることが必要であり「助け合って生きる社会」の中の一員であることを理解して行く必要があると思う。

私たちが大人になる時には、「助け合って生きる社会」があたりまえで、税金だけでなく、個人個人でも積極的に助け合っていくことができる社会を日本だけでなく世界に広めていきたいと思います。

税について学び考えたこと

鳴門教育大学附属中学校３年　　山根　綾華

　これから始まる新生活に胸をはずませ門をくぐった中一の春。しかし教室に入ると、そこにあるのは山のように積み上げられた教科書。私はその量の多さに先程までの喜びが一気にクールダウンしたのを覚えている。学年が上がるにつれて増えていく教科書。
「また増えた。めっちゃ鞄重うなるな。」
学校の帰り道、友との会話に花を咲かせながら、肩に食いこむ鞄の重さをひしひしと感じた。しかし、今年の冬、学校で「税」についての講習会があった。私は自分の無知さに恥ずかしさを感じながらも講師の方のお話しに驚き、税の役割の大切さを実感した。
「税は“かたち”としては見えにくいけど、便利な身の回りの環境はほとんど税金で支えられているんですよ。」
私は思わず体育館を見回した。これも税金？あの重たい教科書も？幼い頃よく遊んだ公園も？通学路の道路や橋も？私の頭の中は、まるでパズルを解いていくように次から次へと「税金」という言葉で埋まっていった。そしてピース一つ一つに含まれている税金のありがたさに感謝の思いでいっぱいになった。
　この講習会を通して、私は「税金」を身近なものとして感じた。学校、公園などの公共施設や教科書、また道路や橋の建設は、公共事業費や文教及び科学振興費、経済協力費など全て税金で賄われていることを学んだ。また高齢者が急増する昨今、日本の医療費などの社会保障関係費は高齢者やその家族にとっても大きな支えとなっている。
　私の曾祖母もまた社会保障制度に支えられている高齢者の一人である。曾祖母は週に一度デイサービスに通っており、その日を心待ちにしている。私は整備された医療制度や医療サービスが高齢者の方々の明るい笑顔を花咲かせているのではないかと思う。
　税金は人々の生活を支えるだけではなく、精神面でも人々の心を大きくサポートしている。生きる喜びや勇気、また学ぶ喜び…。私は今充実した教育環境の中で学んでいる。今回の講習会をきっかけに、私はどのような税の仕組みがあるのかもっと知りたくてインターネットで調べたり、家族と「税金」について話し合った。そして、今まで以上にこの恵まれた環境に感謝しなければいけないと強く思った。
　私たち一人一人の国民の生活を豊かにしてくれるもの。それが税金だ。私たちは共に支え合って生きている。幼い子どもから高齢者まで様々な立場の人々が笑い合って楽しく生きることのできる社会。世代交代が進み、循環していく社会の中で、私もその中の一員なのだという自覚を改めて感じた。この安心して暮らせる幸せな社会がこれからも永遠に続いていくことを心より願っている。私は将来恩返しをしたい。教科書を手に、様々な事を学び、思いやりの心を育んでいきたい。共に支え合い社会を担う未来の一員となるために。

「私たちの税」

早稲田佐賀中学校３年　　佐藤　奈々惠

税の歴史について調べてみた。日本では大宝律令までさかのぼり、主食の米や各国の特産物などの現物を納めたり、兵役など労働で納めるものなどがあった。当時の税は、民衆が支配する者を支える富であり、民衆を束ねる国家の体裁を形づくり、継続させるためのしくみであった。

世界の国々でも同じような歴史があり、今も変化を続けている。現在、先進国では、税金は「富の再分配」によって社会の公平性を保ち、民衆の暮らしを支える役割を果たしている。

私たちが住む日本では、税金は私たちが納め、私たちの為に使われる私たちの税金と言える。私たちの税の使い道について考えてみた。そもそも税金の分配の優先順位はどうなっているのだろう。生命を守ること、暮らしを支える事、教育、仕事等、重要な要素はたくさんある。特に、生命を守る事はとても重要だ。医療費に税金が占める割合が高く、問題になっているが、やはり人間にとって必要不可欠なものである医療費の削減というのは難しい問題だと思う。セルフケアの普及によって健康づくりに熱心な人が増え、予防できる病気を減らしていくことが唯一の解決策かもしれない。

食べていく事、社会の中で生活が成り立っていくことも、また重要なことである。私が関心を持ったのは「子どもの貧困」問題だ。先進国の日本の中で、どうして六人に一人もの子どもが貧困に苦しんでいるのか不思議な一方、これからの日本を考えると、このままではいけないと思う。少子高齢化の問題も、元をたどっていくと、ワーキングプアの若者が結婚できないことや、女性の働きにくい社会、貧困家庭に育った子どもが、良い教育を受けられず、世代を越えてまた貧困家庭が生まれるという連鎖が起きていることと関連していると言われている。

貧富の差がこれ以上開かない社会のしくみが必要だと思う。その一つが税による社会保障だが、その中でも特に子どもの教育については全ての子どもに平等に教育が与えられるようにするべきだ。子どもが十分に栄養を摂り、十分な教育を受けて成人できる社会が本当に成熟した社会ではないだろうか。

ある経済学の番組で「教育こそが、貧困を脱出できる最大の武器です。」と言っていた。仕事を持ち、誇りを持ち、社会のために喜んで税金を払える人づくりが、税によって支えられる成熟した国づくりの第一歩なのではないだろうか。

私たちによって支えられて、私たちのために使われている税という意識を持ち、これからも税について考えていきたい。

身近な税

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校３年　　中武　ゆい

「税を身近に感じることがありますか。」

私がこの問いを投げかけられたら、すぐに「ない」と答えるだろうと思います。実際、「税金」と言われても、私たち中学生に関わりがあるのは消費税くらいです。「国の歳入の中に国民から集められた税も含まれています。」と言われても「別に、私が納めているわけではないし」と思っていました。だから、税金に関心がありませんでした。しかし、そう思うのは、私が何も知らないからであることに気付かされました。

先日、学校で租税教室がありました。昨年、消費税の税率が五パーセントから八パーセントに上がったことに対して、消費者、経営者、税理士、税務署の四つの立場の意見や考えを聞きました。私は、今まで、税率が上がることに対して、消費者としての立場からしか考えたことがありませんでしたが、違う角度から見ることでとても考えが広がったと感じました。この租税教室を終えて、私は、消費税の税率を上げることに賛成できるようになりました。ただ、この租税教室で教わったように消費者として、政府のお金の使い方を注意深く見る必要はあると思います。

もう一つ、私は、この租税教室で学んだことがあります。それは、「税は身近である」ということです。租税教室を受ける前は、税の恩恵にほとんどといっていいほど気付いていませんでした。しかし、租税教室のあと、「税は思いやり」という宮崎税務署の方が作られた曲を聞いて、税が私の生活を支えている事に気付きました。「税は思いやり」という曲と同時に流れる映像には、見慣れた宮崎の風景がたくさん出てきます。それらは、全て、税によって作られたものでした。さらに私が今、勉強している学校を支えているのも私が使っている教科書も、毎日の通学に使っている道路も、私の周りにある多くのものが税によって作られているものだということを思い出しました。私は税と無関係ではなかったのです。今まで、身近だと思っていなかった税がとても身近なものに感じました。

私も将来、消費税以外の税も納めることになります。私の納めた税が少しでも多くの人を支えることになるのであれば、気持ちよく税を納めていけると思います。それは、今の納税者も、これから先の納税者も変わらないでしょう。「税は思いやり」税は、共に支え合うための一つの手段です。そのことを忘れず、これからも、税に関心を持ち続けたいです。

税の大切さ

沖縄市立宮里中学校３年　　鉢嶺　妹子

私にとって、身近な税金と言えば、『消費税』です。私は中学生ですが、国民の義務として間接的に納税しています。その一方で、納めた税金が何に使われているかは、あまり関心がありませんでした。

しかし、私は、あることをきっかけに、税金の大切さ、税金が果たしている重要な役割について考えさせられました。

ある日、祖父母が私の家に遊びに来ました。いつもは私たちが遊びに行くのにどうしたんだろうと思っていると、祖母が、母に、

「毎年ある特定疾患の更新手続きの期間になったから、書類を書いてほしい。」

と頼み事があってわざわざ来たようでした。私は、『特定疾患』という聞き慣れない言葉と何の更新なのか気になりました。母は、うまく字が書けない祖母の代わりに手慣れたように書類を書いていました。

その間、私は祖父に、

「『特定疾患』って、何の更新をするの。」

と尋ねました。すると祖父は、

「おばあはね、『パーキンソン病』という難病で、二十年くらいになるかな。」

と教えてくれました。私は、初めて聞く病名に少し驚きました。

『パーキンソン病』の原因は、現在もよくわかっていないそうですが、神経伝達物質のドーパミンの減少により、手足の震えや、歩きづらくなるなどの症状が出て、日常の生活を送るのがだんだんと困難になる病気です。祖母が、うまく字が書けないのも、ゆっくり歩くのもそれが原因なんだとわかりました。そして、その病気は、生涯にわたり、治療を続けなければならず、祖母は、今も内服治療を行っていて、その薬を毎日欠かさず薬を飲んでいることを祖父は教えてくれました。

「病院の治療費とか薬代とか、お金もたくさんかかるし、大丈夫なの。」

と私はとても心配になりました。祖父は、

「日本では、『特定疾患治療研究事業』という医療費助成制度があって、『パーキンソン病』は、指定されている病気なんだよ。治療でかかる医療費の自己負担分は、公費で助けられているから大丈夫だよ。」

と言いました。

この公費とは、税金であり、税金がこんな形で使われていることに、とても驚くと同時になんてありがたい制度なんだろうと思いました。年金暮らしで、収入の少ない高齢者にとって、医療費は大きな負担です。ましてや難病にかかったら、大変なことです。

更新に必要な書類を準備し、提出のため、手続きが行われる中部福祉保健所へ祖父たちと行きました。私は、祖母が転ばないようにと、手をつないで歩きました。私が杖のように手で支えたように、税金も祖母のような難病で困っている多くの人達の生活を支える杖となっている大切なものなんだと考える良い機会になりました。

見えない所での支え合い

芽室町立芽室西中学校３年　　宮本　那都

私が税について考えたとき、一番初めに頭に浮かんだのが「消費税」でした。「消費税」と聞き、思い出されるのは、今も国民の記憶に残っているであろう、「消費税の引き上げ」です。あの出来事からすでに約半年が経ちましたが、「消費税の引き上げ」が行われた、三月頃の新聞やテレビ放送の内容は今でも鮮明に覚えています。街頭インタビューでは、誰もが批判の声をあげ、商店街などでは値札の張り替えに追われ、ほとんどの国民があせりと不安でいっぱいでした。それまで税のことはよくわからなかった私も、すべての日本国民に関わり、それはもちろん私にも関係しているということを知ったときは、とても驚きました。そしてこう思いました。「どうして未成年の私たちが、これ以上お金を払わなければならないんだろう。」確かに私たちは日本国民です。でもまだ私たちは働くことができません。それに、ほとんどの学生は、お小遣いでやりくりしているはずです。「それなのに、どうして？」そう思いました。しかし、税金の使い道について調べてみると、社会保障にあてている税金が一番多いことがわかりました。社会保障とは、年金、医療、介護、社会福祉、生活保護などの、私たちが生活していくために必要なサービスのことです。しかも今、私たちの国は「少子高齢化」が急激に進んでいます。なので、この「社会保障」の多くはお年寄りに使われている、ということが今の現状からわかります。ということは、私たちは今の日本をつくってくださったお年寄りの方々に感謝の気持ちを込めて税金を払っている、そう考えることができるのではないでしょうか。そしてもう一つ、どうしても取り上げたい税金の使い道があります。小中学生は、もう気付いていると思うのですが、新しい教科書に名前を書くときにある文章が目に入ってきます。その文章とは、「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」という文章です。これを読むと、日本の国民は私たちを支えてくれている、それに、期待もしてくれている、ということになります。そう考えると、私たちが今するべきことは、国から支給された教科書で、将来私たちが大人になったとき、しっかりとこの国を支えるために、今は一生懸命勉強をするべきだと思います。そして、私は初めに、「どうしてお金を払わなければいけないのだろう。」と言いましたが今はその言葉を訂正したいです。この国は見えないところで、たがいに助け合い、協力して成りたっている、だからこんなに安心して生活を送ることができるのだと思います。

新しい教科書に名前を書くとき、そんなことを思いながら名前を書いてくれることを願いたいです。

「新しい発見」

村山市立楯岡中学校３年　　大川　亜友子

私は、山形が好きだ。食べ物はどれもおいしいし、四季の移り変わりも美しい。すべての市町村に温泉があることも自慢だ。そして何より、人が温かい。

そんな、魅力あふれる山形に育ててきてもらった私。将来、地元を離れることがあったとしたら、ぜひ、山形に恩返しをしたい。そんな時に知ったのが、「ふるさと納税」だった。

最近よく耳にする「ふるさと納税」。私は、そのしくみを調べてみることにした。以前の私は、「ふるさと納税」と聞くと、自分の応援したい自治体に寄付をして、そのお礼として特産品がもらえる、といういたってシンプルなものだと思っていた。しかし、良い点はこれだけではなかったのだ。それは、「税金の使い道を納税者が決められる」という点である。例えば、自分の祖父がいる老人ホームのため、自分が学んできた母校のため、さらには、震災の復興支援のためなど、その選択肢は多様だ。自分の納めた税金がきちんとした使われ方をされれば、納税者もうれしい気持ちになるだろう。もちろん私も、将来山形のために何か役に立ちたいと思っている。だから、この制度に賛成であるし、ぜひチャレンジしてみたいと思う。

しかし、物事にはデメリットも生じる。

「ふるさと納税」がブームとなった今日、各自治体は、競い合うように特典の質を磨いてきている。そうしたために、赤字に陥り、元も子もない状態になってしまった自治体があるという。また、納税する側も、その優待にばかり気を取られ、本来の目的を見失っている傾向にあるということも知った。いわば、個人の都合で良くない方向へと進んでいる。もちろん利益も大切だが、それ以前に大切なものがあると私が考える。そのことをもう一度見つめ直し、一人ひとりが意識することが必要ではないか。ふるさとに納税をする、そのお礼をする。その人間味ある行動を忘れてほしくはない。

このように、「ふるさと納税」には、良い点もあれば問題点もある。表面を見ただけでは気づかなかったことが、その裏面をも見てようやく気づくのだ。それらの両方を理解することができれば、この「ふるさと納税」をさらによりよいものにしていけると、私は思う。そして、私が大人になり、この制度を利用するとなった時、今回学んだことが少しでも活きるようにしたい。

中学生の私は、税金のしくみをよく知らない。しかし、税務署に務める父から税に関するさまざまな話を聞いたり、自分で調べていったりするうちに、税金についてさらに知りたいと思うようになった。いずれ、私は社会に出て行き、税金ととなり合わせの生活を送ることになる。そのことを自覚し、納税の義務がある日本国民の一人として、しっかり勉強していきたい。

日本という一つの家族

春日部市立東中学校３年　　唐木　映里花

五年後に迫る東京五輪・パラリンピック。五輪のメイン会場となる新国立競技場の建設費用が、予定の 1300 億円の倍近くの 2520 億円になることが分かって、その計画が白紙撤回されました。夏休みに入る直前にこの報道を知ったことで、私はこの巨額の建設費を誰が払うのかという視点で考えるようになりました。

「当たり前のことだよ。それだけのお金を使うのなら、その分問題視されている、社会保障費を充実させることができるのだから。ましてや、財源の中心は税金という訳だし。」

と祖父がその内容の出ている新聞記事を眺めながら、私に向けて投げかけてきました。

「日本は日本人という一つの家族。みんなで納めた税金が家族の生活費となるので、その範囲内でやりくりすれば不満は出ない。無理があると文句を言われてしまう。なぜ必要なのかと家族全員に納得させないと。」

と祖父がため息交じりに語ります。

私は祖父が話した「日本という一つの家族」という言葉が妙に心に残りました。そして四年前の東日本大震災の時に、全国から多くの寄付金やボランティア活動が湧き起こった当時のことを思い出していました。なぜかというとその時私の家でも、義援金やふるさと納税という手段で、被災地のために何かをしてあげたいと行動を起こしていたからです。

「お母さん、我が家の支援もようやく出来たね。でもこれで終わりじゃないんだよ。」

と誇らしげに母に語った、当時の純粋な私の姿がありました。被災地の方々を大切な家族と考え、「税金」というフィールドで被災地の復興について考える転機となっていました。

世の中になぜ税金があるのか。もし税金がなくなってしまったらどうなってしまうのか。このことは、小学校、中学校での段階的な税金教育を通じて学んできました。その学びと祖父の言葉から、日本の現状を考えてみたり、みんなで支え合い、助け合う納税という使命に結びつけることができました。

日本の人口は、四年連続減少しています。将来働いて税金を払う人は減る一方で、年金や医療などの社会保障に頼る人は増え続けています。現在でも厳しい日本の財政状況は、この人口減でますます厳しさを増すばかりなのだと、いま、多くの人々は感じています。

「税金」は私たち誰もが、普段余り考えたくない、出来れば避けて通りたい事柄です。けれども私たちのそんな無関心さが、税金の使い方に無駄や不正を生むきっかけを作っています。税に関心を持ち続けることが、私たち日本という一つの家族の立ち位置であるとともに、その納税の積み重ねこそが日本の国を良くしていくのだと考えます。

日本のことを考える。日本という家族のためにお金を使い、自分のできることを考える。日本の将来を決めるのは、今を生きる私たちなのだから・・・。

私と日本を支える英雄。

板橋区立志村第三中学校３年　　片山　亞由美

「税は必ず自分へと返ってきます」と税理士の方が教えてくれた。今まで「税金が高くて困る」「自動車税が上がったよ」「欲しい物が買えない」という大人達の苦しみの声をよく聞くものなので、私もちゃんとした知識もないまま「税は悪者！」と決めつけていた。そんな私にとって税理士の方の言葉は驚きであり税に対する興味を引く鍵となった。そして話を聞くうちに私の心に変化が起こった。

小さい頃、私は幾度か四十度近くの高熱をだしてしまい母に連れられ病院へ行ったことがあった。私に限らず免疫力の弱い幼い子にはよくあることだ。私にとって病院は痛い予防注射を受ける場でもあったので正直好きではなかった。このように日本では幼い子が高熱や病気にかかっても無償で治療を受け治すことができる。しかし世界の別の国ではそうはいかない。今こうしている間にも三秒に一人、小さな尊い命が失われているのだ。そして驚くことに彼等の命を奪ってゆく原因は風邪や下痢程度の日本では簡単に治せる病気がほとんどだ。なぜこんな悲劇が起きてしまうのだろうか？水質問題、栄養不良など原因は色々あるが中でも「適切な治療を早急に受けられない」ことが大きいと私は考える。

この残酷な事実を知り、いかに幼い頃からすぐに病院に通えた自分が恵まれていたかを痛感し病院を嫌っていた自分をとんだ贅沢者だと思った。そしてこの恵まれた環境を生みだしているのは他でもない税なのだ。私たちの小さくて弱い命はたくさんの人々が払ってくれた税によって守られ、義務教育を受け学ぶことができる。税はしっかりと次の世代へ返っているのではないか！私は今まで私の生活を安全にそして快適に守ってくれた税に心から感謝し、租税教室で学べた税理士の方の言葉の真の意味を心に留めた。そして今後も豊かな日本で子供達が育ってゆけるように、また今まで私達を育ててくれた人々が快適に生活できるように胸を張れる納税者になりたい。

租税教室後に改めて地域を見ると、整備された道、信号機、地域を守る交番、すぐに治療を受けれる病院とずいぶん税によって守られていることが分かった。そして売店で物を買う時につく消費税も以前は小銭を余計に出さなければならず正直煩わしく思ったが、今はこのわずかな小銭でも未来への希望を繋ぎ人々の役にたてると思うとなんだか輝いて見える。あの日から私の税に対するイメージは「生活をむしばむ悪者」から「命を紡ぎ、平和を守る身近な英雄」へと大きく変わった。急速な少子高齢化が進み、納税者が減ってしまっている日本では、今後莫大化する社会保障金を少ない納税者で支えることとなるだろう。そんな時こそ税を深く理解し、税の大切さを納税者一人一人が知るべきだ。皆が快く税を国へ託す日本の未来を私は願う。

「税は悪者ですか？」「いいえ、あなたと日本を支える英雄です。」

「当たり前」のこと

川崎市立西生田中学校３年　　森竹　花耶

以前、「外国人へ日本の良さを伝える」というテーマの国語の授業がありました。それをきっかけに私はまず、日本を訪れる外国人の目に、日本はどのように映っているのか調べてみることにしました。その結果、いくつか分かったことがあります。

例えば多くの外国人は、日本の道路や公園などの公共施設がきれいに整備されていることに驚くそうです。そしてさらに驚かれるのが日本の水道水。外国人からすれば飲めるだけでも驚きなのに、味も良いことから、感動する人も少なくないといいます。

それを知り、私はふと思いました。今まで私は、日本の道路や公園を見てきれいだと感じたこともないし、水道水が飲めることも特別と感じたことはないなと。それは、おそらく私に限らずほとんどの日本人に共通する意識なのではないでしょうか。つまり私達にとっては当たり前のことが、外国人にとっては素晴らしいことに思えたのです。

後にこの素晴らしいことを当たり前と感じさせてくれているのは、「税金」のおかげだと知りました。そういえば、今まで買い物をする時、消費税を払いながらもその使われ方について考えたことは一度もありませんでした。ただただお金を多く支払わなくてはならないという、あまり良くないイメージだけがあったような気がします。しかし今回、税金が私達の安全で快適な暮らしを支えてくれていることを知り、私の税金に対する考え方は大きく変わりました。

もし税金が無かったらどうなるのでしょうか。きっと街は荒れ果て、公共のサービスも今までのようには受けられなくなるでしょう。私達の当たり前が当たり前ではなくなってしまうのです。

そうならないように私達が今すべき事。それは、まず私達一人一人がしっかりと税金のしくみや使われ方を知ることが大切だと思います。そうすることで、どれほど税金が私達の生活にとって、重要な役割を果たしてくれているか実感できるはずです。誰だって本音では税金を払いたくないかもしれません。しかし税金への理解が深まれば、その分前向きに納税の義務を果たせるようになるのではないでしょうか。これは今後少子高齢化が進み、私達への負担が重くなっていくことを考えたら、なおさら必要なことだと思います。

外国人が教えてくれた、当たり前であることの素晴らしさ。私は今回、日本の良さとは私達が外国人に教えることというよりも、逆に外国人が私達に気付かせてくれることであるような気がしました。

五年後、東京オリンピックが開催されます。きっと、世界中から大勢の外国人が日本を訪れるでしょう。その外国の人々に日本の素晴らしさを知ってもらうため、そして私達の当たり前が当たり前であり続けるために、今後も税金が力を発揮してくれるのです。

支え合いの日本にするために

坂井市立坂井中学校２年　　一力　望乃

税とはそもそもなんだろう。私は一番最初にふと疑問に思った。新聞やニュースなどで税という言葉をよく耳にするが一体、税というものがどのような役割を果たしているのか考えたこともなかった。

税金とは。国が、公共サービスを提供する資金調達を目的として、国民から徴収するお金。調べてみると税金について少し理解できたような気がした。いわば、税金は、日本国民全員で社会を支えるための会費のようなものだろうと考えた。そう考えれば、日本は税金でなりたっていると思った。例えば、私が普段よく使う教科書。よく見ると教科書の裏にはこう書いてある。「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と。この言葉を見て、私は教科書の価値の重みを感じた。何気なく使っているものでも国民のおかげであたり前のように勉強できているのだと。この言葉で改めて自分が税金に関わっている一人なのだと実感することができた。

自分の身のまわりだけでなく視野を広げると見えることがある。それはまだ記憶に新しい四年前におこった東日本大震災だ。この震災はあまりにも多くのものを奪っていった。その東日本大震災の復興支援にも税金が使われていることを知った。その使われ方は主に仮設住宅の建設、道路の修復、がれきの撤去などだ。他にも、ライフラインの整備や荒れた港の整備など、被災地に大きな影響を与えている。このように税金は国民の生活の支えとして大きな役割を果たしている。それに伴い、人々の心の支えにもなっているのではないかと思う。税金はただ納めるだけのものではない。納めることによっていろいろな場面で私たちの生活を支えてくれている。税金がなかったら、この日本はこんなに豊かな国ではなかったかもしれない。税は国民一人一人が手を取りあってつながりあって全員で全国民の幸せを実現するための素晴らしいシステムだと感じた。国民のみなさんが日ごろ納めている税金が巡り巡って私たちの生活をより便利にしてくれているのだと思う。

この作文を通して、税金の大切さをよく知ることができた。私もいつか納税者となる日がくる。その時には税の大切さを今以上に理解し、自分から進んで笑顔で税を納めることのできる人間でありたいと思う。税金に支えられて生活している恩返しができるといいと思う。納税は日本をよりよくするための第一歩だ。だから全国民が協力しあえば、この日本という国は今よりもっとよりよいものになるはずだ。税に対する感謝の心、これからの日本を築いていく私たちの責任の重大さを忘れないでおこうと思う。そして、自分自身が税金という名の手助けや協力を大切にしたい。

税金に助けられた僕の耳

あま市立七宝中学校３年　　安藤　勇輝

税金の作文を書くことになり、母と税金の話をしていた時に僕は初めてみんなに助けられていることを知りました。

僕は、保育園の三歳の時におたふく風邪という病気にかかり両耳が聞こえなくなってしまいました。病院へ通って治療をしましたが改善されることがないということが診断されて、代わりに人工内耳という手術を受けることになり、聞こえを取り戻すことができました。健聴者のようには難しいけれど、リハビリを受けて普通の生活ができるようになりました。そして、今は元気に地元の中学校へ通って、勉強や部活に取り組むことができています。

今までそのことに何の疑問も持たなかったけれど、母に「人工内耳の手術を受けることができたのも、入院したことも、リハビリを受けることができたのも、みんな税金のおかげなんだよ。」と言われて本当に驚きました。僕は両親に感謝をすることはあっても、周囲のみんなが僕の耳に関わっているとは思いもよりませんでした。

僕は人工内耳の手術はかなりの高度医療であることや二週間程の入院期間が必要であること、人工内耳という機械は高額な医療機器であることを知りました。そのような手術、入院、高額医療機器は税金でみんなに助けられていることも知りました。たくさんのみんなの助けを受けて今の僕が生活できていることを本当にありがたく思いました。

中学生の僕が納めている税金と言えば、お菓子やマンガなど商品を購入した時の消費税ぐらいで、高くても数百円ぐらいです。だけど、僕はみんなからの税金に支えられて今の生活ができて過ごせていることを本当に感謝しなくてはならないなと思いました。今回、税金について話をすることがなかったら知る機会もなかったと思うと改めてよかったと思いました。

今の僕が支払っている税金はほんの少しかも知れないけれど、大人になって働くようになって税金を納めるようになったら、みんなの助けになりたいと思いました。僕が助けてもらったように僕の納めた税金で誰かの役に立つことができればいいなと思いました。税金って難しく考えていたところもあったけれど、みんなの役に立つことができるすごい制度だと思いました。

「支え合う社会を作る」

学校法人関西学園岡山中学校１年　　黒川　紗那

昨年消費税が上がった。毎月のおこずかいから大好きな本を買う時、前より高くなっている。ジュースもお菓子も何もかもだ。正直嫌だと思っていた。何で中学生からも税金を取るのだろう。自分でお金をかせいでいる訳じゃないのに。私が払った税金が何に使われているのか、気になった。無駄使いされてたら本当に腹が立つと思い、調べた。

私の母は、難病だ。闘病生活はもう十年を越えた。通院はしょっちゅうだし、薬も毎日大量に飲む。そうしないと普通に日常生活を送れないから仕方がない。病院や薬局で母は緑の証書を出す。それは特定医療費指定難病受給者証というそうで、母がたくさんの通院や薬でかかる費用を、税金から補助してもらう為のものだ。「これがなかったら私達、今頃ご飯も食べれない生活をしていたのよ。皆に支えられて生きれている事に、感謝しないとね。」と母は真剣な顔で言った。母はなるべく病気が悪くならない様にと、毎日仕事に行きながらも一生懸命体調管理をしている。が、私が税について調べている今日も、関節炎の悪化で病院へかけこんでいる。母はぎりぎりまで無理をするので、病院へ行く時はたいてい相当悪化している。早く良くなってほしい。今は私の出来る事をして母を待つことにした。

今日こうして母が安心して治療を受けられるのも、皆から納められた大切な税金のおかげです。私の大好きな、大切な母を助けてくれて、ありがとうございます。私は心から感謝し、今の幸せな生活をうれしく思った。

日々の生活の中のあらゆる場面で税は活用されている。一番身近なのは学校教育だろう。社会で、世界には学校に通う事すらできない子もたくさんいることを学んだ。日本は税金のおかげでお金持ちもそうでない家も皆学校に行き勉強したり友達と過ごしたりできる。当たり前だと思っていたことも、本当は皆の支えから成り立っている事に私達は感謝しなければならない。

私は税は「支え合う社会を作る」精神から出来ている仕組みだと思う。私の払った税金も、どこかで誰かの大切な人のために使われているのだ。今はまだ消費税ぐらいだけど、将来社会人になって働きだしたら、納税という国民の三大義務をきちんと果たし、今まで助けてもらっている分をお返ししたいと思う。そう思うと、嫌だと思っていた気持ちがすーっとどこかへ行った。世の中にはまだまだ知らない税金の使い道がある。それに気付く度に私達は税金の重要性を考え、支え合う社会に感謝する事を忘れてはいけない。

社会の中の税と私

四万十市立西土佐中学校３年　　佐竹　涼葉

納税制度によって、私たちの生活は支えられている。よって、納税は必要な義務である。そう教えられ、「公共の事業に使われるのなら、まあ必要だろう」と思っていた。だが、消費税が上がり、支払うお金が増えると、私が払った税金はどこにいくのか、どんな使われ方をしているのか。具体的に、いつ、どんなときに役立っているのだろう、と興味が出てきた。

調べてみると、私は実に多くの恩恵を受けながら生活しているのだと実感した。まず、昨日は病院で目の検査をしてもらったが、診察代は千円足らずだった。領収書には自己負担何円と書いてあり、診療にかかったお金の大部分は公的負担だった。

驚いたのが中学校の学費のことだ。学校を運営するのに、生徒一人当たり、月に約十一万一千円かかるのだという。もしそれを全てそれぞれの家庭が出さなければならないとしたら、どうだろう。私や兄弟の分を合わせると、両親の収入だけで足りるのだろうか。私の学校生活は、税によって守られていた。

税は、公的サービスという形で私の身近にあった。急病で困ったときは救急車が来てくれる。狭かった道が広くなり、トンネルができて橋が架かり、隣町まで自転車で行けるようになった。朝、学校の前で交番のお巡りさんが交通安全を呼びかけてくれる。いつも当り前のように思っていたことの中に、「税」が使われていた。

また、東日本大震災の復興や、発展途上国の経済援助のためにも使われている。私たちが払ったお金で、何百キロ、何千、何万キロも離れた所で困っている人を助けられるのだと思うと、とてもあたたかな気持ちになる。

そう考えると、さっきまで私が使っていた「払った」という表現がおかしいように思えてくる。「払う」は手元になくなるイメージだけど、税金はいつの間にか自分に返ってきている。私はまだ働いていないので、むしろ返ってきている方が多い。「納める」の意味は「ある状態にきちんとなるように片づける」とあり、生活の中で循環している税金には、「納める」の方が合うと思えるからだ。

色々調べて分かったことは、税を納める人がいるおかげで、私たちの日常生活が安定しているということだ。

しかし、私たちが大人になる将来は、少子高齢化が進み、納税者が減り、財源が不足してしまうという。今でさえ、国の財政のうち歳入の約四十％は公債金収入つまり借金をしている状態で、歳出の四分の一がその返済に使われている。なぜこんなことになったのか、立て直すにはどうしたらいいのか。ヨーロッパ諸国のように税金を上げ、国民負担率を上げることも必要なのではないか。

調べてみて改めて、納税の大切さを知った。大人になったら、働いて、きちんと納税したい。社会のためにできる、恩返しの第一歩だ。

私のパワーの源

諫早市立諫早中学校１年　　松原　美月

中学校に入学してすぐ、陸上部に入部した。練習場所は、ほとんど学校のグラウンドだが時々、自宅から歩いてすぐの総合運動公園のサブグラウンドで行う時もある。生まれて初めてスパイクをはいてタータンを走った時は、土の上とちがってしっかり受けとめられている感じがして、とても速く走れた気がした。今まで味わった事のない速さを感じた。この総合運動公園には、小さい頃から父に連れてきてもらい、アスレチックやサイクリングロードで体を動かしていた。

そんななじみ深い運動公園の競技場で先日陸上の県大会が開さいされた。県内各地の中学校から、たくさんの選手が来た。いつ来ても手入れが行き届いた芝ふやきれいに咲いた花は、密かにわたしの自慢！両親が生まれた頃にできたこの場所は、昨年行われた国体に合わせてリニューアルされ、清潔さ、美しさ便利さに磨きがかかったようだ。もしもこんな素敵な競技場を個人ではもちろん、陸上部みんなで造ることは不可能だし、いつ来ても季節の花が咲き、芝ふが生え、コンディションの良いタータンに管理することも絶対に不可能だ。そこには、大人の人達が納めてくれている「税金」が使われていると、この作文を書く時に父に教えてもらった。

個人ではできることが小さいけれど、その小さいことを集めると、大きな物になる。一人一人が納める税金を集めたら、こんなに大きな総合運動公園ができるのだと思った。私が今払っている税といえば消費税。おやつや文具を自分のお小遣いで買う時、毎回損をしているような気持ちになっていた。もうすぐ消費税は十パーセントに上がると聞いて、ますます嫌な気持ちになった。しかし、もしかすると、私の払った税金が、どこかの誰かのためになり、その人たちが喜んだり、便利だと思ってくれるものになっているかもしれない。お金を持たない子供からは少しだけ、たくさん持っている大人の人からはそれに見合う分、税金として集め、国や人々の役に立つ大きな買い物をしているのだと思った。せっかく払う税金なので使い道を決める係の人は本当に必要で、みんなが喜ぶことに使ってほしいと思う。今、税金はたくさん払えない子供なので、物や施設を大切に使ったり、サービスに感謝したりすることから始めたい。

大人になった時、国中の人の幸せを支える…と誇りを持って税金を納めたいと思う。

先日、市民大清掃があった。家から競技場への近道の伸びきった草や木がきれいにカットされ、ゴミ袋に詰められた。山積みになったたくさんのゴミはその一時間後、市の清掃車が回収していた。みんなのために税金を納めてくれた人、市民のためにゴミを回収してくれた人、どうもありがとうございます。これでまた、競技場へ行きやすくなり、思いっきり気持ちよく走ることができます。

地域を育てる税

大分大学教育福祉科学部附属中学校３年　　牧　功大

私たち中学生にとって、正直なところ、税を納めるという感覚はまだあまりありません。物を買うときに払う、消費税ぐらいなものです。しかし、この夏、私は意外なところで税が使われていることを知りました。

私が住む地域には、百年以上の歴史をもつ夏祭りがあります。夕暮れから夜にかけて、太鼓や鐘が町内に鳴り響き、山車の巡行が行われるのです。私の地区には二台の山車がありますが、昨年、老朽化していた一台が全面補修され、立派な姿に蘇りました。この補修は、地区の大人たちの手によって行われたのですが、これにかかる材料費等の経費は地区の方々からの寄付と、市からの補助金が充てられているのだそうです。この補助金とは、すなわち税金です。

また、私が小学生のときには、地区の公民館が設しく建設されました。この建設にも一部、補助金という形で税金が使われているそうです。

「税」とは、公共サービスや公共施設の整備など、個人では決してできないことを皆で負担し合うためのものです。これまで、税の使われ方というと、学校教育や道路整備、生活保護や高齢者等の福祉など、必要不可欠なものに使われるというイメージが強くありました。それがないと、社会で生きていけない、命にかかわる。そういったことに使われていると思っていたのです。そういった意味では、祭りや公民館などは、私たちが生活していく上で絶対に必要というものではないのかもしれません。しかし、テレビや新聞などでは、事件などが起こると、地域のつながりが希薄になったことが原因の一つだということが報じられているのを目にします。また、東日本大震災のときにも、日頃から住民がまとまっていた地域では比較的被害が少なく、避難所での生活も秩序が保たれていたという話を聞きました。

私たちの地域でも、祭りや公民館活動を通して、地域の人々が顔を合わせて協力する機会が生まれています。このことが地域の防災や防犯をはじめ、町内美化、健康づくりなど様々な面で良い状況を生み出していると思います。

普段は気付かないのですが、私たちが暮らす地域の絆を育てていくことにも税が役だっているのだと感じました。

今はまだ、税の恩恵を受けるばかりですが、私も将来、社会の一員として税を納めることでも、地域を支えていけるようになりたいと思います。

学校生活によりそう税金

北谷町立北谷中学校３年　　山内　レイラ

「九年間の義務教育を受けるのも、あと一年。今年で最後だね。」中学校の最上級生である、三年生に進学すると同時に、母がぽつりとつぶやきました。

受験生という立場になった今、これまでの学習の中身をしっかりと復習し、さらに練習を重ねて、自分なりにまとめあげ、たくさんの古い記憶をよび戻しつつ、新しい知識も吸収しなければなりません。その時の必需品が教科書。学習机にぎっしりと並べられたこの一つ一つの教科書は、無料で配ふされました。よく見てみると、「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と、記されています。九年間の義務教育を受けるにあたって、伝統ある立派な校舎があり、そこに集う、たくさんの友達や先生と共に学ぶことができ、無料で教科書が配ふされる。さらに、有意義な学校生活を送るために、体育館や運動場が整備されていること。給食時間、手を洗う際に、蛇口をひねればきれいな水が流れてくること。学校から出たゴミが、ゴミ収集車によってきれいに集められていくこと。これらのことも、税金によって整備された、水道施設やダム、ゴミ処理場などがあるからです。

このように、思い返してみると、私が「学ぶ」ために、義務教育を受ける一人一人の児童・生徒が「学ぶ」ために、普段の何気ない学校生活の中でも、税金と大きく関わっていたんだなと感じました。これにより、私たちの生活はより豊かで、便利になっています。

高校に進学すると、教科書を受けとるのにもお金がかかるし、授業料もかかります。きっと、高校に入学してからじゃないと、気付かないこともたくさんあると思いますが、今の私は、税金に、とても感謝しています。

中学生である私は、物を買うときについてくる消費税しか払っていませんが、いずれは高校、大学、社会人として就職します。税金は、消費税以外にも、いくつかの種類があることを学びました。車を所有する私の両親は、自動車税を納めているし、沖縄県民として、県民税も納めています。これまで使わせていただいた税金に、感謝と、恩返しの気持ちを込めて。さらに、わたしの次の世代、またその次の世代の、日本を担う子どもたちへの期待を込めて、大人になったら、喜んで税金を納めていきたいです。

そして、これらのことを、多くの人に知ってもらいたいと思います。税金によって、私たちの生活がより豊かで、便利になっていること。

これが、九年間の義務教育を経た後の、私たちが果たすべき役目なのかもしれません。